

学戦都市アスタリスク 消失の魔術師

ネタバレOK派

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

水上学園都市「六花」、通称アスタリスクに在住している少年、くもさきりく雲崎理空。

レヴォルフ黒学院序列四位の《消失の魔術師》ヴェイカントと呼ばれる彼は一体何を成していくのか。

これは夢も希望も持っていない少年が色々な人間と関わっていく物語。

目次

《鳳凰星武祭》

星導館の転入生 | 1

星導館の転入生② | 11

六花園会議 | 17

《疾風迅雷》 | 25

《鳳凰星武祭》開催前 | 31

《鳳凰星武祭》編

エルネスタ・キューネ | 37

沙々宮紗夜 | 43

《戦律の魔女》 | 52

《悪辣の王》 | 60

チーム・ランスロット | 67

『黒猫機関』 | 73

《獅鷲星武祭》

《処刑刀》 | 81

《時律の魔女》 | 86

若宮美奈兔 | 93

ペトラ・キヴィレフト | 101

チーム・赫夜 | 111

沙々宮家にて | 118

リーゼルタニア | 128

《孤毒の魔女》 | 136

ギユスターヴ・マルロー | 144

綾斗の依頼 | 152

理空の能力	157
《華焰の魔女》	165
学園祭	171
《時律の魔女》②	179
《万有天羅》	185
《万有天羅》②	193
ヤン・コルベル	198
《獅鷲星武祭》編	
舞台裏の陰謀	204
夜吹英士郎	210

《鳳凰星武祭》 星導館の転入生

「つつまんねえな……」

そう呟く紺色の髪をした少年、雲崎理空。紺色の髪に大きな金色の瞳と中性的な見た目で整った顔立ちをしているが怠そうな雰囲気ですべて台無しになっている。

「そう言うなって。楽しくやろうぜ、楽しくよお！理空！」

「長居する気もなかったってのに仲良くもない奴に声かけられてここに留まる羽目になったんだぞ？楽しくなんかやれねえっての、ロドルフオ」

愉快そうに理空と会話するのはレヴォルフ黒学院の序列二位ロドルフオ・ゾツポ。《バサドローネ碎星の魔術師》の二つ名を持っている。

ロトリフト 歓楽街最大のマフィアである『オモ・ネロ』のトップのロドルフオはいつものごとく歓楽街に来ていたわけだが理空は時々カジノに遊びに来る程度で今日は少し稼いで帰ろうとしたところロドルフオと鉢合わせして引き止められてとある建物近くで雑談（になっていない雑談）をしているという最中であつた。

「そもそもお前仲良い奴とかいないだろ？友人0だしな」

「人のこと言えないだろ。というかうちで友人とか求めること自体間違っている」

「はっはー！違いねえ！ところでお前序列戦とか申し込まねえの？少しは時間潰れるぜ？」

「お前含めてあと3人しか上がらないしな。オレは戦闘狂じゃないし」

理空も同じく序列四位の《ヴェイカント消失の魔術師》の二つ名を持つ学生である。適当に過ごすつもりが成り行きで決闘を当時の四位から挑まれ勝ってしまったため《ペイジワッセン冒頭の十二人》になってしまった。特権が大きいから返上もしていないのだが。

「お前こそ《リンドブルス王竜星武祭》とか出ないの？今のところ一番あの絶対王者に勝てる可能性あると思うけど？」

「気分が乗らなかつたからな……けど今度のやつは三連覇を防ぐために各学園から色んなやつが出て大乱戦になりそうだからな。楽しそうなら次回は出る」

「ふーん。まあオレは興味ないけど。精々頑張れよ」

「そう言つて立ち上がる。」

「おいおい、もう行くのか？久しぶりに一戦交えようかと思つてたのによ」

「お前の相手するのは疲れるから嫌。帰つてダラダラする」

周りの万応素マツナが吹き荒れた。そう思つた時にはもう理空はロドルフォの視界から消えていた。

「相変わらず便利な能力だぜ」

そう呟いたロドルフォの声は誰にも聞こえなかつた。

*

言葉通り寮の一室でダラけてニュースを見る理空。ハプニングでも起きてないかと期待して端末を弄くる。

(何か面白い話題はないのかねえ——おっ)

早速面白そうな記事が見つかつた。

『転入生、初日から《グリユーエンローゼ華焰の魔女》の胸を揉む!?』

別に知り合いというわけでもないのだがそれでもあのお姫様が転入生と決闘をしている事に興味が湧いてきた。

動画を再生してみると中々見応えのある勝負が繰り広げられている。

転入生は《ダント魔術師》ではない様だがそれなりの剣術を持っている。

(にしても反応速度と身体の動きがアンバランスだな。何か制限でもかかっているのか?)

楽しみながらも違和感を感じてしまう。

(転入生の名前はと…天霧綾斗か。天霧？聞いたことあるよう

な….)

そう思った途端タイトル通りのシーンが出る。普通の生徒ならここに注目するのだろうが、理空が注目したのはその前だった。

(第三者の横槍か。にしてもこんなあからさまにやるとはな)

自分の学園の生徒を潰したところで何のメリットもない。時々上に上がりたいがためにやる人間もいるかもしれないが今回の場合は違うようだった。

この他にも気になる記事があった。

『《華焰の魔女》、謎の襲撃犯を撃退!』

星導館学園では確か《鳳凰星武祭》^{フェニックス}に出る有力選手が怪我をするという事故が相次いでいる。偶然というには少し出来過ぎでいると感じていた。となると考えられるのは他校の介入ということになる。

世間の目を気にする聖ガラードワース学園とクインヴェール女学園は論外。となると、残るはレヴォルフと界龍^{ジエロン}第七学院とアルルカント・アカデミーのどれか。

(この3つの中で一番怪しいのは――)

理空は思考する。界龍はそもそもそういう勝負を仕掛けるタイプではないため可能性は低いと言える。レヴォルフは怪しいが得意とするのは《王竜星武祭》であるためタイミングがおかしい。

よって今回の黒幕はアルルカント・アカデミー。

(何を企んでんだか)

特に何か思うところがあるわけでもないが、純粹に疑問が湧いてきた。卑怯だのなんだの言うつもりもない。

やられる方、嵌められる方が間抜けなだけ。

それが理空の考え方だった。

一通り思考したところで今日はもう寝ることにした。

「明日久しぶりに出掛けてみるか。運が良ければ実物を見れるかもしれんし」

*

翌日。腹の音を鳴らしながら目を覚ます。時計を見てみるとすでに11時半を回っている。予想以上に眠りすぎたためもう朝飯はいいやと思いい外の飲食店で済ますことにした。変装をして外に出る。

ファストフード店でバーガーを齧る。星導館の近くに行つて天霧綾斗が寮から出てくるのを待つつもりがまさかの寝坊で頓挫してしまった。

今日は諦めようと思つた時である。

「それにしてもユリスって本当にお姫様？」

穏やかな声が聞こえてくる。なんとなく視線を向けてみると天霧綾斗とユリス・アレクシア・フォン・リースフェルトが一つ間を挟んで昼食を食べていた。

(マジか、ラッキー)

そう思いながら改めて観察してみる。

フラーナ星辰力の総量はかなり多い。ただ漏れ出ている量が少な過ぎる。意図的に抑えている可能性もなくはないが……

(やっぱ何かしら制限がかかってんな。誰が？何のために？制限が完全に外れた時の強さは？オーガルクス純星煌式武装は適合していないの——)

「いいから俺と戦えって言つてんだよ！」

大声で思考が途切れる。

筋骨隆々な大男がユリスに突つかかっている。

(うるせえな)

内心毒付きながら無視して食事を進めようとする。

「ふざけんな！俺様が卑怯者だと!??だったらテメエから叩き潰してやるよ！」

大男は煌式武装出して地面に叩きつける。

チツと小さく舌打ちをする。さすがに耳障り過ぎる。どうにかしてあの男を追い出したいところだが、こんなくだらないことで能力を

使うのは馬鹿らしい。取るとしたら別の手段だが、煌式武装を使ってしまえば警備隊が駆けつけてきて面倒になる。なら取れる選択肢は一つだ。

「俺様を卑怯者呼ばわりしておいて逃げるっての——っ!?？」

「!?？」

殺気を一瞬向ける。それだけ。特に証拠も残らない。

大男が理空の方に顔を向ける。

「おっ、お前……！」

「何だよ？オレが何かしたか？関係ないオレまで巻き込むな。そもそもここは飲食店なんだから騒ぐな。飯食わないならさっさと帰れ」
「ぐっ、くく……」

唸りながら睨む大男。

「レ、レスター！もうよそうよ！レスターが正々堂々戦うのは知ってるから！」

「そうですよ！決闘の際を伺う様な卑怯なマネ、レスターさんがするはずがありません！」

取り巻き二人が大男を宥めながら出て行く。

どうにか上手くいった様である。

「ありがとう。助かったよ」

綾斗が声をかけてくる。

「何の話だかさっぱりだな」

「とぼけるならそれでいいけど」

「助けてくれと頼んだ覚えはないのだがな」

「ちよっ、ユリス……」

噂以上にプライドが高いお姫様である。なんて能天気なことを考えながらわかりきっていることを聞いてみる。

「例の星導館の転入生か？お前」

「あ、うん。そうだよ。えっ、知ってるの？」

「こいつ記事見てないのか？と疑問を持ちながら悪戯心が同時に湧いてきた。

「ああ、なんせそのお姫様の胸を揉んだってことで有名だからな」

爆弾を落とす。

二人ともみるみる顔が赤くなっていく。

「そ、その話を思い出させるな!」

「あつ、あれは違くて!」

「いやいや、転入早々やるなど感心したぞ。ラノベの主人公みたいだなお前」

「そつ、そんなつもりじゃなくて!」

「反応を楽しんだところで質問してみる。」

「で、お前らは何してたんだ?デート?」

「違う!」

「随分と必死だなあ、オイ」

「だから……!」

「真面目な話、何してたんだよ?大して深い関係でもないだろう?」

深い関係でないことがわかっていながらデートでないことは分かっているだろう、という文句は飲み込んでさつき助けてくれたのは事実なので教えることにした。コホンと咳払いをして答える。

「街の案内だ。こいつのな。その件での礼でな」

「胸揉まれた礼に?」

「そんなわけがないだろう!」

「じゃあ何の礼?映像しか見てないからわかんないんだけど?」

「そつ、それは……」

二人とも口籠る。横槍での件だと言うことは予想が付いていたがわざと聞くあたり理空も相当性格が悪い。

目を合わせて話し始める。

*

結論から言うと、ほとんど予想通りだった。決闘の横槍から庇ってくれた礼として学園内と街の案内を頼まれたらしい。

ただこの様子だと黒幕がアルルカントということには気付いて無さそうだった。

教えてやるかどうか迷ったがやめにした。さっきの奴らに不可解なことを言っていた奴がいたことにユリスも気付いている様子だっ

だから。

これで潰れるようならそれまでの奴らである。

そう結論付けた。

「改めて、天霧綾斗だよ。よろしくね」

自分から自己紹介をしてくるあたり律儀な人間であることが伺える。

「雲崎理空だ。レヴォルフ高等部1年」

適当に返しておく。

「綾斗。早く行くぞ。少し長居し過ぎたからな」

「あ、うん。理空も良かったら一緒にどうぞ?」

「あ?あー……」

綾斗を観察できるのは願ってもないことではあるが……

ユリスが警戒心剥き出しでいるためどうするか迷う誘いである。

「んじやぶ」一緒にするわ」

ユリスを揶揄うのも楽しそうだったため同伴することにした。

「何かご不満でも?お姫様」

「……別にそんなものはない。それとお姫様と呼ぶのはやめろ。私にはユリス・アレクシア・フォン・リースフェルトという名前がある」

「いやお前だけ自己紹介してなかったからだけど」

「んぐっ……う、うるさい!早く行くぞ!」

*

「これで一通り案内は終わったな」

「あ、うん。ありがとう」

「礼には及ばん。借りを返したただけだ」

「……………」

あれから観察してみたもののわかったことは少なかった。これ以上は時間が進むか戦っているのを見るほか無さそうだった。

「理空も付き合わせちゃってごめんね」

「ん?ああ、別にいい。暇だったからな。そういやリースフェルト、お

前《鳳凰星武祭》に出るのか?」

「ああ」

「パートナーは?そっちの序列一位か?」

「う……それはだな……」

「……まさかまだ決まってるのか?」

「あ、ああ。いない……」

「実力以前の問題だな。エントリーすら出来ないぞ?」

「分かっている。何とかしないと……」

普段の凛々しい姿とは一転、弱々しい声を出す。新鮮に感じていると近くから武器の音と罵声が聞こえてきた。

「あれって……レヴォルフの生徒?」

「……まずいな……嵌められた」

「えっ?」

「よくある手だ。乱闘に見せかけてターゲットを痛めつけるんだ。金さえ積みばすぐやろうとする」

「じゃあユリスを狙ったのはレヴォルフだったってこと?」

「さあな。まあ、これは明らかに正当防衛だな」

「あはは……ミディウムレアくらいで勘弁した方がよいよ」

*

あつという間にユリスが全員黒焦げにしてしまった。実質前シーズン最弱の学園とはいえ《冒頭の十二人》をこの程度の腕で倒そうとする自分の学園の生徒に呆れてしまう理空だが、金を積まれたのならば一応動機は理解できる。

「おい、誰の指示だ?」

「ヒイツ!雲崎理空!??なんでこんなところに!?!?」

「いちいちビビんな。別にお前らなんて興味ねえよ。で、誰なんだよ?」

「あ、あんたを狙えって言われたわけじゃない!そこの2人を痛めつけば金をくれるって!」

「顔は見えないのか?」

「見てない。本当だ!フードを被っていて顔は見えなくて……って

あいつ！あいつに頼まれたんだ！」

チンピラが指を刺した先で、黒ずくめの男(?)がこちらを蔑みから覗きこんでいた。直後ユリスが走り出した。

「ユリス！深追いは危険だ！」

綾斗が制止しようとするも間に合わず、綾斗も追いかける。

(血気盛んな奴らだな)

理空は黒ずくめの男(?)ではなく綾斗が見える距離を保とうとする。

直後。矢が飛んでくる。冷静に回避するも別方向からも飛んでくる。銃型煌式武装を起動して撃ち落とす。何発か撃ち牽制すると、黒ずくめの男(?)達は撤退した。

「集団で行動していたのか」

ため息をつき、綾斗とユリスの方に行くと二人とも怪我はないようだが、綾斗の服は所々破けている。

「大丈夫か？綾斗」

「何とかね」

「全く……少し油断しすぎではないか？」

「あれが俺の全力だよ」

「一対多は苦手なのか?……」

「そんなことより早くここから離れた方が良いぞ。警備隊が駆けつけてくる」

「ああ、そうだな」

理空は、綾斗に近づき、綾斗にしか聞こえない声で。

「反応と身体の動き、星辰力の流れが不安定だな」

「っ!!??」

綾斗の表情が強張る。

「安心しろ。別に口外はしない」

「そうしてくれると助かるな」

「んじゃ、二人とも精々気をつけて帰れよ」

能力を使い二人の視界から消える。

「消えた……?」

「二つ名通りの能力ということか」

「え？」

「いや、何でもない。帰るぞ」

「う、うん」

ユリスも綾斗も理空に助けられたわけだが、ユリスは理空の能力を見たことで、綾斗は自分の秘密を見抜かれたことで警戒の気持ちが拭えなかった。

星導館の転入生②

翌日。学園に行き、普通に授業を受ける。

理空はレヴォルフの生徒の中では比較的まともな人間という認識をされている。他校とも揉めたことはない上に授業もほとんど出席しているからである。実際のところ、授業なんてほとんど聞いていないのだが。

国語や社会はともかく、数学や理科についてはほぼ全て知っている。

なので暇つぶしに使っているだけである。今日も適当に流して午前中が終わった。昼休みになったので寝る体制になったその時である。

「理空さん。ちゃんと授業聞かないとダメですよ？」

「……ウルサイスカ」

プリシラ・ウルサイスカ。今年度クラスメイトになって以降、何故か自分によく話しかけてくる人間である。レヴォルフの中では珍しい真面目な生徒だ。理空のように授業を聞き流すということもしない。大して興味もないので最初は顔も名前も覚えていなかったが、何回も来るため名前と顔は覚えてしまった。

……余談だがそのことを知った姉である序列三位が理空に喧嘩を吹っかけてきてその時初めて姉妹だと知ったがそれは別の話。

「理空さん、聞いてますか？」

「聞いてない」

「もう……」

不満げな声を立てるが一切耳に入っていない。どうせほとんど会話にならないから立ち上がる。

「どこに行くんですか？」

「購買」

嘘である。本当は昼食を持ってきているがこのまま無視し続けると面倒そうなので外に出ることにした。

* 「さて……」

パンを齧りながら考える。あの件はどう進んでいくだろうか。堂々と襲ったということはおそらく襲撃犯側も余裕がなくなっているということだろう。それに、星導館の生徒を複数人怪我を負わせるのはアルルカントの生徒だけでは無理がある。星導館の生徒を引き込んでやらせているのだろう。アルルカント側は煌式武装^{ルークス}などを支援すれば良いのでバレたとしてもそいつを切り捨てれば証拠は残らない。

(昨日の集団は人形だった可能性もあるな)

仮に、人形を動かすことが可能な能力者なら遠隔操作をすればアリバイは確保できる。あくまで『仮に』だが。

どっちにしても、また近いうちに襲撃犯が動くだろう。そうなれば、綾斗の実力を見ることも可能だ。ユリスだけが襲われた場合でも綾斗は動くだろう。あれは相当なお人好しだ。

結論付けたところで教室に戻った。午後の授業も聞き流した。

* 放課後。夕飯を買う為にコンビニに寄る。適当な弁当を取りカゴに入れる。会計を済ませ、外に出ると知った顔が前を通りすぎた。

(何で天霧がここに?)

綾斗だった。コンビニに寄るのだったらまだ分かる。だが、真っ直ぐに通りすぎたのは解せなかった。走って行った方角は再開発エリアだったからだ。どう見てもそういう場所に無縁の人間が向かって行ったということは――

「襲撃犯が動いた、か」

そうとしか考えられない。そして綾斗の实力を見たい理空としてはこれはチャンスだ。綾斗を尾行することにした。

* 再開発エリアに到着した。廃ビルが立ち並ぶ。弁当をどうするかでもたついている間に綾斗を見失ってしまった。

「やっちゃまったな……」

そう落ち込んだ時。巨大な星辰力プラナーナを感じる。これよりも大きいものは知っているが今までに見た中でも上位に入る量だ。

根拠はないが、この星辰力は綾斗のものだと直感した。急いで向かうと、昨日の大男の取り巻きの一人である痩せた男と綾斗と綾斗にお姫様抱っこされているユリスの姿があった。

このことについては大して驚きはしなかった。しかし、綾斗があの純星煌式武装オーガルクスを使っていたことには少し驚きがあった。

「――《黒炉の魔剣》と適合したのか」

《黒炉の魔剣》。『四色の魔剣』の一振りで星導館が保有する純星煌式武装の一つ。全てを焼き切るとも言われている剣で純星煌式武装以外では防御不可とされている。

「ふ、ふふ、しかし使い手があなたでは宝の持ち腐れですね。不意打ちにも限度がありますよ?」

「黙れ。不意打ちしかできないのはあなただろう、サイラス」

「……言ってくれますね。その発言を後悔しろ!」

そう言つて100体以上の人形が綾斗に攻撃をする。数の力で押し切ろうという魂胆なのかもしれないが……。

(ほとんど単純な動きしかしてないな。完全に自由に動いているのが6体、ある程度パターン化した動きをするのが16体、残りは腕を振ったり引き金を引いたりしているだけ。……不意打ちしかできないって言ってる天霧が正しいな。こんな粗末な能力ネタがバレればもう通用しない)

理空が見抜いたことを綾斗も気付いていたようで挑発気味にそれを指摘する。

「くそがああああ!潰れる!潰れてしまえ!」

そう言つてサイラスは一斉攻撃するが綾斗は冷静に回避しながら《黒炉の魔剣》で次々と人形を直つ二つにしていく。その動きは昨日のそれとは比べ物になっていない。サイラスの表情が徐々に絶望に染まっていく。ついに綾斗が最後の一体を切り裂き、《黒炉の魔剣》の剣先を向ける。

「ゲームはおしまいだよ、サイラス」

「まだだ！まだ僕には奥の手がある！」

そう叫んだ直後、巨大な人形が出て来る。

「やってしまえ！僕のクイーン！」

「五臓を裂きて四肢を断つ、天霧辰明流剣術中伝——『九牙太刀』！」
そう綾斗が叫んだ後は一瞬だった。巨大な人形の両手足が斬り落とされ胴体も抉られていた。

「ひっ、ひいひいひいひい！」

サイラスは慌てて逃げようと人形の上に乗って上空に逃げて行く。

——のを理空が阻止する。乗っていた人形が消えてサイラスは地面に落下する。

「がはっ……な、何が起きて……」

「逃げたって無駄だったの。諦めろ」

「理空!?!?どうしてここに?」

「お前が走って行ったのを見たからな。来てみたんだ。にしても、王子様とお姫様みたいだな」

「こっこれは違くて！」

「そっそうだ！変な言い回しはやめろ！」

「ハイハイ」

適当に押揃っている隙にサイラスが逃げようとした瞬間に理空が能力を使用して地面の一部に穴が空けサイラスの両足がはまってしまふ。

「お前らしかないのか？」

「いや、下にクローディアがつ、ぐっ！」

「綾斗?どうした?」

綾斗の周辺に万応素^{マナ}が集まる。《魔女》^{ストレガ}や《魔術師》^{ダンテ}が設置型の技を発動する際によく見られる現象ではあるが……

自分の能力を使用しているのであればここまで苦しむのは不自然すぎる。

「があああああああ！あっ……」

「綾斗?しっかりしろ！」

鎖のようなものが綾斗に絡みついたかと思えば気絶してしまった。

理空はこの能力に見覚えがあった。

(そういうことか。天霧はあの女の――)

合点がいった。他にも気になることはあるが、まずは綾斗の介抱が先だろう。

「リースフェルト。天霧を治療院には無理か。お前も怪我してるし。天霧の側にいてやれ。こいつの引き渡しはやつとくから」

「……いいのか?」

「ああ。まずはこいつの両足を抜かないとな」

はまつている両足を無理矢理引っこ抜く。鈍い音が聞こえる。おそらく足首から先の骨と肉がズタズタだろう。

「ああああああ!!?」

「おい、やり過ぎじゃないか?」

「これで逃げられないだろ?」

「それは…… そうだが」

「まあ、お姫様には刺激が強かったかもな。じゃ、オレはこれで」

「あつ、ああ」

*

路地裏にサイラスを連れていた。色々と聞きたいことがあるからだ。

「ひっ、《消失の魔術師》……」

「いくつか聞きたいことがある。裏にいたのはアルルカントか?」

「は、はい……」

「どの派閥の人間だ?」

「そつそれは……」

「答えろ」

「そこまでにしていただけませんか? 《消失の魔術師》」

高い声の元の方向に視線を向ける。凶々しい双剣を持った金髪の少女がいた。

「《千見の盟主》……。初めましてと言うべきか?」

「いえいえお気になさらず。ですが彼の扱いについてはこちらに任せただけじゃないでしょうか? 彼にはまだ利用価値があるので殺され

てしまつては困ります」

「別に構わない」

理空の返答にクローディアは意外そうな顔をする。

「正直、渋られると思つていましたが？」

「最低限知りたいたことは知れた。後は好きにしろ。そいつに運んでもらうといい」

柱の陰から男が現れる。

「いやー。まさか気付かれるとはなー。さすがレヴォオルフの序列四位」

「その気配の絶ち方……『夜吹』か？」

「驚いたぜ……。俺は里を抜けた身だから関係ないけどな」

「そうか。じゃあな」

「今日のことは、」

「他言無用だろ？わかつている」

「ええ、ではまた」

踵を返し角を回り能力を使つてその場から離れる。やはり今日綾斗について行つたのは正解だった。綾斗の情報のみならずアルルカントの情報。さらには『夜吹』の一人をお目にかかれた。

また、おそらく綾斗とユリスはタッグを組んで《フェニクス鳳凰星武祭》に出てくるだろう。はつきり言つて、前シーズンは《リンドブルス王竜星武祭》に比べるとレベルが低いと言わざるを得なかったが、今シーズンは楽しめそうだった。

そして、クローディアの最後の言葉……近いうちに接触してくると見て良いだろう。惰性で生きている自分にとつては程よい暇つぶしにはなるかもしれない、と理空は少し期待した。

六花園会議

とあるホテルの屋上にて各学園の生徒会長が集まっていた。

聖ガラードワース学園生徒会長 アーネスト・フェアクロフ

レヴォルフ黒学院生徒会長 デイルク・エーベルヴァイン

ジェロン界龍第七学院生徒会長 ファン・シンル范星露

アルルカント・アカデミー生徒会長 左近州馬

そして、

「皆さん、ごきげんよう」

「ようこそ、ミス・エンフィールド。相変わらず時間通りだね」

星導館学園生徒会長 クローディア・エンフィールド

最後の一人が来たため六花園会議を始めようとするアーネスト。

「それじゃあ全員揃ったね」

「おや？まだ一人来ていないようですが……」

「ああ、彼女は欧州ツアーの真つ最中だよ」

「流石は世界の歌姫、多忙のようですね」

そう、クインヴェール女学園の生徒会長は芸能活動を行なっている。そのためこういった仕事を休むことが多いのだ。今回も委任状を預けていた。

「ふん。どうせいともいなくても大して変わんねえだろうが、あんな小娘」

悪態をつくのはデイルク。非《ジエネステラ星脈世代》の身ながら生徒会長の座についた男である。カリスマ性もリーダーシップも無いに等しいが人を使うことに関しては悪魔的才能を持つ人間である。ありとあらゆる人間に嫌われていて非星脈世代にも関わらず《タイラント悪辣の王》の二つ名を持っている。

「他学園の生徒を侮辱するのは控えてくれるかな？双剣の総代」

「侮辱だあ？笑わせんな。あの女、これで何回目の欠席だ？クソの役にも立ってねえよ」

アーネストが注意をするも、デイルクの言葉は止まらない。

「ま、見た目だけで選ばれた人間に期待をし過ぎるのも野暮なもんだが——」

「やめたまえと言ったはずだよ？」

ディルクの喉元に剣が突きつけられる。クローディアは思わず感嘆してしまった。煌式武装ルークスホルダーから抜き放ち、起動し、振り抜くまでの所作が恐ろしく滑らか。

それでいて速い。

「ほほおー、面白え。やってみるか、《聖騎士》殿？その瞬間ガラードワースは終わりだぜ？」

しかし、ディルクは気圧されるどころかささらに挑発する。

「だろうね」

直後、首に白い刃が差し込まれる。——が

「ふん、子供騙しの玩具だな」

首元からは一滴の血も流れない。

「ほほ、相も変わらずお主らは仲が良いのう。ようも毎回、飽きもせずそうじゃれ合えるものじゃ」

そこへ声を掛けたのは、星露。金髪の青年の左隣にちよこんと座った少女だ。いや、少女というよりは、童女と言った方が正しいだろう。愛くるしい顔立ちに黒髪を蝶の羽のように丸く結わえ、あどけない笑みを浮かべている。しかしその立ち居振る舞いには、どこか老成された落ち着きさえ感じられる。

「じゃが戯れもそのあたりにしておくが良いぞ、小僧ども。でないとな僕も混ざりたくなってしまうからのう」

アーネストはため息をつき、剣をしまう。

「ふふ、公主の調停ともなれば仕方ありませんね」

クローディアが笑うと、ディルクは大袈裟に肩を竦める。そしてすぐに駆け引きを始める。

「そーいや面白れー話を耳にしたんだがよ、クローディア」

「なんででしょう？」

「星導館とアルルカントが新型煌式武装ルークスの共同開発に合意したって話なんだが？その前にはうちの《消失の魔術師ヴェイカント》と接触もしたそうじゃ

ねえか」

「ほう?」

「へえ……」

星露とアーネストもその話題に食い付く。共同開発の件についてもだが、今までほとんど得られなかった理空の情報だ。そんな人間に他校の生徒会長が接触したとなれば無視できるものではない。

しかし、クローディアとて馬鹿正直に答えるつもりもない。

「あら、流石と言いますか……耳が早いですね」

「てこたあ本当なんだな?」

「ええ。ですが、その件はあくまで我が星導館学園とアルルカント・アカデミー間の話です。皆様とは関係ない話だとおもいますが」

「そうはいかねーな、女狐。学園同士の密約は星武憲章違反だ。ましてやあの雲崎理空と接触しておいて他の学園が黙って見ていると思っただか?」

「まあ、確かに奇妙ではあるね。細かい条件が分からないから何とも言えないけど、普通に考えればアルルカントにメリットが無さすぎる」

「そもそもにおいて、学園としての正規の煌式武装ルークス開発施設を備えているのはアルルカントだけじゃろ?うちも含めて他の学園は全て統合企業財体から提供された物を使っておるのじゃからな」

「ええ、ですから今回はうちの技術者がアルルカントに出向して、共同開発にあたることになります」

これには流石に驚いたのか、一同が目を丸くした。

「おいおい、それじゃ共同開発どころか最早一方的な技術提供じゃねーか」

「確かに。こう言ってはなんだけど、好きなかだけ技術を盗んでくださいって言ってるようなものだね、それは」

「アルルカントも太っ腹じゃのう」

「これは是非とも、もう片方のご本人に話を伺いたいもんだな。なあ、アルルカントさんよお?」

「いや、僕は何も聞かされていないというか、承認サインをしただけ

で、その、はい。詳しいことはさっぱりでして……」

今まで一言も発していなかった左近は狼狽えるように返答する。

「聞いていないって…… 本当かい？」

「はあ……」

「いくらアルルカントといえど、それでは生徒会長としての立場があるまいて。大丈夫なのかえ？」

「まあ、それはその……」

「皆さん何か勘違いしていらつしやる様ですが、これは密約でも何でもありません。我が星導館学園とアルルカント・アカデミーが取り交わした正式な提携です。《消失の魔術師》とは偶然会っただけですよ」
半分嘘で半分本当である。サイラスの件を公にすればアルルカントにダメージは入るが、星導館側に旨みはない。そこでこの件を公表しないことを引き換えにこの約定を取り付けた。理空については本当に偶然会っただけだが。

「あくまで対等の取引だつてーのか？」

「勿論です。我々はアルルカントの施設を借り受ける代わりに、研究開発費の七割を負担するのですから」

そこへ星露が何気ない口調で入ってくる。

「そうそう、星導館といえは先頃何やら学内で小さからぬ揉め事があつたようじゃのう。わざわざ《影星》まで動かしたようじゃが、もしかして今回の件と何か関係でもあるのかの？」

「さて、何のことでしょう」

「ふん。腹黒女が」

「では、この話はここまでというこで」

にっこりと微笑み、この話題を打ち切る。

「ふむ…… 確かに発表内容は吟味してからでも遅くはないだろうからね。うん、それじゃ改めて今日の案件だけ——」

ところがアーネストが仕切り直そうとしたところで、再び声が割って入った。

「あのお、すみません。ちよつといいでしょうか？」

「おや、今度はそちらか。なんだい？」

「ええつとですね、実はその、急な話になりますが、今日の議題に挙げさせて頂きたい案件がありました」

「ほうほう、何事じゃ?」

「えー、皆さんにご提案させて頂きたいのは、アスタリスクにおける人工知能の取り扱い及びその権利についてです」

「人工知能だと?」

「はい。落星工学が発展したことで、人間に近い自我を持った人工知能の誕生は間違いありません。ですが《星脈世代》がそうであったように、人工知能に対する法整備は難航することでしょう。そこでまずは我々が、モデルケースのような形で人工知能を受け入れる態勢を作れたらと……」

「それはつまり、自我ともいえるものを持ちえた機械を、アスタリスクの学生として受け入れるということかい?人間と同様の権利を与えて」

どこか呆れ果てたような顔でアーネストは言った。

「はい、出来れば《星武祭》^{フェスタ}への参加にも……」

「アホか、論外だ」

デイルクも白けた表情で切って捨てる。

「てめーのところが機械を学生扱いするつてのなら知ったこっちゃねーが、そいつらを《星武祭》に出そうつてんなら話は別だぞ」

「そうですね。幾ら何でも無理がある提案だと思えます。少し考えただけでも問題が多すぎですから。例えば星武憲章^{ステラ・カルタ}の年齢規定はどうかクリアするおつもりなのです?十三歳から二十二歳までという制限に当てはめるのであれば、彼らが参加する頃には旧式にも程があるようになってしまっているのでは?」

「第一自我の有無はどうやって判定するんだい?まずはその基準から整備しなければならぬんじゃないかな。まあ、確かに将来的には何らかの規定が必要になるとは思うけどね」

「なんじゃ、主ら皆反対か。つまらんのう」

ぶくーつと頬を膨らませた星露は、腕組みをして一同を見回した。
「あん?界龍は賛成なのか?」

「無論じゃ。その方が面白いからの」

クイーンヴェールは多数派につくように委任状を預かっているため反対が四票。賛成が二票である。よってこの案は否決となる。当然のことではあるが、左近は大袈裟に落ち込む。

「そうですか…… 残念です」

左近はがくりと肩を落とした、が。

「でしたら…… 自我のある無しに拘らず、それらはあくまで武器として扱う、ということでもよろしいですね？」

俯きながら左近が呟いたその言葉に、場の空気が僅かに張り詰めた。

「それは、どういうことかな？」

「だってそうでしょう？ 学生としての権利は与えない、自我の有無に拘らず機械としてみなす——先程皆さんがそう仰ったじゃありませんか。それが例え人の形をしていたとしても機会は機械、つまり道具です。そして星武憲章には道具の、武器武装の使用に関して、形状でそれを制限するような項目はありません」

「…… つまり自立型擬形体を武器として使おうってーのか？」

「ふむ。確かにそれを制限するような項目は星武憲章にもないのう」

それは当然だ。人間が操作する戦闘用擬形体パペットならともかく、単純作業しか出来ないような自動制御の擬形体を舞台に上げたところで、《星脈世代》の相手になるはずもない。あつという間にスクラップだ。だが、もしその擬形体に人間と同じような判断力を持たせることが出来たとしたらどうだろうか。

「なるほど、つまりここからが本番ということですね」

「はあ…… 確かにこれは本腰を入れて話し合わないとね」

「ありがとうございます。これで僕も怒られずに済みそうですよ」

怒られずに済む。つまりこれは左近が考えた意見ではないということだ。誰からのものかと考えながらも各学園の生徒会長は話し合いを進めた。

*

星導館のトレーニングルームにて。綾斗とユリスが模擬戦の後休

憩っていた。

「やっぱりユリスの技は多彩だよな」

「そ、そうか？それほどでも……今日だって一本も取れなかったではないか」

「最後のは危なかったよ。《フェニックス鳳凰星武祭》のパートナーとして頼もしいよ」

「そ、そうか……だが、そう簡単に制することは出来ないだろうかな……」

「ユリスの強さを持ってしても？」

「私を買ってくれているのは嬉しいが、私より強い人間は両手の指じゃ数え切れないくらいはいるぞ」

「そんなに？」

「他学園から《冒頭ペイジの十二人》も多く来るだろうしな」

「他学園の《冒頭の十二人》かあ、ほとんど知らないしなあ」

「一人知っているだろう？雲崎がそうだな」

「えっ？理空ってレヴォオルフの《冒頭の十二人》なの？」

「ああ、序列四位の《消失の魔術師》と呼ばれている。変装していたからレスターは気づいていなかったようだがな」

「理空はユリスよりも強い？」

「記録映像を見る限りでは相性が悪いのは間違いない……それにどこか普通の生徒にはない危うさがある気がするな」

サイラスの一件の時、理空は平然とサイラスの両足を地面にはめた後に無理矢理引っこ抜いて両足をズタズタにした。いくら逃がさないためとはいえ些か残虐過ぎる気もした。

「雲崎にはお前の封印も見られてしまっているしな」

「あー、それなんだけど最初に会った時から気づいていたみたいだよ」

「そうなのか？」

「うん、口外したりはしないって言ってたから大丈夫だと思うよ」

「お前はもう少し人を疑うことを覚えろ……。とはいえ今はそれを信用するしかなからう」

どの道いずればバレることである。その時の対策についても話し

合った。

《疾風迅雷》

とある寮室にて。いつもの如く端末を弄くる理空。綾斗がアスタリスクに来て以降、なにかとハプニングが起きている。また何か起こしていないかと微かな期待を寄せていると、とある記事が目に入る。『疾風迅雷』いきなりの決闘！対戦相手の天霧綾斗予想に反して良い勝負を繰り広げる！』

「……………」

本当に起きていた。いや、期待はしていたがまさか本当に起きているとは思わなかった。よほどトラブルに巻き込まれやすいのだろう。

動画を再生すると、高度な剣術の応酬が繰り広げられていた。綾斗は《黒炉セルベスタの魔剣》を使用していたが、《疾風迅雷》、刀藤綺凜は一回も受太刀をせずに全て回避をしていた。綾斗の方も《黒炉の魔剣》を持って余してはいたが、封印を外した綾斗と互角以上に戦っている。剣術だけなら綾斗以上であろう。このままだとジリ貧と感じた綾斗は、見切りの間合いを詰めすぎて校章を斬られた。決着を宣言されるまで気が付いてなかったため校章の存在を忘れていたのだろう。

（実力がバレたか。さてどうなることやら…………）

少なくともユリスにとっては想定外の事態だろう。普通情報が回っていない手練ならば手の内を隠しておくのが普通。それぐらいは綾斗も考えが付くと思うが…………

（なんらかの揉め事を見て割り込んだってところか）

綺凜に仲の良い友人がいるとは考えにくい。中等部1年にも関わらず序列一位に君臨しているのだ。そう簡単に声をかけられないだろう。かといって、誰かがつかかるとも考えにくい。綾斗を除けば綺凜に対抗出来るのはおそらくクローディアくらいのもの。となると、可能性が高いのは家族か親族関係。

（調べてみるか）

丁度退屈していたところだ。すでに遅い時間ではあるが理空にとってはおもしろいしつかりと寝る日の方が少ないから痛くも痒くもな

い。綺凜及び刀藤家について調べることにした。

*

気がつけば朝日が上り始める時間になっていた。

調査の結果、綺凜の父親にして刀藤家の当主だった刀藤誠二郎は非^{ジエネステラ}《星脈世代》の強盗犯を殺傷してしまい現在は刑務所にあることが判明した。おそらく綺凜の目的は父親を釈放させることだろう。そして叔父の刀藤鋼一郎は星導館の運営母体である『銀河』の職員の一。相当我欲が強いという情報から綺凜を利用して自身が幹部に出世しようとしているところだろう。

正直、バカなのかと言わざるを得ない。綺凜を《星武祭》^{フェスタ}で優勝させたという実績を目立たせたいなら《王竜星武祭》^{リンドプルス}が妥当だろう。しかし、あの《孤毒の魔女》^{エレンシユキール}がいるためほぼそれは絶望的だ。仮に出来たとしても幹部になるには我欲を無くすために精神調整プログラムを受けなくてはならない。そんな傀儡になりたがる物好きがああ刀藤家にいるとは思わなかった。あるいはそれを知らないかのどちらかだろう。どっちにしろ、無知にも程があると感じた。

それは、綺凜についても当てはまる。本当に助けたのなら何故自分で考えようとしなのか不思議だった。まあ、自分には関係のないことだが。

「ふっ、ん〜」

長い時間机に向かっていたので身体が固まっていた。登校時間までそれなりの時間がある。暇つぶしに外に散歩に出ることにした。

*

適当に散策しようとしていたがかなりの濃霧だった。これではボーツとしているわけにもいかない。序列四位になって以降数はごく稀になったがそれでも今も理空を聞討ちしようとするレヴオルフの生徒はいる。

まあ、こんな時間からご丁寧に待ち伏せしている人間がいるとも思えないが、それでも一応警戒はしておく。

歩いていくとトカゲ(?)が数匹襲ってくる。短剣型煌式武装^{ルークス}で真つ二つにするが再生する。

「この間の報復か……？いや、」

それだと辻褃が合わない。サイラスは煌式武装を持った擬形体パペットを操作していた。恐らく、煌式武装はアルルカントの

《獅子派》フェロヴィアスが、擬形体は《彫刻派》ビケマリオンによるものだろう。しかし、こういった研究は知り合いが会長を務めている《超人派》テノリーオが行っているもの。その知り合いがペナルティを受けたときに《獅子派》と《超人派》は手を切ったはず。

襲撃してくるとすれば擬形体がくるのが自然だが……

「今考えても仕方ないな」

再生機能も完璧ではないはず。どこかに核があるはずだ。星辰力ブラーナと万応素マナの流れを探る。

「見つけた」

核を短剣で突く。トカゲ(?)は水のようになって動かなくなった。残りも切り裂く。他に潜伏していないか確認し煌式武装をホルダーにしまう。

元々の方向に歩いていくとある場所が目に入る。

「何だこりゃ……？」

道路に大きな穴が空いていた。近づいて中を見てみると二人の間がいた。

「理空……？」

「天霧？そっちは《疾風迅雷》か？」

綾斗と綺凜である。何故か二人は地下のバラストエリアの柱が挟まれたところに背中合わせで座っていた。

下着姿で。

「……………」

思考停止してしまう。何故この二人が一緒にこんなところにいる？何故下着姿？色々と言いたくなるが、とりあえず一言掛ける。

「……何してんだ？」

「誤解！誤解だからね!?？」

「とりあえず服を着ろ」

「えっ、でも水でビショビショで……」

「その格好で上がってくる方がマズイだろ」

「うっ……」

とりあえず降りて二人を救出することにした。良く考えればこの二人から有益な情報を得られる可能性がある。

*

「ひゅー！良いデータが取れました♪」

「全く危ない橋を渡りたがるな、お前は……」

「結果的に最高だったでしょ？それにその方が面白いから仕方ないのよん♪」

とあるアルルカントの研究室にて。二人の少女がモニターを見ていた。

《彫刻派》会長 エルネスタ・キューネ

《獅子派》会長 カミラ・パレート

である。

言うまでもなくこの二人が一連の事件の黒幕である。サイラスの一件に加え、更に自分達の手で襲撃を行うのはリスクが大き過ぎる。そこでペナルティで筆頭が動けない《超人派》を焚き付けて襲わせたのだ。これでもし言及されても他の派閥だから知らんと言えば終わりである。

「エルネスタ、お前はと思う？」

「剣士くんのこと？」

「違う、《消失の魔術師》のことだ」

「うくん、わかんないんだよね〜今回は能力使ってくれなかつたし」

モニターで当然理空の戦闘も見ていた。短剣術も相当なものだったがサイラスの時のように能力を使っただけでこなかった。

あの時文字通り擬形体は消されたのだ。付いていたカメラもろとも。あれをどんな時でも使えるなら恐ろしいなんて話どころじゃなくなってくる。人間相手に使えば星武憲章違反になるだろうが、自分達が《星武祭》に出そうとしているのは擬形体だ。あれが出てきて能力が使われたら………。

「まっ、大丈夫でしょ。《消失の魔術師》は嫌われているらしいから

《鳳凰星武祭》には出てこないと思うし」

「そう願うしかないな」

「個人的に興味はあるんだけどなく。なんせ昔《大博士》マグナム・オーパスのところ
いたらしいし」

そう陽気に話すエルネスタではあるが柄にもなく冷たい汗を感じ
ていた。

*

「なるほど。お前ら二人も襲われていたと」

地下で濡れた服を着た綾斗と綺凜に手短に事情を聞いた。

「誤解されてなくてよかったよ……」

「あ、あはは……」

「とりあえず出るか」

「ごめん、ちよつと動けなくて……」

「じゃ、オレが出すから。お前は動けるのか、刀藤？」

「は、はい」

「んじゃ先に出ろ」

綺凜が出たのを確認したら綾斗を左腰に抱えて空中を蹴って出る。
界龍ジエロンの技術の見様見真似で別にそこまで珍しい光景ではないが綾斗
は物珍しそうな目で見ていた。

「んで？襲われる心当たりは？」

「うーん無いなあ」

「わ、わたしも同じ、です」

「そうか。まあ良い」

どの道アスタリスクについての知識が薄そうな二人にこれ以上聞
いても無駄な気がしてきた。この件についてはもう終わりでいいだ
ろう。

「あ、あの…… 貴方はもしかして、《消失の魔術師》さん、でしょうか
？」

「ん？ああ、そう呼ばれてる」

「そ、そうですか。助けてくれてありがとうございます。雲崎さん」

「ありがとう、理空」

「別に良い。というか刀藤はオレのこと知ってたのか、意外だ」

「叔父様から聞いていましたから」

その言葉で今朝まで調べていたことを思い出す。意地の悪い質問をしてみる。

「刀藤は《鳳凰星武祭》に出るのか？」

「それは……」

「《王竜星武祭》に出るつもりならやめといた方が良いでしょう。うちの《孤毒の魔女》とお前は相性最悪だし。何より人の言いなりになって迷っている奴が勝ち抜いていけるほど甘くない」

「っ、」

「ちよっ、理空」

「大丈夫です。天霧先輩。気にしないで下さい」

綺凜は笑っているが明らかに動揺している。何故か自分について詳しく知られているのもそうだが、何より心理状態を見透かされたことに背筋が凍る。そんな綺凜の感情を知ってか知らずか、理空は踵を返す。

「オレは帰るわ。あ、質問に答えてくれた礼はしといてやるよ」

「っ!?」

理空が二人の肩に触れた瞬間服が乾いていた。ついさっきまでずぶ濡れだったにも関わらず、だ。いや、水分だけがなくなったかのよう。――。

「じゃあな」

「きっ、消え……」

「……」

助けてもらっておいて失礼だが、やはり綾斗は理空に対して警戒は拭えなかった。綺凜は警戒というよりもむしろ恐怖を感じていた。

《鳳凰星武祭》開催前

『随分と久しぶりですね。あなたから連絡が来るとは珍しい』

「ついさつき《超人派》^{テネーリオ}が作ったと考えられるものを見たからな。随分とお前の派閥は腕が落ちたもんだな」

『きしし。筆頭のいない派閥などそんなものですよ、雲崎理空』

端末に映っている人間は独特な笑い方をしながら理空と会話する。

《超人派》会長 ヒルダ・ジェーン・ローランズ である。

この二人は仲の良いとも友人とも言えないが、旧知の仲だ。傍から見れば歪過ぎる関係ではあったが。あの場から離れた後ヒルダに連絡をして現在の《超人派》の現状を聞こうとしているところだったが、そもそもヒルダは部下のことを気にする人間ではなかったので無駄足だと悟る。ただの無駄足にするのは癪なので興味もないことを聞いてみる。

「そういえば、あの実験の鍵はまだ見つかってないのか？」

『ええ。ペナルティは予想以上に手痛いものでしてね。オーフェリア・ランドルーフエン以外の成功例がありません。それにあなたのこところの

《悪辣の王》^{ダイラント}ときたらそれすらも横取りしてくれましたからね。何て

酷い奴でしょう。許せません』

「取られたお前が悪い。要件は無くなったから切るぞ」

『随分とせっかちですね。他に聞きたいことは無いんですか？あなたには今も感謝しているのですよ？何せあたしにとつて未知の素晴らしい研究をさせてくれたのですから』

「互いの利害が一致したからだろ？それに何年前の話だよ。じゃあな」

通話を切る。

本来、あの時切れる関係だった。もう理空が提供できるものは無くなったためだ。しかしヒルダの気まぐれか、今も自分の質問に可能な限り答えてくれるため未だに連絡先も関係も切っていない。理空から見ても頭のネジは外れていると思うが、それでもあの頭脳は高く評

価している。何よりああいうタイプをそこまで嫌っていないというのが大きいだろう。まあ、助け合うだとか協力関係だとかそういう綺麗な関係ではないことは確かだが。

そういえば、綾斗の姉である天霧遙は確か今仮死状態だが、ヒルダなら或いは——。綾斗が一番手を借りたくないタイプの人間だろうが、果たして綾斗はどうするのだろうか。理空もどこで遙は眠っているのかは知らないから助言は出来ない。推測することは可能だがそれでも部外者の理空に確認することは難しいだろう。どちらにせよ、綾斗は

《フェスタ星武祭》に優勝する以外は道がないだろう。成し遂げるのか、否か、外から楽しませてくれるとありがたいと感じた。

*
あの後、綾斗と綺凜は再度決闘をしたらしく綾斗が新序列一位になっていった。綺凜は負けたがどこか吹っ切れたような表情をしていたから恐らく更なる高みへと登るだろう。

その証拠に《フェニクス鳳凰星武祭》のトーナメント表に名前が載っていた。パートナーの名前は沙々宮紗夜と知らない名前ではあったが綺凜がパートナーに選んだのだから恐らく腕は立つのだろう。それはともかくとして、エントリーしているあるペアを見て違和感を感じた。

イレーネ・ウルサイス
プリシラ・ウルサイス

どう考えても解せなかった。《ラミレクシア吸血暴姫》イレーネがデイルクの手駒の一人であることは知っているがそれでもプリシラは戦闘に向いているとは言えないだろう。使うとすれば《リンドブルス王竜星武祭》だと考えていたが………。何かしらメリットがあるのだろう。デイルクは無利益なことはしない。本人に聞くのが一番早そうだ。理空はとある場所に向かった。

*
薄暗く陰気な廊下を無言で進む。この場所は一般の生徒には立ち入りが許されない区画だが、それを一切気にしないで歩き続ける。

レヴォルフ黒学院には『強者への絶対服従』という唯一絶対のルー

ルがある。理空は序列四位、つまりレヴォルフで四番目に強いことになつているので大抵の要求は通る。

理空は序列四位になつた時に与えられた権限を使ってセキュリティエツクをパスして奥に進む。

今回向かつている場所は懲罰教室。レヴォルフの中でも特に凶暴凶悪の学生が集められている牢獄の様な場所だ。理空が話したい相手はその場所にいる。

入口に着いた理空は警備員に話しかける。

「おい。イレーネ・ウルサイスの部屋に案内してくれ」

「イレーネ・ウルサイス？既に釈放されましたけど……」

「入れ違いになつたか……」

結局自分で探すしかなさそうだ。どうせあの女のことだ。どこかしらで暴れているだろう。イレーネの持つ純星煌式武装オーガルクス《グラヴィシーズ覇潰の血鎌》は多くの人間に適合することで有名だが、その分我が強く精神侵食されてしまう。本人の粗暴な性格と相まってイレーネはよく暴れている。懲罰教室に入れられていたのも歓楽街ロートリフトのカジノで暴れたからだ。

小さくため息をついて歓楽街に向かった。

*

ビルの屋上から屋上へと飛び移りながら探索する。騒ぎになつている場所にいる確率が高いと考えていたが、珍しく騒ぎを起こしていないようだ。こういうときに限ってすぐに起こしていないものだから中々見つからない。そんなことを考えながらも探索を進めるとある光景が目に入る。

レヴォルフの制服を着崩してマフラーを首に巻いている女子生徒と男数人が乱闘している。その女子生徒はイレーネであった。以前暴れられたカジノの職員達がイレーネに絡んだのだろう。ほとんど一方的な展開ではあるが。体術で大きく劣っているのに純星煌式武装まで使われてはいくら人数がいてもほとんど同じである。みるみるうちに数が減っているので終わるのも時間の問題だろう。

そんなことを考えながら見ていると最後の一人にイレーネの蹴り

が入り乱闘が終わる。物音を出し気づかせる。

「誰だ!?!」

「相変わらず血気盛んだな、《吸血暴姫》」

「チツ、テメエか……………」

舌打ちをされる。自分に対して陽気に接して来る人間はレヴォルフではロドルフォくらいのもだからこういう反応には慣れているが。

「聞きたいことがあつて来た」

「何だよ?」

「いや、なんで《鳳凰星武祭》に出るのかって思つてな」

「仕事だよ。わざわざプリシラを巻き込むわけねえだろ」

イレーネはぶつきらぼうな態度を崩さない。が、それについては予想していたのでさらに踏み込む。

「そうか。で、どんな内容なんだ?」

「………… 星導館の序列一位を潰せつて内容だよ」

「《疾風迅雷》を?」

「《叢雲》だよ。わかつてんだろうが」

敢えて知っていることを知らない風に装い、イレーネの口から言わせる。

「へえ………… ?確かに強いは強いがそこまでこだわるほどでもないと思うがな」

「あたしが知ったことじゃねえよ」

理空が思っていた以上にイレーネは冷静だった。《霸潰の血鎌》の影響でもう少し感情的になつていいると思つていたのだが。

しかし、何故綾斗を狙うのだろうか?先程言ったようにデイルクがこだわるほどの強さではない。他校の序列一位に比べるとどう見ても劣つてしまうだろう。封印が完全に解けていれば話は別かもしれないが…………。

では、現段階の実力以外のものだろうか?綾斗についての情報はそこまで出回つてないはず。それ以外ですぐに分かることで警戒するもの…………

使用武器くらしいのもの——

《黒炉セルベレスタの魔剣》、か？

「何でそいつを潰すのか聞かなかったのか？」

「チツ……聞いたよ」

「で？」

「《叢雲》が持つてる《黒炉の魔剣》が後々面倒なことになるんだとよ」
「なるほどな」

あの試合をディルクも見ていたのは覚えている。その試合の中ではそれほど危険なところは見られなかった。その前に《黒炉の魔剣》で妨害を喰らったのだろう。それならば合点がいく。

「けどよ、お前一人でどうこうなる相手か？ パートナーは《華焰グリユーエンローゼの魔女》だぞ？ 1対2で対処出来るのか？」

「……一人じゃねえよ」

イレレーネの声に怒気が含まれ始める。

「そうか？ ならなんで妹に戦う術を教えないんだ？」

「うるせえ……」

「あの二人ならともかく、界龍ジエロンの双子なんかは真っ先に狙うかもしれないぞ？」

「うるせえ……！！」

「いくら高い質リジエネレイティブの再生能力者とはいえそれには限界がある——」

「うるせえって言うてんだろ!!？」

我慢の限界を迎え、イレレーネは《霸潰の血鎌》で理空の立っている場所に過重力をかける。

理空はそれを冷静に能力で対処する。

「オマエに何が分かるってんだ!!？」

イレレーネは叫ぶ。その形相は今にも理空を襲わんとしそうである。しかし、理空の一言で一気に冷める。

「何も分かりやしねえよ」

「は……？」

「オレは疑問を投げかけたただけだ。正直、何でお前が《鳳凰星武祭》に出るのかだけを聞きに来るつもりだったしな。その過程で疑問が出

て来たから聞いたただけだ」

「……………」

そうだった。この男はそういう人間だった。以前プリシラ絡みで喧嘩を吹っかけた時も同じような反応をしていた。

他人が激怒していようと同じように感情をあらわにするでもなく、楽しむでもなく、ただただマイペースに返してくるのだ。

「…………… 結局のところ teme は何がしたいんだよ」

「何って言われてもなあ。今回に限って言えばさっき言った通りだ」

この言葉に嘘は無い。実際のところ、理空にとってウルサイス姉妹のことなんてどうでもいいのだから。

「ただまあ、気まぐれで言わせてもらうなら力はあるが、怒っても無駄なのだから一つのことくらいだ。精神侵食の影響かは知らんが本質が見えなくなってきたらお前が滑稽に見える」

「…………… そうかい」

侮辱されているとも取れる言葉ではあるが、怒っても無駄なのだからイレーネはかえって冷静になる。

「情報提供感謝するぜ。じゃあな」

その言葉を残して理空はイレーネの目の前から消える。

どうも、イレーネは理空と会話するとペースが狂う。理空が何を考えているのかが分からないのもそうだが、内面の異端さにだ。

いくら考えてもわからないことだからペースが狂ってしまうこと自体は諦めてはいた。

今まではそれで良かったが、今回の理空の言葉はイレーネの奥深くに突き刺さった。

「どうしろってんだ……………」

そう呟くイレーネの声は誰にも聞こえない。

《鳳凰星武祭》編

エルネスタ・キューネ

《鳳凰星武祭》フェニックス 開会式当日。理空は会場に足を運ぶ。

《星武祭》フェスタの開会式では形式じみたものが多く、運営委員長であるマデイアス・メサの話くらいしか誰も聞いていないため、理空は普段《星武祭》を見に行く際は開会式が終わってから行くのだが、今回は珍しく開会式から観る。

理由は出場選手の名前の中にウルサイス姉妹以外で気になる名前があったためだ。

エルネスタ・キューネ

カミラ・パレート

理空の記憶が正しければ確かこの二人はそれぞれ《彫刻派》ヒグマリオンと《獅子派》フェロヴィアスの会長で実践クラスではなかったはずだ。

もし、今まで起こしていた事件を《星武祭》を有利にさせるためのものだったとすれば無視は出来なかった。

この数十分後その意図が明らかになる。

*

開会式が始まった。形式じみた話を聞き流してマデイアス・メサが話す時になるのを待つ。

『それでは、《星武祭》運営委員長マデイアス・メサの演説です』

その言葉が聞こえたので意識を向ける。

『諸君、おはよう。こうしてまた今年も君たちの勇壮な姿を見ることが出来て嬉しく思う。そして今年からこのアスタリスクへやってきた者には初めましてと言っておかなければならないね。《星武祭》運営委員会委員長、マデイアス・メサだ』

マデイアスはよく通る落ち着いた声でそう挨拶すると、人懐っこい笑みを浮かべる。

『——あまりここで長々と話をしても興を削ぐだけだろうから、あと一つだけ諸君に重要なレギュレーションの変更を伝えて終わりに

しようと思う。まあ、学園側には通達済みだし、その辺りから一部漏れて伝わっているかもしれないけどね』

そう言っただけで一旦間を取る。相変わらず巧みな話術である。良いところの間を取り、その先の内容に興味を向けさせ観客を飽きさせない。

『元来煌式武装にはこれといった制限を設けてこなかったのだけれど、技術の進化というのは目覚しく、色々と不都合な部分が出てきたわけだ。具体的に言うと、自立機動する機械を武器として扱うか』

その言葉に理空は反応する。自立機動する機械、擬形体を一緒に出場させてもいいということだろうか？いや……

『諸君に出来るうる限り自由な場を提供するというのが我々運営の基本理念ではあるのだが、例えばこれを放置する個人が複数の自立機動兵器を武器として持ち込むことも可能になってしまう。これは流石によろしくない。——ああ、もちろんそれが《魔女》や《魔術師》の能力であるというなら話は別だけどね』

マディアスは続ける。

『かといって武器の数に制限を設けるのは論外だ。自立機動兵器の使用を禁止してしまえば話は早いですが、先程述べたように安易な制限は我々の望むところじゃない。それは停滞に繋がり、やがて衰退を招くだろう。そこで、これはあくまで次回以降の議論の参考とするための措置であることを理解してもらいたいのだけれど……今回に限っては『代理出場』という形を取ることにした』

途端に会場がざわめき出した。学生たちだけでなく、観客席も色めき立つ。

『賢明なる諸君には、これが特定の学園を有利にするのではなく、むしろ近い将来の平等性を確保するためのものであることは分かってもらえると思う。我々は常に、諸君にとって最善の道を用意するため、全力を尽くしていると信じてほしい』

ざわめきが収まるのを待ってさらに続けると、マディアスは今度は観客席に向かって大きく手を広げた。

『そして——《星武祭》を愛し、応援して下さっている諸氏には、これがまた一段階進化した新たな《星武祭》へ繋がるものである事をご期待頂きたい。《星武祭》は常に世界で最高のアミューズメントであり、無二の興奮と感動を生み出すステージであり、そして魂を震わせる至高のエンターテインメントなのだから!』

観客席から爆発的な拍手が送られる。観ている側からすれば盛り上がりがいいため、面白い試みだと感じるだろう。

しかし、出場者からすれば迷惑千万な話である。何せ今まで無かったルールをいきなり入れられたのだから。その上、どう考えてもアルカントに有利な新レギュレーションである。

随分とよく手を回したものだと思空は感心する。ステラ・カルタ星武憲章違反にもなっていないから文句の付けようもない。

マディアスは挨拶を終えると、にこやかに手を振りながら演壇を降りていく。

それからもうしばらく退屈な式典が続くのは分かっていたので端末を弄って時間を潰す。

『それではこれで第二十五回《星武祭》及び第二十四回《鳳凰星武祭》の開会式を終わります。本日《鳳凰星武祭》に出場されるAブロックからIブロックまでの選手は、規定の時間までに該当ステージへ移動してください。繰り返します。本日——』

開会式が終わったので観客席から立ち、出口に向かう。

綾斗とユリスはこの会場でやるそうだが、勝敗は目に見えている。なので、綺凜のペアの戦い方とアルカントの出す擬形体が試合をする会場に向かうことにした。

*

「俺たちと当たるまで負けんじゃねえぞ!」

聞き覚えのある声が聞こえる。目を向けると以前ユリスに絡んでいた大男が綾斗達にその言葉を向けていた。そういえば、サイラスの一件の時地面に倒れていたが大した怪我ではなかったようだ。

そんな呑気なことを考えていると、綾斗が理空に気がついたようで声を掛けてくる。

「あれ？理空？久しぶり」

「ああ。そういえば序列一位おめでとさん。随分とトラブルに巻き込まれやすい体質のようで」

「全くだ。こいつのおかげで私の胃に何度穴が空きそうになったか……………」

理空が皮肉まじりに言った言葉にユリスが乗っかってくる。どうやら、相当気苦労が絶えないようだ。まあ、身内からすればたまったものではないだろう。

そんなやり取りを見ていた水色髪に小学生くらいの身長少女が綾斗に話しかける。

「……………綾斗、知り合い？」

「あ、うん。ほら、この間話した前に助けてくれた……………」

「ああ、レヴォルフ序列四位の……………」

水色髪の少女は前に出てくる。

「綾斗の幼馴染の沙々宮紗夜。よろしく」

「沙々宮？ああ、刀藤とタツグを組んだ奴か」

「うん、そう」

「雲崎理空だ。レヴォルフ高等部1年」

自己紹介をお互い済ますと綺凜が近寄ってくる。

「——あの！先日はどうもありがとうございます！」

「……………別に気にするな」

あの時も礼を言われたのに、また言われるとは思っていなかった。

ユリスが不思議そうに理空の方を見ていた。

「ん？お前達二人は知り合いなのか？」

「えっ!? いや、それはその……………」

ユリスに聞かれると綺凜は顔を赤らめる。綾斗も同様である。下着姿で二人きりでいたところを見られたのだから羞恥心は出るだろう。

「前に少しな…………… とうか、天霧とリースフェルトもそうだが沙々宮と刀藤は連携の方は大丈夫なのか？時間はかなり少なかっただろ？」

ここでその件を突っつかれるとややこしいことになるので話題転換する。

「問題ない。ぼっちこい」

紗夜は親指を立ててくる。

「私達も平気だ。心配には及ばん」

ユリスも自信満々な表情で言ってくる。綾斗と綺凜は苦笑してとても対照的だった。

「そうか。精々頑張れよ、じゃあな」

そう言つて背を向けて歩こうとすると、

「……今回は能力を使わないんだね」

綾斗が聞いてくる。理空の能力を四度見ているため内容が気になるのだろう。予想以上に強かな人間だ。

「人が多いところで使うと目立つだろ?」

無難な回答をしてその場から離れた。

*

「おやおやく? もしや《消失の魔術師》^{サエイイカント}じゃないかな?」

出口のすぐそばで後ろから声かけられる。振り返ると褐色肌の女性と天真爛漫な印象の少女の二人組がこちらを向いている。

「……………誰だ?」

「アルルカント・アカデミー《獅子派》筆頭を務めている。カミラ・パレートだ。いきなり声をかけてすまない」

「カミラ・パレート……………ということはそのうちの女はエルネスタ・キューネか?」

「そだよ」

見た目通りの性格である。カミラはどこかクールな印象でエルネスタは雰囲気軽い。

「正直、君が出場しなくて安心したよ。君が出てきたら優勝は厳しいだろうからね」

「ほう? 余程自分達が出す人形に自信があるんだな」

「ああ、優勝するのに十分な力を持っていると思っっている。私もエルネスタもな」

「そうか。で、オレに話しかけた理由は？」

「それは――」

「私が作った人形を見事に消してくれた《消失の魔術師》を間近で見てもたかったからでーっす！」

「……そうか」

理空は素っ気なく返すが内心若干驚いていた。今エルネスタは自分で黒幕だとバラしたのだから。エルネスタは理空に近づいて囁く。

「……でも、次はそうはいかないぞ？」

「次？オレは《星武祭》に出るつもりはないぞ？少なくとも今のところはな」

「およろ？そうなの？」

「ああ。まあ、仮に戦うことがあっても結果は変わらないと思うけどな」

エルネスタの笑顔が一瞬消えて真顔になる。

「へえ、もしその時が来るのを楽しみにしておこうかな」

「来ないとは思うがな。その前に初戦でこけないように用心しておくんだな。それなりに興味は持っている。ガツカリさせないでくれよ？」

そう言つて踵を返す。

「ありや、もう行っちゃうの？昔《孤毒の魔女》エレンシユキィガルと一緒に《大博士》マグナム・オーパスのところに行った君とお近づきになれたら嬉しいんだけどな」

「断る」

「ちえ、残念」

今度こそ開会式会場から出て移動した。

沙々宮紗夜

紗夜と綺凜の初戦の相手はリスト外の界龍ジェロンのペア。会場の観客席に座る理空。わざわざ会場に来なくても後から記録映像で観れるのだが、能力の都合上画面越しで観るより直接観た方がある程度のアドバンテージは取れる。綺凜は中等部ながら元序列一位なのでこの試合は注目されていた。

『刀藤選手はついこの前陥落したものの、元序列一位！いやー、こうして見ると小さいながらも泰然自若とした態度が——』
『ナナやんなナやん！そっちはパートナーの沙々宮選手！刀藤選手はこっち！』

『えええー？マジで？あれで高校生ってヤバくない？』

観客席から笑いが出てくる。理空もかなり驚いていた。身長は良いところ150cm程度しかないだろうし、スタイルも考えると小学生と言われても違和感がない。

『えー、それは大変失礼をば！』

紗夜は見るからに不機嫌になり、綺凜は苦笑いしている。とはいえ、試合がすぐそこにあるのですぐに切り替えてはいる。

理空が見たこともないような巨大な銃型煌式武装ルークスを紗夜は起動する。

見たところ普通のマナナイトが埋まっているので純星煌式武装オーガルクスではないようだが……… 試合が始まれば分かることだろう。

綺凜も刀を抜く。

『《鳳凰星武祭》Lブロック一回戦2組！試合開始！』バトルスタート

開始と同時に四者が前に駆け出す。界龍の拳士と綺凜が、青龍刀使いと紗夜がぶつかる。

綺凜の左切上を弾き、拳士は肘打ちをしかけ綺凜はそれをかわす。高段蹴りを拳士が放った直後、

―― 一閃。

『バッチブローケン
校章破損』

『一瞬の攻防を制したのは刀藤選手ー!』

『ナナヤんこつちも面白いことになってんで!』

『おー!?? 何だあれは!??』

剣に対して紗夜は剣型煌式武装ではなく、最初に起動した巨大な銃型煌式武装で打ちあっていた。

連続の突きを全て捌かれた界龍の生徒が跳んだ瞬間、

「バースト」

大砲のような威力の弾が打ち出され、直撃する。

『校章破損』

『決まったー! 勝者星導館学園、沙々宮紗夜&刀藤綺凜ペアー!』

(へえ……………)

普通のマナダイトを使っているにも関わらず、純星煌式武装にも劣らない威力。どういう仕組みになっているのか詳しく見てみたいものである。撃つまでにそれなりに時間をかけていたためインターバルを取る必要があるそうだが、紗夜は近接戦闘もある程度心得ているようだ。リスト外という情報だが、恐らく実力はユリスと互角程度のものはある。下手な《冒頭ペーの十二人ジツワ》より余程腕が立つ。

会場を移動して正解だった。この後には擬形体パペットペアの試合もある。アルルカントの二つの派閥の筆頭が優勝できると豪語するほどだ。期待できそうだった。

*

「雲崎?」

自販機の前でコーヒーを飲んでいたら後ろから開会式の後に初めて聞いた声が聞こえる。

「沙々宮? お前も飲み物を買いに来たのか?」

「そう。私と綺凜の初勝利祝いに」

「そうか。ん? いや、でも……………」

今二人がいる自販機の前は紗夜と綺凜の控室からも、星導館の生徒会室からも遠い。なぜわざわざこの自販機に? と疑問が湧いてきた後にとある考えが横切るが流石に無いだろう。

「どうした?」

「いや、何でも無い。そういえば天霧たちも勝つたらしいな。天霧が瞬殺したそうだ」

「知っている。流石は私の綾斗だ」

さりげなく『私の』と入れるあたり、紗夜は綾斗に惚れているのだろうか。余程女子を落とすことに長けているらしい。理空から見てもユリスと綺凜も惚れているだろう。さらに、前に調べたところ綾斗はクロードディアが権力を使って無理矢理待生梓にねじ込んだと聞いている。クロードディアの《パン||ドラ》は未来予知があるそうだが……いや、流石に考え過ぎだ。憶測で決めつけるのは良くない。

「じゃ、オレは観客席に戻るわ」

「待った」

煌式武装について聞こうと思ったが《鳳凰星武祭》中に煌式武装の造りについて聞いても答えてくれない可能性が高いので戻ろうとすると、紗夜に止められた。

「何だ？」

「私は方向音痴だ」

「……それが？」

「ここから帰ることが出来ない」

「……………」

さっきの考えが当たってしまった。まさか方向音痴といえども会場内の道もろくに分からないとは思わなかった。

「そうか、頑張れよ」

「私を置いていくのか、この薄情者」

「端末の地図を使えば良いだろ」

「地図は駄目。言う通りに進んでいるのに何故か別の場所に着く」

「……………」

最早呆れ果てるしかなかった。地図があつても別の場所に進んでしまうとは。方向音痴と同時に機械音痴も持ち合わせているのだろうか、目の前の少女は。

「行く先は？」

「……」

端末で示してくる。

「ここに着けば良いんだな？」

「そう」

「行くぞ」

「ありがとう」

「別に良い。というか、良く一人で出ようと思ったな」

「えへん」

「褒めてない」

溜息を吐きつつも紗夜を案内した。

*

綾斗たちは生徒会室の椅子に座っていた。間もなくアルルカントの擬形体の試合が始まるからだ。

しかし、最も興味があるはずの紗夜がいなかった。飲み物を買いに行くで行ったつきり帰ってこない。もしかしたら、会場内で迷子になっているのかもしれない。そう思い綾斗は端末を取り出して電話しようとする、

『開けて』

聞き慣れた幼馴染の声がインターホン越しに聞こえてきた。幼馴染の方向音痴は直つてきているんだ、なんて考えながらドアを開けると

「ここまで良いだろ？」

「うん、ありがとう」

理空と一緒にいる紗夜の姿があった。

綾斗、ユリス、綺凜と反応に差はあれど驚きの表情が浮かぶ。

「あらあら、珍しい人物が来ましたね」

クローディアですら、驚いた声を上げる。

「よう」

「え？どうして紗夜と理空が一緒にいるの？」

「自販機で飲み物買ってたら沙々宮が迷子になってここまで案内してくれて頼まれたんだよ」

「あ、あはは……」

前言撤回である。どうやら紗夜の方角音痴は直っていない。

「じゃ、オレは観客席に戻るわ」

「どうせなら雲崎君も一緒に見ませんか？」

「レヴォルフのオレを入れるのは不味いんじゃないのか？」

「いえいえ、我が星導館学園の生徒を三度も助けてもらっていますからこれくらいは安いものですよ」

これは建前だとすぐに分かった。そもそも依頼されてやったことでもないのだからわざわざ礼をする必要も無いことくらいクローディアも分かっているだろう。情報の少ない理空を観察したいのだろう。

この誘いは断ろうと思えば断れるが……

(まあ、こつちも天霧と《パン||ドラ》の使い手を観察できる。おまけに能力の干渉範囲が広がることを考えればプラスだろう) 乗ることを選択することにした。

「んじゃ、お言葉に甘えて」

「ええ、ゆつくり貢いで下さい」

「紅茶を注ごうか？」

ユリスが紅茶を用意しようとしてくれている。堅物ではあるものの、義理は返す性格のようだ。

「ああ、頼む。そーいや紅茶で思い出したが沙々宮は飲み物は買わなくて良かったのか？」

「あっ……」

理空に言われて思い出したようだ。結局紗夜はここから出て迷子になってどうにか戻ってきただけという結果になってしまった。紗夜は理空に対し非難の眼差しを向ける。

「何故今頃言う」

「迷子になっていて助けてもらった奴の台詞じゃないな」

「迷子じゃない、道に迷っただけ」

「それを迷子って言うんだ」

「何故一人で出たのだ……」

「それはオレも言った」

「あ、あはは……」

理空とユリスは呆れ、綾斗と綺凜は苦笑いし、クロードイアは相変わらず柔らかな笑顔を浮かべていた。

そんなやり取りをしている間に試合の時間になっていた。

*

エルネスタとカミラが出した二体の人形——その内の一体は戦闘用擬形体に類似した姿をしていた。ただし通常運用されているようなそれよりも二周り大きいだろうか。二メートルを優に超える身の丈と、甲冑を纏ったようなフォルムは、機械で作られた騎士のようだった。そしてもう一体の人形は対照的に、ほとんど人間と同じような——それも、人間の女性と見分けがつかないような外見をしていた。顔貌は完璧すぎるほど整っており、しなやかな体躯をメタリックのスーツのような装甲で包んでいた。

大きい方の名前が自律型擬形体パペット試作AR—Dこと通称アルデイ、女性の方が自律型擬形体パペット試作RM—Cこと通称リムシイ

対戦相手はレヴォルフ黒学院の序列十二位《螺旋の魔術師》モーリッツ・ネスラーとその舎弟であった。末席とはいえレヴォルフの《冒頭の十二人》なので素人では勝てないのだが、なんと一分間攻撃を加えないという宣言をしたのだ。

だが、アルデイとリムシイは宣言通り一分間攻撃せずにモーリッツ達を一蹴した。

アルデイは物理障壁という『力』でモーリッツの攻撃を、リムシイはモーリッツの舎弟の射撃の弾を同じく射撃で撃ち落とすという『技』で見事に完封してのけた。結局、丁度いい当て馬にされてしまったのだ。

確かに今まで見てきた擬形体とは出来が違う。そもそも今まで擬形体には意思は無いに等しかった。故に《星脈世代》ジエネステラに対抗するのは無理だったがその欠点をエルネスタとカミラは人工知能で補ったのだ。

——とはいえ、それでも開会式の後エルネスタに言った言葉を

取り消すほどではないが。正直、余裕を持って勝つことが出来ると理空は感じた。と、そこへ穏やかな声が入り込んでくる。

「雲崎君はあの擬形体についてどう思いますか？」

クローディアである。相変わらず柔和な笑みを浮かべながら質問をしてくる。柔和すぎて仮面じみているとも感じる。こういうタイプの人間は相当に腹黒い。何も言わないのも不自然だと思つて個人的な見解を述べる。

「そうだな、まずあの物理障壁を破壊出来るとすると出場者の中では《黒炉の魔剣》セルベレスタを持つ天霧だけだろうな。リムシイの方は全く手の内が割れてないし……一番優勝に近いペアだろうよ」

これもまた本音であつた。先程余裕を持って勝てると感じたのは実力よりも相性が大きい。理空の能力は決闘において機械とすこぶる相性が良い。

理空の言葉に僅かに表情が強張る一同。

「私達もそう簡単には負けないぞ？」

「優勝したければ天霧の封印をどうにかするんだな。良いところ五、六分程度しか持たないだろ？今現状沙々宮と刀藤の方がお前らより勝ち目がある」

「あのさ、封印については——」

「誰にも言つてないし言うつもりもない」

綾斗は安堵の表情を浮かべた。が、反対にユリスは険しい表情を浮かべる。

「……何故綾斗の封印についての情報を漏らさない？」

それがまず最初に出てきた疑問だつた。理空は星導館ではなく、レヴォルフの生徒なのだ。自分の学園のために動く、とまではいかないまでも他学園の有力生徒を潰せる。少なからず理空にとってメリツトはあるだろう。もしや他に思惑があるのでは、と警戒を解けない。「どっちみちいずれはバレるだろ？それにバレたところで時間稼ぎ出来る人間も限られる。それに——」

「それに、何だ？」

「仮に封印が完全に解けたとしても大して変わらないだろ。自分の武

器も持て余しているんじゃない」

それもまた本音で同時に事実だった。《黒炉の魔剣》は星^{フライナ}辰力の制御次第でサイズが変えられるし、万物を斬るのだから。

「……あまり綾斗を馬鹿にするな。本来の綾斗の実力はこんなものじゃない」

「紗夜さん……」

「おいおい、オレは質問に答えただけだぞ？」

理空はともかく紗夜は熱くなり始めていた。例え質問に対する返答だとしても綾斗のことを過小評価されていると感じたからだ。そんな昂りも知らずに理空は淡々と言葉を続ける。

「本来の実力をオレが見誤っているとしても、今のままじゃ優勝が厳しいのは事実なんじゃないか？全試合を制限時間内に終わらせようなんて甘すぎる」

「……………」

紗夜はさらに顔を顰める。理空といえどそれには気づいているが気にせずに続ける。

「天霧だつて分かつてはいるんじゃないか？その封印について遅かれ早かれ向き合わなきゃならぬ——」

「皆さん、他の出場選手の記録映像をみておいた方がよろしいのでは？」

そこへするりとクロードディアが入り込んでくる。ここでトラブルになるのは不味いというのと、紗夜達と同様、綾斗の酷評は決して気分の良いものではない。

例えそれが事実だとしても。

「雲崎君、質問に対する返答ありがとうございます。参考にさせていただきますね」

「そうか」

「ですが、言う内容は選んでいただくと助かります。意外と星導館には血気盛んな人間がいますから」

柔和な笑みを浮かべていたが、眼が全く笑っていない。これは怒っているのだろう。

「善処することにする。観たい試合無くなったからオレは帰るわ。精々頑張れよ」

そう言つて理空は生徒会室から消える。綾斗、ユリス、綺凜は以前も見たから大して驚きはしなかった。紗夜、クロードディアも見たことはないが三人から話は聞いていたというのもあるが、別のことが印象的だったため消えたことに大しては驚きは出なかった。

「……掴みどころが無いな」

そう紗夜が呟くが他の人間も同感だった。ユリスが警戒を向けた時も、紗夜とクロードディアが怒りをぶつけたときも理空は平坦だった。人の感情に対してあそこまで無関心な人間は初めて見る。

レヴォルフ黒学院序列四位《消失の魔術師》ヴェイキャント 雲崎理空。

紗夜はその名前を頭の中に強く焼き付けた。

《戦律の魔女》

《鳳凰星武祭》^{フェニクス}は予選が終了し、有力選手は順調に勝ち進んでいた。抽選会の結果、紗夜&綺凜、アルルカントの擬形体ペアは本戦の中で一番の当たりくじを引き準決勝までは楽に進めるだろう。

しかし、綾斗&ユリスは一番の外れくじとも言える場所を引いた。四回戦では早くもウルサイス姉妹と、五回戦と準々決勝は界龍^{ジエロン}の《万有天羅》の弟子と当たることとなつてしまった。四回戦と五回戦をともしに制限時間内に勝ち切る可能性は限りなく低い。四回戦はともかく、五回戦以降は連携が上手く個々の能力も高い相手だ。果たしてどういう対策を取るのだろうか。

そこで一旦考えるのをやめた。これ以上はいくら考えても答えは出ない。時間が時間のため夕食を食べに行くことにした。

*

夕食を済ませて、歩いて帰る。と、そこへ見知った二人組と鉢合わせる。

「天霧にリースフェルト？何でここに？」

「それはこちらの台詞だな。何故お前がここにいる？」

「夕飯を外で済ました後の帰り道だよ。オレの寮はここら辺だからな」

強い眼光を向けながらユリスが返してくるが理空はそれを意に介さない。そもそも何故こうも敵視されているのが理解出来なかった。

その理由が先日の生徒会室での自分の発言によるものだと理空が知る由もなかった。

「お前達は？ここら辺はレヴォルフの人間が多くいる。星導館の生徒がくる場所じゃない」

「あ、うん実は——」

綾斗は説明した。まとめるところだ。

①再開発エリアでイレエーネに恨みを持つ人間たちにプリシラが追われていた。

②綾斗がそこを助ける。

③そこヘイレーネが来て借りが出来たからウルサイス姉妹の家で夕食を食べないかと誘われた。

④その帰り道

「…………… 本当にトラブルに縁があるんだな」

「そ、そう？」

転入初日からユリスと決闘になり、サイラスに狙われ、綺凜と決闘をし、綺凜と一緒にアルルカントが作った生物に襲われて、更に再度綺凜と決闘をして序列一位になると普通とはかけ離れている。

「リースフェルトは付き添いか？」

「ああ。私のタッグパートナーに何かあつては困るからな」

ウルサイス姉妹は小細工が出来るタイプではないから平気だとは思うが、次の対戦相手の家に行くのだから妥当な判断だろう。

「で、天霧は何でそんな浮かない顔をしてんだ？」

「えっ、そ、それは」

「まさか感情移入したか？」

「そうじゃなくて、いやそうなんだけど……………」

「釈然としないな。どうした？」

「あのさ、理空に聞きたいことがあるんだけど……………」

「何だ？」

理空は怪訝そうな表情を浮かべた。何を聞いてくるのだろうか？

イレーネについてはそこまで知らないが……………」

《覇潰の血鎌》^{グラヴィンズ} についてなんだけど……………」

《覇潰の血鎌》？何でそんなことを？」

プリシラさんが言ってたんだけど、イレーネは《覇潰の血鎌》を使っている時は物凄く凶暴になるって……………」

「オレも《吸血暴姫》^{ラミレクシア}との接点はほとんどないが……………」

ただまあ、《覇者の血鎌》は相当に我が強いな」

「我？」

「純星煌式^{オーガルクス}武装には意思がある。だから物によっては使用者の性格、肉体を変化させるものもあるし果てには精神を侵食するものもある」

「精神侵食!?!?」

「これ以上はオレも純星煌式武装を使ったことがないから何とも言えない。同じく純星煌式武装を使っている奴に聞いてみたらどうだ? 例えばエンフィールドとかな」

「なるほど…… アドバイスありがとう。またね」

そう言つて去つて言った。ユリスは最後まで理空のことを睨んでいたが気にせずに行った。

それよりも、《覇潰の血鎌》について聞いてきたということは綾斗はイレーネを救けるつもりなのだろうか。正直――

「理解出来ないな……」

何故敵を救うことなど考えるのだろうか。イレーネが自分で蒔いた種なのだから放つておけば良いものを。そうすれば恐らく苦戦はするだろうが勝てる。譲れない意思や目的があるのなら他人の事情など無視すれば楽なのに。

「オレには関係ないけどな」

理空にとつてデメリットがあるわけでもないから放つておくことにした。

*

綾斗&ユリス対ウルサイス姉妹の戦いは綾斗&ユリスの勝利で幕を閉じた。案の定、イレーネが《覇潰の血鎌》に乗っ取られて暴走しプリシラは血を吸われすぎて星辰力^{プラナーナ}切れになり、暴走したイレーネはステージ全体に重力をかけたが綾斗は《黒炉の魔剣》^{セル||ベレスター}で重力を焼き切るといった離れ業をやつてのけた。重力を斬つた後は《覇者の血鎌》を《黒炉の魔剣》で粉々に破壊し（厳密にはウルム||マナダイトは壊れていないから完全破壊とは言えないが）イレーネの意識が消失し決着がついた。

ここまでならただのハッピーエンドで終わるのだが制限時間を大きくすぎたせいか、綾斗は封印が中継で伝わってしまった。今回の試合時間から大まかな制限時間が推測されるだろう。こうなると、あのペアの優勝はかなり厳しくなった。バラストエリアでの一件から推測するに一度制限時間を過ぎると次すぐに封印を外すのは難しいだ

ろう。五回戦は戦略次第では勝てるかもしれないが準々決勝はそうはいかない。あの界龍の双子は相当に性格が悪い。絶対に徹底的な時間稼ぎをされるだろう。ユリス一人で勝つなんて不可能だ。

まあ、先日の理空の言葉をただの侮辱と捉えるほど馬鹿ではないだろうから封印とは真剣に向き合うのだろう。もしも、試合前もしくは試合中に封印を完全に解く、とまではいかないまでもあの実力を発揮できる時間が増えれば優勝の可能性は跳ね上がるだろう。

「希望的観測ではあるけどな……」

天霧遙が《蝕武祭》に出ていたのは確か5年前。綾斗の封印はその前にかけられたものと考えるのが自然だろう。つまり、綾斗は封印をかけられて5年以上経っているのにまだあの段階なのだ。そう考えるとかなり厳しくはある。だが、一瞬とはいえ《黒炉の魔剣》の真価を発揮させた綾斗ならばやってのけそうな気もした。

*

翌日。綾斗とユリスは界龍第七学院序列二十位 宋然、序列二十三位 羅坤展と激突した。綾斗はやはり反動が抜けきっていなかったように明らかに動きが鈍かった。連携されると分が悪いと見たのか、ユリスは炎の壁を作り一対一をそれぞれ行うという作戦を実行した。そしてある程度時間を稼いだ後にそれぞれの相手をタイミング良く切り替えて間合いを狂わせた隙に校章を壊して綾斗とユリスが勝ち上がった。

力押しではなく戦略による勝利だったのだから、見事と言えるだろう。初めてタッグ戦らしい試合が見られた。だが、次の相手である《幻映霧散》と《幻映創起》はそうはいかない。徹底的な時間稼ぎやら嫌がらせをするのが目に見えている。果たして、どう太刀打ちするのか。次の試合も期待出来そうだった。

*

夜中になったため、久しぶりに歓楽街ロートリフトに向かう。ここ最近は《鳳凰星武祭》ばかりに気を向けていたためカジノに行っていないなかった。《冒頭の十二人》の特権で少なくとも金銭は持っているものの、増やしフェスタておきたい気持ちはある。歓楽街は《星武祭》中は空気が一層ピリつ

くので気配を殺して歩いていく。ビルの曲がり角を曲がった瞬間、陰から少女が出てくる。

「あ?」

「おっとと……」

理空の方が歩いていただけだからそこまで衝撃ではなかったが、少女の方はそれなりの速度で走っていたため避けられなかった。少女が走ってきた方向からサングラスをかけたスーツ姿の男二人がこちらに近づいてくる。状況から見ると、少女は追われていたようである。男二人組は薄く笑いながら一人が理空に向かって言ってくる。

「おい、お前。その女をこっちに渡せ」

「ああ」

理空もまた、シンプルに即答した。特にこの少女と関わりがあるわけでもないのだから。男二人組はさらに顔を邪悪な笑みに歪め、少女の方は若干焦燥感を見せる。

「素直で良いねえ、ヒーロー気取りしないところも好ましいぜ、お前」
「別にオレがどうこうする必要もないからな。何せ

——お前らの実力じゃこいつには勝てないからな。自滅お疲れ様」

これもまた事実。関わりがないことも手助けしない理由ではあったがそれ以上に必要ない。理空の考えが正しければこの男二人組では、否、むしろ単体でこの少女に勝てる人間の方が少ないだろう。

男二人組は額に青筋を浮かべる。

「テ、テメエ……！」

「どうした? オレが言ってることは事実だぞ?」

堪忍袋の緒が切れたらしく二人同時に襲ってくるが一人の鳩尾に拳を、もう一人の首に蹴りを入れ吹き飛ばす。

「ガッ……」

「あ……ぐ……」

男二人組は呻き声を上げた後にピクリとも動かなくなった。どうやら、気絶したようだ。

「バカか、力量差くらい把握すれば良いものを……」

そんなことを呟いていると、少女が拍手している。

「凄い、凄い。記録映像じゃ能力の方が目立っていたけど体術も一級品だね」

そんな声をかけてくる。外見を見ると栗色の髪に大き目の青いベレー帽に少し飾りのついたブラウス、白いソフトジョーンズ風のパンツルックだが、全体的には地味な印象である。だが、理空はこの少女を知っていた。最初は瞳と僅かな声に覚えがあつた程度印象だったが、今聴いた声と星辰力ブラーナの質で先程の考えが確信に変わった。

「別にお前も瞬殺出来る相手だっただろ？ 《戦律の魔女》シグルドリーヴァ」

「ありやりや、やっぱり気づいてたんだ。《消失の魔術師》ヴェイカントの雲崎理空君。それにしても、女の子に対して配慮が足りないんじゃないかな？」

「結果的に助けてやったんだから文句を言われる筋合いは無い。そもそもお前の問題だったろうが」

「……まあ、否定はしないけど」

《戦律の魔女》シルヴィア・リユーネハイム。

クインヴェール女学園序列一位にして生徒会長。世界の歌姫でありながら《魔女》ストレガであり歌を媒介にして様々なイメージを具現化させるその能力は『万能』とすら言われている。前シリーズ最下位の学園の生徒ではあるが、その実力は確かで前回の《王竜星武祭》リンドブルスでは準優勝している。

「で？何でお前がこんなところにいる？歌姫様が来る場所じゃないぞここは」

理空が気がつくのに遅れたのはそこにある。シルヴィアではなくともクインヴェールの生徒が来る場所ではないだろう。

「うん、私ね、人を捜しているんだ」

「人？お前が捜している人間は歓楽街に来そうな奴なのか？」

「……………」

理空が率直な疑問を投げるとシルヴィアは僅かに表情を曇らせる。その反応から見るに事情があるのだろう。

「悪い。これ以上は深入りしない」

「ううん、大丈夫。私の捜している人は《蝕武祭》に関わっていたみたいなの」

若干驚いてしまった。予想以上に特殊な事情だった。

《蝕武祭》はルール無用の闘いで死ぬ確率も低くない。そういうことに関わっている人間がシルヴィアの関係者にいるとは思わなかった。

「……そうか。最後に一つ良いか？」

「うん、何かな？」

「何でオレがあの人を倒している間にここを離れなかった？」

そこが大きな疑問だった。シルヴィアの立場を考えればすぐにそうするのが無難だっただろう。ましてやレヴォルフの生徒である理空にここまで事情を話すのは正気の沙汰とは思えなかった。

「助けてもらったんだからそんなことはしないよ」

「だが、ここまでオレに話す必要はなかった」

「ああ、それね」

どんな返答が返ってくるのだろうか、取引でもしたいのだろうか。そんな想定を裏切る返答をしてくる。

「——君、根は優しそうだったから」

「はっ」

思わず間拔けな声を出してしまう。それほどに予想外な言葉が返ってきた。

「言葉はぶっきらぼうだし、表情もほとんど動かない。眼もどこか無機質だけど、瞳の奥に暖かさがある気がしたの」

「……」

「だから、別に話しても問題にはならないかなって」

「……そんな簡単に人を信用するべきじゃないと思うけどな。とりあえず、返答感謝する。お前とここで会ったことは黙っておく」

「うん、ありがとう。またね」

シルヴィアの視界から能力で消える。

——根は優しそうだったから

あの場では平静を装ったものの、未だに理空は困惑していた。

自分が優しい？ありえない。

普通のレヴォルフの生徒とは比べ物にならないほど自分勝手に外道だ。人を殺したことも多々ある。そんな人間が優しい？

『ありえない』、そう頭で考えながらもカジノで遊んでいる時もシルヴィアの言葉が何故か頭から離れなかった。

《悪辣の王》

《鳳凰星武祭》^{フェニクス} 準々決勝当日。 歓楽街から自室に帰ってきたときにはもう2時を過ぎていたため精々2時間程度しか寝ていないが、小さい頃からの習慣なので痛くも痒くもない。が、シルヴィアに言われた言葉が未だに頭の中でぐるぐる回り続けている。それに最後の言葉。クロードイアといい、シルヴィアといい、生徒会長というものはどうも意味深な言動を残していくらしい。

まあ、これ以上考えても無駄だろうから様子を見るのが無難だろう。そんなことを考えている間に綾斗&ユリス対黎沈雲&黎沈華の試合の時間になっていた。

*

結果から言うと、綾斗は制限時間を克服することに成功したらしい。一度制限時間を過ぎて封印にかかってしまったが、ユリスが時間を稼いでいる間に何かをしたようだ。その証拠に、姿を消していた《幻影霧散》とその呪符が視えていた様子だった。その上、星辰力^{プラナ}が今まで外にダダ漏れしていたのが内側に溜まっていた。その力を存分に発揮し綾斗1人であの双子を撃破した。それでも、身体能力そのものは以前の封印解除時と変わっていなかったので完全に解けたわけでは無さそうだった。

何にせよ、これであるペアの優勝の確率は一気に上がった。明日の準決勝の試合で面白くなりそうなのは紗夜&綺凜対アルデイ&リムシイだろう。もう一つの方は勝負は見えている。あの1分間をどう使うのか、あるいは使わないのか、見ものだ。

*

会場出て歩いて行き曲がり角を曲がる。すると次の目的地である大型のスーパーが見えてきた。

スーパーの入り口付近までやって来たが——そこで騒ぎが起こっているのを目に入った。

「や、やめて下さい。私達が何をしたって言うんですか」
「そ、そうです。ぶつかった事は謝ったじゃないですか」

「ああ！ そりやねえぜ、お嬢ちゃんたちよ。お前さん達がぶつかったせいで、こいつは怪我したんだぜ。見ろよ、この痛そうな顔を。こりや大怪我だぜ」

「あああつ！ 痛てえ！ こりや骨折してるかもしれないねえぜ」

「おお、それは大変だ。これは慰謝料を要求しなきゃいけないな」

2人の見慣れない少女の姿が見えた。胸元にはガラスドワースの校章をした少女達。そして彼女たちを10人の男達を取り囲んでいた。モヒカンなどの特徴ある髪型に、ガラスの悪い服装の数々。それを見れば、男達が何処の所属かは一目で分かった。言うまでもなく、レヴォルフの生徒である。

「おい、テメエ何見てやがる？」

レヴォルフの生徒達も理空に気がついたらしく、突っかかってくる。

こういう時に変装していると面倒だ。瞳の色で気がつく人間もいるがそうじゃない人間もいる。

いつものように、髪の色を元に戻す。

「テ、テメエ！ 雲崎理空か！」

この反応ももう見飽きてきた。男達は焦燥感を顔に浮かべる。

「ど、どうするよっ！」

「引き上げるか？」

「バカ、ビビってんじゃねえ。レヴォルフの意地をみせるぞ！」

…………… 理空もレヴォルフの生徒なのだが。

というか、何故こちらに突っかかるのだろうか。たまたま視界に映っただけなのでそのまま素通りするつもりだったというのに。

男達が一斉に襲ってくる。煌式武装ルークスを持ってはいるが余りにも稚拙すぎる動きだ。2人の顔面に拳を叩き込み、3人の鳩尾には蹴りを入れ、倒す。男達はさらに顔を青ざめる。

「ひ、ひるむな！ やっちまうぞ！」

1人が突っ込んできたので、腕の関節を極めて折る。

「ぐああああああ！」

悲鳴をあげるが理空は気にしない。残りの4人も大したことがな

く、適当にやって戦闘不能にした。

ガードワースの女生徒2人は最後の1人が吹っ飛ばされているところに目を釘付けられ数秒呆然としていたが、すぐに現実に戻り、反対側に視線を向ける。

「あ、あのー！ありがとうございま、つてあれ？」

「ど、どこに……？」

しかし、理空はその場から既に姿を消していた。

*

予定が狂ってしまった。まさか、路地裏や再開発エリア、歓楽街ならともかく、スーパーの前でこんな揉め事に巻き込まれるとは思っていなかった。いつものように髪の色を戻せば大丈夫だと思っていたが、何をどう考えたのか知らないが襲われる羽目になった。警備隊が来て捕まると、長い事情聴取されるので能力を使ってしまった。

多少遠回りではあるが、コンビニに寄って夕飯を買った。

帰宅して食べた後に珍しく早めに寝た。

*

翌日。《鳳凰星武祭》準決勝1試合目。

『聞くがよい！今回も貴君らには1分の猶予をくれてやろう。我輩たちはその間、決して貴君らに攻撃を行う事はない。存分に仕掛けてくるがよい！』

相変わらず傲慢な態度を崩さないアルデイ。だが、口だけではなくここまでの全試合それをやりながら勝利を収めている。

リムシイの方は2人がかりでいけば一撃まぐれで当てられるかもしれないが、アルデイの方は物理障壁がある。破壊力だけならレヴォルフトツプクラスと言われているモーリッツの攻撃を受けて傷一つつかなかったことから力任せでは難しい。

だが、綺凜なら攻撃を入れるのは可能だと理空は見ていた。勿論、あの日本刀で斬れるとは思わないが、物理障壁を展開する位置を誘導出来れば可能だ。今までの試合から見るに、あの物理障壁は全方位に展開するのは難しいだろう。

果たして、綾斗&ユリスと戦うのはどちらのペアか。

『《鳳凰星武祭》準決勝第1試合、バトルスタート 試合開始！』

*

『試合終了！勝者、エルネスタ・キューネ&カミラ・パレートペア！』
アナウンスが流れ、第1試合が終わる。

試合序盤は綺凜がアルデイを抑え、紗夜が特殊な煌式武装でリムシイにダメージを与えたが、リムシイのパーツがアルデイに追加され合体してからは逆転した。

リムシイのパーツを取り込んだアルデイは紗夜の煌式武装の大砲も押し負けるほどのパワーの攻撃を繰り出した。

先日、紗夜と綺凜は一番の当たりくじを引いたと思っていたがある意味では一番の外れくじだったのかもしれない。あの合体は行っている間は隙が生まれる。知っているのと知っていないのでは大きな差があるだろう。反対に、綾斗とユリスはある意味では幸運だったのかもしれない。

ステージの修復をしている間にトイレに行くことにした。

*

「ひゃっ!??!」

トイレから出て曲がり角を曲がると、1人の女生徒とぶつかる。女生徒は大量の書類を持っていたためそれを全て地面に落としてしまった。

「樫丸、か?」

「く、雲崎さん……?」

レヴォルフ黒学院生徒会長秘書 樫丸ころな。

「す、すいませんよそ見をしまして……」

「別に良い」

「あ、ありがとうございます……」

そんなやり取りをしながらもころなは落ちた書類を拾っているのだが、2回もまた何枚か落としている。

どう見ても鈍臭くて仕事も出来ない人間だが、あの《ダイラント悪辣の王》が秘書に任命したということとで理空もころなの事を覚えていた。といても、ごくたまに顔を合わせるだけでお互いに認識は浅いが。

何故あのデイルクがころなを手元に置くのかは謎だが、何かしら魅力的な能力を持っているのだろう。デイルクは能力でしか人を判断しない。《魔女》^{ストレガ}として登録はされていないようだが……例外が存在する場合もある。例えば特定の条件下でしか発現しない能力も――

「おい、ころな。どんだけ待たせんだよ？」

そこに苛立ちが混じった声がころなの後ろからかかる。

「か、会長……」

レヴォルフ黒学院生徒会長 デイルク・エーベルヴァイン。

上司が来たようなので観客席に戻ろうとする、が。

「おい、待ちやがれ。雲崎理空」

声をかけられたので振り返る。

「何だ？ 《悪辣の王》？」

「テメエ…… クローディアと接触したらしいな。何を企んでやがる？」

敵意を込めた声と眼光で聞かれる。しかし、返答に困る質問だった。

「街中で偶然会っただけだ。企むも何もない」

嘘ではない。少なくとも今のところは。生徒会室に入ったことはあるがそれつきりだ。

「他学園の生徒会長と偶然？ そんなわけねえだろうが」

「少なくともオレは知らん。向こうに聞いてみたらどうだ？」

「……………」

「……………」

意地の悪い返答をする。そもそもそれで聞けた、あるいは聞けそうなら理空に聞かなくても済む話だ。

理空とて、仮に何かを企んでいたとしても正直に言う気はない。

そんな意思を読み取ったのか、デイルクは理空のことを睨みでく。理空は臆せず真顔で目を一切逸らさない。

その状態が数十秒続くと理空の背後から穏やかな声がかかる。

「こんな所で揉め事は控えてもらいたいね。双剣の総代に

《消失の魔術師》

聖ガラードワース学園生徒会長 アーネスト・フェアクロフ

「別に揉め事になっていないわけでもない。仮にそうでもガラードワースの人間には関係ないことだと思うが？」

「そういう訳にはいかないんだよ。秩序の守護者たるガラードワースの代表として、そしてこの聖剣を預かる《聖騎士》ペンドラゴンとしてもね」

騎士の模範回答のようなことを言ってくる。流石、あの《白瀧の魔剣》レイィグラムスを使いこなすだけのことはある。

どうするか。膠着状態だ。そんな状態を終わらせたのはデイルクだった。

「チツ……行くぞ、ころな」

「は、はい」

デイルクが背を向け、プレッシャーで涙目になっていたころなも立ち去る。

「……面倒事を終わらせてくれて感謝する」

「気にしなくていいよ。僕は僕の務めを果たしただけだから」

相変わらず穏やかな表情を浮かべながら返してくる。クローディアとは似て非なる仮面に見えた。

「ただ、こう言ったことは控えて欲しいね」

「状況によるが善処する」

「そう言ってくれるなら僕はこれ以上その事に関しては言及しないよ。ところで、雲崎君」

「何だ？」

「二つ名ではなく名前と呼ばれたことに若干驚くが、自然に返す。」

「昨日、うちの生徒が世話になったみたいだね」

「ああ、スーパーでの件か」

「そう。こちらからはお礼を言いたいと思っていたんだ。もし良ければだけど、生徒会室と一緒に試合を見ないかい？お茶と菓子は振る舞うよ」

「……それこそ気にしなくて良いと思うけどな。向こうが襲って来なければ無視するつもりだったんだから。というか、レヴオルフの才

レを入れるのはどうかと思う」

「けれど、君はすぐに立ち去ってしまったってお礼を言えなかったと聞いているからね。僕以外の人間もお礼をするべきだと言っていたしね」
「……」

能力を使って即座に切り抜けたことが仇となったようだ。しかし、理空としてもこの誘いを特に断る理由もない。

「んじゃ、お邪魔する」

「ありがとう。それじゃ、こちらについてきて」

アーネストが行く道に沿って歩く。目的の場所の階層に行くためにエレベーターに乗る。

「……………」

「……………」

お互いに無言である。話題も出てこないし、今日初めて顔を合わせたのだから当然と言えば当然だが。

「それじゃ、ここがうちの生徒会室だよ」

そう言つて扉を開けると1人の女生徒が声をかけてくる。

「お帰りなさい。アーネスト。挨拶回りは終わった、つてええ!!?」

理空に気がついたらしく、女生徒は驚愕の声を上げる。

他にも3人いたが反応は多種多様である。

1人は目を細め、

1人は愉快そうに口笛を吹き、

1人は無表情だった。

アーネストを含めた5人はチーム・ランスロットのメンバーである。
る。

そんな空気の中、理空はマイペースに「結構見やすいな」と呑気なことを考えていた。

チーム・ランスロット

「ちよつとーどういうことですか!??アーネスト!《消失の魔術師》をここに連れてくるなんて!」

アーネストを出迎えた少女——《光翼の魔女》^{グロリアアラ} レティシア・ブラン シャールはアーネストに詰め寄る。

「ここに来る途中で彼に偶然会って昨日のお礼に招いたんだよ。うちの生徒を助けてもらったんだからお礼をした方が良いだろう?」

「それはそうですね、生徒会室に入れるのはいくら何でも問題だと思えます!もし、他の人間に見られたら……」

理空の予想通りの反応をする。理空は普通の《冒頭の十二人》^{ペーヅ・ワッ}に比べて他学園での知名度は低いが各学園の生徒会のように知っている人間は少なからずいる。ましてや、ガードワースと仲が悪いレヴォルフの制服を着ているのだから見られれば問題になることは免れないだろう。

「どっちみちもう入ってるんだ。今更何か言ってももう遅いんじゃないか? 《光翼の魔女》」

「何で事の張本人である貴方が言いますの!??」

「声が無駄にデカイ。人が寄ってくるぞ?」

「うっ…。そ、それは……」

「それにもう少ししたら試合が始まるんだ。揉めてる暇はないだろうよ」

自分がディルクと揉めそうになつていたのを忘れて(というかそもそも揉めそうだったと認識していない)、レティシアを宥める理空。レティシアも反論は出ないよう押し黙る。

「レティシアを言いくるめるとはやるね。そこにかけてくれるかな」
アーネストは感心したような様子で理空を椅子に座らせる。

「では会長。お茶とお菓子の準備を致します」

そこへ男装をした女生徒《優騎士》^{アグレスティヤ} パーシヴァル・ガードナーが紅茶と茶菓子の準備を始める。

20年ぶりに《聖杯》こと《贖罪の錐角》^{ゴート・アマルティア}に適合した人間で今年に

チーム・ランスロットに加入したということで興味を持っていたが、間近で見してみると少し独特な雰囲気があるように感じた。

「どうぞ」

パーシヴァルが紅茶を淹れ終わる。それを飲んでみると、《黒盾》ガレスケヴィン・ホルストが理空のことを愉快そうに眺めている。

「何か？」

「いやー。こうして間近で見ると物凄く顔立ち整ってるから、もし淑女だったら抱きしめたくなるなーって思っ」

ガラードワースの人間にしては軽薄な性格と聞いていたが、それは本当のようだ。実際、理空は髪の短さと制服から男と分かるが女装をすれば美少女にしか見えないだろうからケヴィンの言っていることはそういう意味では間違っていない。

そのやり取りをみている、見るからに硬派な男——《王槍》ロンゴミアントラ

イオネル・カーシュがケヴィンに厳しい顔を向ける。

「相変わらず浮ついた男だ。少しは慎んだらどうだ？」

「おいおい、騎士たる者淑女の要請に応えるのも義務でしょうに。レオこそそこらへん、もう少し興味を持った方が良いんじゃない？」

「興味ないな」

「相変わらずお堅いなー」

「お前が軽薄すぎるだけだ」

2人は額を近づけて口論を始める。と同時に銃声が聞こえる。

「……お二人とも、お客様の前ですよ？」

見ると、パーシヴァルが短銃型煌式武装ルークスを展開し天井に向けていた。天井には穴が空き、銃口からは煙が出ている。

「……そのお客様の前で銃声を響かせないでもらいたいんだがな」

口論を発砲で止める人間がガラードワースに所属しているのはどこか新鮮だった。

「失礼しました。つい癖で」

パーシヴァルは無表情のままそう頭を下げるとレイシアは苦い表情を浮かべる。

「見苦しい所をお見せしまして申し訳ありません。この子の引き金は

本当に軽くて学園の生徒会室の天井にも何度穴があいたことやら……」

「… 案外ガードワースにも癖がある奴がいるんだな」

あるいはそういう人格だからこそ《聖杯》に選ばれたのかもしれないが。

「おっと、そろそろ試合が始まるね」

アーネストが言っている通り、この一連の流れが起きていく間に試合が始める直前になっていた。ステージにはすでに2ペアが向かい合っている。星導館ペアは煌式武装を起動させるがそこに実況が反応する。

『あーつと!?？天霧選手《黒炉の魔剣》を起動しない!?？これはどういうことなんでしょう?』

『んー、《黒炉の魔剣》は気難しいことで有名っすからね。調整でもしてるのかもしれないっす』

実況が言っているように、綾斗は普通の剣型煌式武装を起動していた。持て余している以上、こちらの方が小回りが効くといった利点はあるが……。

(防衛不可の性能を捨てるほどのものか?)

不自然ではある。まあそれでもまず勝てるだろうが……。疑問に思っているとアーネストが理空に話しかける。

「雲崎君はどちらが勝つと思う?」

「星導館ペア」

「即答ですね……」

バツサリとガードワースの生徒会室の中でガードワースペア側の勝利の可能性を切り捨てる理空にレイシアは引き気味に呟く。アーネストは穏やかな表情を浮かべたままさらに聞いてくる。

「解説願えるかな?」

「《鎧装の魔術師》にとって《華焰の魔女》は相性が悪いし、《輝剣》に至っては純粹に実力不足。ましてやあんな軽くて窮屈な剣じゃどうやったって《叢雲》には届かない」

綾斗とユリスのことを敢えて二つ名で言っただけで自分と深い関わりを

持たせないような言い回しをする。

「軽くて窮屈？ どういうことですか？」

「剣の質の話。実戦で打ち合ってみれば多分分かる」

自分の学園の後輩をこうも酷評されレティシアは苦々しい顔を浮かべる。

「質云々はよく分かんないけど、エリー達じゃ厳しいのは俺も同感だなー」

「そうだな。《叢雲》にはもう時間稼ぎも通じない以上、倒すのは至難の業だろう」

ケヴィンとライオネルも理空の意見に同意してしまい、レティシアはさらに顔を顰める。アーネストは相変わらず穏やかな雰囲気、パーシヴァルはずつと無反応だった。

『《鳳凰星武祭》^{フェニクス} 準決勝第2試合、^{バトルスター} 試合開始！』

もう一つの決勝枠を決める戦いの火蓋が切られた。

*

『勝者！ 天霧綾斗 & ユリス・アレクシア・フォン・リースフェルトペア！』

「本当に貴方の言った通りでしたわね……」

レティシアは理空の観察眼に感心すると同時に折り合いの悪いレヴォルフの人間の言った通りになる歯痒さで複雑な気持ちを混ぜながら呟く。

そんなレティシアからの声は理空の耳に入っていない。綾斗とユリスは勝った直後、走ってステージを退場した。普通決勝を考えるのであればそんなところで走る必要はない。まるで他の何かに急いでいるかのような……。

—— 《黒炉の魔剣》が後々面倒なことになるんだとよ。

イレーネから聞いた情報が頭をよぎる。ディルクのことだ。脅迫で使わせないようにさせても不思議じゃない。それに、第1試合の開始1分ほどの時に僅かに殺気を感じた。

ということは、何らかの弱みを握られている可能性が高い。『綾斗の』ではなくとも、『綾斗の周りの』でもいいのだから。

「ちよつと、聞いていますの？雲崎理空」

レティシアの声で現実に戻される。

「ん？何だ？」

「何だじやありませんわよ。私の声に全然反応してなかったじやありませんの」

「ああ、少し考え事をしていてな」

「どうかしたのかい？」

「別に大した事じやないから気にしなくていい」

理空の考えが正しいなら、綾斗達からしてもこのことを知られるのは不味いだろうから黙っておく。

「じゃ、試合終わったからオレは帰る」

「ちよつと！外に誰もいないことを確認してから——」

「その必要はない」

「？どういう——えっ!?？」

アーネスト達の目の前から理空は煙のように消えていた。

「……記録映像で見たことはあつたけど、実際見ると摩訶不思議な能力だね」

「全くですわ。私やパーシヴァルとの相性が悪すぎます。まあ、《獅鷲星武祭》に出る確率は低いでしょうけど」

「悪い奴には見えなかつたぜ？話は通じるし」

「そうだな。レヴォルフの中では異端な男だ」

「……………」

チーム・ランスロットのメンバーもまた、理空の能力と性格を頭に焼きつけた。

*

チーム・ランスロット5人を間近で見れたのは幸運だった。能力の干渉範囲がさらに広がった。能力を見せた人間が増えたのを差し引いてもプラスだろう。昨日面倒事に巻き込まれたのが幸いした。

話は変わるが綾斗の《黒炉の魔剣》について調べたところ、緊急凍結処理が行われていることが発覚した。十中八九デイルクが黒幕だろう。他に考えられない。

もう処理が終わっているのであれば急ぐ理由は無い。それに、星導館にはクローディアがいる。何らかの策を張り巡らせるだろう。

クローディアならば、処理をしているように装って弱みを回収しようとしそうだ。

そもそも何を取られた？

物は可能性が低い。替えが効く場合がほとんどだ。だとすれば周りの人間、つまり人質の可能性が高いだろう。そうなる则取り戻すのはかなり難しい。どこに拉致したのかがわからないからだ。

ある程度絞ることは出来る。一般人や警備隊が入り辛い場所が一番だろうから、ロートリフト歓楽街のどこかだろう。しかし、歓楽街だけでもかなりの広さだ。

場所さえ分かれば後は簡単だ。誘拐犯を倒せばいい。レヴォルフの諜報機関——『グルマルキン黒猫機関』は単独任務がほとんどなのだから。

さて、どうするか。本来手助けする理由は無。綾斗達には興味はあるから絶対に手助けしたくないというわけでもないが……。

まあ、今日中には見つからないだろうから明日考えれば良い。そう結論付けて瞼を閉じた。

『黒猫機関』

「……こんなところか」

1時間程仮眠した後、調査を始め、端末の地図の建物のいくつかに印をつける。歓楽街ロトリフトの今現在使われていない場所だ。かなり時間がかかったためこれでもれも違っていたら気が滅入る。

歓楽街は金さえ払えば融通は効くが、ディルクを嫌っている連中は多いので協力は仰げない。人質と一緒に留まるならば、空いた建物が望ましく考えるだろう。1つに絞ることは出来なかったがこの中のどれかならば全く問題は無い。変装はせずに外に出た。

*

まずは1カ所目。客の一人が大暴れし営業出来なくなり、今は工事の中のカジノだ。しかも、今は工事が中断されているとのことだ。入口の前まで歩いていくが、とある異変に気がつく。

(セキュリティが解かれている……?)

セキュリティがかかっていることは予想がついていたのでハッキングなり何なりして入るつもりだったが、肩透かしを喰らったような気分になった。

工事が止まっているならセキュリティは普通作動している。それが解かれているということは――

(天霧達がここを特定した? どうやって? 歓楽街まで絞れてもその先は手詰まりだと踏んでいたが……)

いや、いい。どちらにせよ、1カ所目で当たりを引いたのだ。その事実を喜ぶべきだろう。

中に入り、扉を開ける。

「フンッ!」

大斧型煌式ルックス武装を持った大男が人の形をした黒い影をまとめて切り裂いていた。影ということは、実行犯は《魔女》ストレガか《魔術師》ダンテ。

大男――レスターは理空に気が付き、入口に体を向ける。

「テメエ、《消失の魔術師》ヴェイカントか!? 何でこんな所にいやがる!?」

「…… 1回目の時といい、血気盛んな奴だ」

「ああ？」

最初に会った時は理空が変装していたため、何を言っているのかわかっていない様子のレスター。

「何でもない。お前1人か？」

「沙々宮と刀藤がつ、いる！」

倒しながら話しているため若干喋り難そうだが、律儀に答えてくれる。

「下に行ったか？」

「それが、どうした!?？」

「いや?じゃあここは任せた」

「はあ?—— なっ!?？」

倒しても再生する技のようなので能力でまとめて消し去る。もちろん、すぐにまた人形は生み出されるがその前に星辰力ブラーナを脚部に集中し高速で抜け去る。

階段を降りて下へと向かった。

*

「綺凇！」

紗夜と綺凇は誘拐犯——『黒猫機関グルマルキン』の1人と交戦していた。試合のダメージが残っているながらも連携で対処していたが、綺凇が不意をつかれ影の刃に急所を貫かれようとしていた。

——が、その影の刃が消え去る。

「……何?」

誘拐犯は、いや、紗夜と綺凇も呆然としていた。そこへ、淡々とした声と共に理空が入って来る。

「流石は『黒猫機関』、珍しい能力者がいるもんだ」

「雲崎理空?何故ここにいる?」

「さあな。んで、お前何番だ?」

「何のことだろうか?」

カマをかけたのだが、惚けられる。プロなだけはあるようだ。

影の刃が足元から出されるが能力で消し去る。

(…………… 話に聞いていた通りの能力の様だ。厄介だな)

誘拐犯は内心舌を巻いていた。紗夜と綺凜だけでも手間取っていたというところにさらに自分の能力が効かない相手が来てしまい、任務の難易度が格段に上がってしまったためだ。

紗夜のところに人質がいる以上、それを盾にするのも難しい。

「オレにばかり集中してて良いのか？」

「ッ!?」

意識を戻した綺凜の一閃が頬を掠める。このままでは不味い。一日影に潜って距離をとろうとする。

「無駄だ」

理空の無慈悲な声がかかり影に潜れなくなっているのに気がつく。

「何だと!?」

「はあ!!」

動揺している隙に綺凜が両肩に斬撃を叩き込む。

「ぐ…………… 大した剣技だが、詰めが甘いんじゃないのか？」

「——いいや、充分だ」

紗夜の煌式武装による砲撃が叩き込まれる。が、誘拐犯はすでにその場にはいなかった。

「…………… 逃げられたか」

紗夜は悔しそうな声で呟く。

「沙々宮様、刀藤様！ありがとうございます！あと、ええと……………」

「気にするな」

「は、はい……………」

やはり綾斗達の誰かの関係者が拉致されていたようだ。《黒猫機関》の人間の能力を見ることに集中していたため、頭の隅に置いていたが。

「…………… それで？何故ここにいる？」

紗夜が警戒心を隠さない態度で理空に聞いてくる。

「別に？《黒^{セル}炉^{ベレ}の魔^{スタ}劍》に適合する人間は貴重だからな。緊急凍結処理されるのは惜しいと思ったんだよ」

「なっ!? どうしてそのことを……………!?」

「へえ、やっぱりそうだったのか」

「え……？あ……」

誘導されたことに気がついた綺凜。元々理空に対しては畏怖の念を抱いていたが、それがさらに深まった。

「で？そのガキは何だ？」

「ユリスの国の人間。名前はフローラ・クレム」

「そうか」

見たところ10歳程度といったところか。ユリスの国ではこの歳からメイド服を着ているのか、と斬新に感じた。

紗夜は理空の返答に納得がいつてないのか、態度を崩さない。

「まあ、お互いに色々聞きたいことはあるだろうが後にするか。早く報告しないと試合が終わるぞ？」

理空から言われたのが癪ではあるが、その通りなので紗夜は端末を出してクローディアにフローラの救出報告をした。

*

《フェニックス鳳凰星武祭》決勝は綾斗&ユリスが勝利し、優勝ペアが決定した。

リムシイのパーツと合体したアルディは綾斗が《黒炉の魔剣》を使い始めてからも互角以上に戦っていた。ユリスは綾斗の可能性に賭けたらしく、《黒炉の魔剣》のサイズの最適化に努めたようだ。普通の剣ほどの大きさになった《黒炉の魔剣》を持った綾斗は速度でアルディを上回り、校章を破壊した。

試合が終わった後の取材でクローディアが誘拐事件について暴露し、

会場は大騒ぎになりインタビュアの時間は延長されて、結果的に表彰式も大幅に遅れて開催された。警備隊が捜査をするそうだが、誘拐犯には逃げられたためディルクはまず処分を受けないだろう。

そんな感じの流れの後に表彰式が始まり、これはいつも通り終わった。

表彰式が終わり、理空は綾斗とユリスの控室に向かう。後日に話をしてもいいが向こうもこちらに聞きたいことがある以上、早いほうがいいだろう。

控室のインターホンを鳴らす。

『どうぞ』

クローディアの声とともにドアが開く。

綾斗達5人が椅子に座っていて、クローディアはいつも通り柔和な笑みを浮かべ、ユリスと紗夜は敵意を隠さず、綾斗と綺凜はやや緊張した様子だった。

「そこへかけて下さい」

「ああ」

「表彰式の後すぐに来るとは思っていませんでしたよ」

「早い方が良いと思つてな」

「そうですね。まずはお礼を言わせて下さい。フローラの救出の協力もですが、刀藤さんの危機を救ってくれたそうですね」

「別に良い。本題に入れ」

「では単刀直入に言います。どうやってフローラの誘拐を察知したのでしょうか?」

準決勝第2試合で《黒炉の魔剣》を使っていなかったこと、終わった後に走って退場したこと、イレーネからデイルクが《黒炉の魔剣》を潰そうとしていたのを聞いたこと、準決勝第1試合のときに殺気を感じたこと、それらから何かしらの脅迫を受けていたことを推測したといった旨を話すと、ユリスと綾斗と綺凜は驚愕の表情を浮かべる。

「なるほど、見事な洞察力ですね。ではあの建物と推測した理由は何でしょうか?」

「……それはむしろオレが聞きたいな。どうやってあの場所を特定した?」

「それは綾斗しか知りませんね」

「……天霧」

「えっと、イレーネに歓楽街が怪しいと助言してもらつて……」

「歓楽街に絞つたのは納得がいく。問題はその先だ」

「ごめん、ちよつと言えなくて……」

「言えない?」

「どういう事だ?綾斗が疾しいことをするとは思えない。そもそも綾斗だけで特定は出来ない。誰かに協力してもらつた?そしてその

人間に口止めをされた？探知系の能力者なんてそんなに都合よくは

(… まさか《戦律の魔女》^{シグルドリーヴァ}に協力してもらったのか?)

それならば合点がいく。シルヴィアは《歡樂街》あたりを搜索して
いただろうし、あの能力ならば特定可能だろう。

「… まあ良い。オレは歡樂街の今現在使われていない建物を調べ
上げたただけだ。《悪辣の王》^{タイラント}に協力したがる人間はほとんどいないだ
ろうからな」

「そうですか。ではそこまでのしたのは何故でしょう?」

「『黒猫機関』の人間を見ておきたかったんだよ。能力の性質上な。こ
れ以上は無理だ。無闇に能力の詳細は知られたくないからな」

「いえ、ありがとうございます」

思っていた以上に話は円滑に進んだ。ユリスと紗夜辺りが突つか
かって来そうだったが、しっかりと弁えてきたから楽だった。

「話が終わりならオレは帰るぞ」

「待つて下さい」

「何だ?まだ聞きたいことがあるのか?」

「はい。——私と連絡先を交換していただけませんか?」

「… はあ?」

これは予想外だ。警戒されていそうだったから、そういうことを頼
んでくるとは思わなかった。

「… 理由は?」

「今回のように《悪辣の王》から妨害や嫌がらせを仕掛けてくる可能性
があります。その時にいち早く情報を仕入れたいのです」

「そうじゃない、何でオレなんだ?」

先程の話から推測するに、イレエネの連絡先を持っていてある程度
の信頼関係は得られているのだろう。何故わざわざ理空にも協力を
仰ぐのが理解出来なかった。

「貴方が《悪辣の王》の手駒でないことが1つ、そして——」

クローディアは笑みを消して真顔となる。

「一時期あの《孤毒の魔女》^{エレンシユキィガル}に対抗出来ると目された人間ですからね」

「それは流石に過大評価だが…… まあ良い」

理空はアドレスをクローディアに表示する。

「受けてくれた、ということでしょうか？」

「ああ、その代わりオレが欲しい情報を持っていたらオレに寄越せ」

「…… 良いでしょう。ですがそれは可能な限り、で良いですね？」

「ああ。互いにな。じゃ」

その場から理空が消える。

「大丈夫なのか、クローディア」

「ご心配には及びませんよ、ユリス。実際、今回の件では助かったでしょう？」

「それは…… そうなのだが……」

やはり、不安は拭えなかった。あの男はどこか得体が知れない。それは他の3人も同じ考えだった。

「そう心配しないで下さい、大丈夫ですから」

クローディアは依然として態度を崩さなかった。

*

会場を出て帰路についた後に再開発エリアの道を歩いて行く。歓楽街の情報を収集するためだ。

「……………」

強烈な違和感に襲われる。ここは再開発エリア。加えてこの時間帯だ。人が少ないのは当たり前だが、それにしてもいなさすぎる。

「雲崎理空だな？」

後ろから声がかかる。振り向くとローブを深く被った人間がこちらを向いている。胸に膨らみがあることから女性だろう。

「ああ。で、お前は？」

「本来名乗る義理は無いが…… まあいい、我はヴァルダだ」

「何の用だ？」

「ヴァルダではなくて私が君に用があるんだよ、雲崎理空君」

ヴァルダの後ろから歩いてくる顔の上半分に仮面をつけた男が歩いてくる。

初対面ではあるが、理空はこの男に見覚えがあった。あの試合で天

霧遙を斬った張本人。その人間が被っていたものと同じだ。何より手に持っているものが特徴的だった。

「《赤霞の魔劍》、《処刑刀》か」

「ほう、私のことを知っていたか」

「これでも裏でそれなりに長く生き抜いてきたもんでね」

「なるほど、《蝕武祭》を見ていたというわけか」

《処刑刀》は得心がいった様子でその手に《赤霞の魔劍》を弄んでいた。穏便に終わることは無さそうである。純星煌式武装を構えているのがその証拠。

(能力を本気で使うことになりそうだな)

柄にもなく、理空は気を張り巡らせていた。

《獅鷲星武祭》

《処刑刀》

理空は警戒心を最大限に張り巡らせていた。理由は目の前にいる2人組——ヴァルダと《処刑刀》ラミナモルスである。

「お前らが《悪辣の王》タイラントと繋がっているのは分かったが……正直、何の用かわからないな」

「ふん、惚けるな。今まで目立った行動をとっていなかった貴様が本格的に妨害してきたのは明らかになっっている」

妨害？誘拐事件の件か？何故自分が関与していることがばれている？あの場に気配は感じなかった。

「そう身構えないで欲しいかな。我々は忠告しにきただけなのだから」

「忠告？」

「そう、これ以降妨害が入れば君に容赦はしない。オーフェリア嬢に對抗出来る能力者だとするならば、計画に支障が出かねない」

「計画？何のだ？」

「それを言う義理は無いね。君がこちら側に来てくれるのであれば話は別だけれど」

おかしい。この男の正体を知っている気がするのだが、霧がかかってしまっている。顔は上半分しか隠れていない。ほとんど変装にはなっていないのだが……

「無駄だ。この領域は我の認識障害がかかっている。《処刑刀》ラミナモルスの正体を暴くことは出来ん」

思考中にヴァルダの声が入り込む。ヴァルダをよく見ると首元にはウルムⅡマナダイトが埋め込まれたネックレス型純星煌式武装オーガルクスがかかっている。ということは、異様に人がいないのもヴァルダの仕業と考えるのが自然だろう。

（いや、待て。覚えがある。ラデイスラフ・バルトシーク教授が造った《翡翠の黄昏》の元凶となった純星煌式武装——《ヴァルダⅡヴァオ

ス》、か?)

「このことは口にしない方が良いでしょう。余計に警戒を強めさせてしまう。」

「さっきの忠告だが……約束も保証も出来ないな」

「そうか……なら仕方がない」

——刹那。《処刑刀》が懐に飛び込んできて袈裟斬りを仕掛ける。それを回避した後すぐに短剣型煌式武装^{ルークス}2本を起動。左手から突きを数発放つ。それを躲された直後鳩尾に蹴りを入れ、《処刑刀》は吹き飛ぶが感触が軽い。後ろに飛んで衝撃を逸らされたようだ。

「ふう……危なかった。能力ばかりが目立っているけど、体術や短剣術も相当なものだね」

「よく言う。ヴァルダを参加させていない以上まだまだ余裕はあるんだろ?」

理空は内心毒づいていた。可能なら今の攻防で仕留めるまではいかなくてもダメージは負わせておきたかった。

「それにお前も全力を出していない。いや、出せないと言った方が正しいか?」

「……何のことだろうね」

《処刑刀》もまた、毒づいていた。《蝕武祭》での試合を見られているという事は自分の闘い方のみならず、遥にかけられた封印まで知られているということだ。反対に理空の情報はほとんどない。

だが、理空も《処刑刀》もこのまま斬り合いが続けば不利となるのは理空の方だと見抜いていた。《赤霞の魔剣》^{ラクシャナーダ}の能力は『刀身の分割』。擦りでもすれば体内に破片を潜り込ませられ致命傷となる。ましてや、理空が使っているのは普通の煌式武装。《赤霞の魔剣》と打ち合うことは不可能に等しい。

故に、理空は次の一手を打った。

「ぐあっ!!??」

「チツ」

いきなりヴァルダ(厳密にはヴァルダが乗っ取っている身体)の左肩から左胸にかけて出血する。悪寒を感じ咄嗟に身を引いたのが

ヴァルダにとっては幸いだった。その影響でローブで隠されていた素顔が明らかになるが、知らない顔だ。理空としてはこれでヴァルダを仕留めて《処刑刀》の正体を暴くつもりだったので、思わず舌打ちしてしまう。が、それでも《処刑刀》の意識は逸らせた。

《処刑刀》が次に意識を戻したときには、理空はその場から消えていた。

*

理空はとあるホテルに避難していた。この状況で自分の家に帰るのは不味いと判断したためだ。あれ程の強敵と戦った経験は思い出すのが難しい。あの時尾けられていた気配は感じなかったということ。誘拐事件が起きた後とは、理空の来る道がわかっていたということ。誘拐事件が起きた後にいつもの道で歓楽街ロートリフトに向かったのは迂闊だったかもしれない。だが、そもそも自分の妨害がなぜ漏れたのか？漏れる材料は何もなかったはずだ。考えられるとするならば――

(何らかの能力者、樫丸あたりが怪しいな)

そうとしか考えられない。でなければ何故樫丸を秘書にするのが分からない。《パンドドラ》のような未来予知能力をもつものがある以上、そういった感知能力者がいてもおかしくない。

誰かに今回の件を話すか？綾斗達はあの2人と無関係というわけではない。むしろ、特に綾斗は関係が大ありだ。だが、はつきり言うてまだ早すぎる。今の綾斗ではなす術なく殺されて終わりだろう。では、星猫警備隊シヤーナガルドムの協力を仰ぐか？融通の効かない警備隊はあまり好きではなかったが、この際そんなことも言ってられないだろう。あの2人に《孤毒の魔女》エレンシユキイガルまで加われれば打つ手がない。《蝕武祭》を潰したのは星猫警備隊長長なのでこの情報は欲しがらるだろう。

今、理空が取れる選択肢は4つ。

- ① 警備隊長にこの事を話す。
- ② 綾斗達にこの事を話す。
- ③ ①、②両方の行動をとる。
- ④ 誰にもこの事を話さない。
- ④ は論外。おそらく理空1人で太刀打ちするのは難易度が高すぎ

る。①は一番無難ではある。が、《処刑刀》は綾斗が遥の弟であること
を知っているだろう。綾斗に接触しても不思議じゃない。《処刑刀》
の情報は綾斗だけにでも話しておいた方が良い、のだが、綾斗が下手
に挑んでしまわないかが懸念材料だ。別に綾斗一人死んでも何とも
思わないが、向こう側は《黒炉セル・ベレスタの魔剣》を相当に警戒している。その
適合者を活かさない手はない。詰まるところ、理空が取るべき行動は
①か③だろう。さて、どうするか。

とりあえず、これから数日はここに留まりじっくりと考えることに
した。

*

「…… 凄い傷だね。大丈夫かい？」

「大丈夫…… とは言い難い。あの男が放った正体不明の攻撃は侮れ
ん」

《処刑刀》が言うようにヴァルダの左肩から左胸にかけてザツクリ
と抉れている。咄嗟に身を引き急所を外れたのが幸이었다。

「鋭利な刃物で斬られたような傷跡…… これも彼の能力ということ
かな？二つ名に準えて言うのなら『消撃』といったところか」

『結局奴についてちゃ何も分からずじまいかよ。せつかく部下に占わせ
て妨害を事前に発覚させたつてのによ』

端末のモニターに映る男——ディルク・エーベルヴァインは苛立
ちをヴァルダと《処刑刀》にぶつける。

「そう言わないでくれ。彼自身も相当な手練だったんだ。能力を間近
で見れたことを僥倖と思った方がいい」

『あんたについての情報は漏れているのか？警備隊長辺りと手を組
んでもおかしくねえぞ』

「元はと言えば君の乱暴な一手が招いた結果だ。もう少し自重してく
れ」

『…… チッ』

結果的に見ればそうなるので、ディルクとしても反論の余
地はない。

「雲崎理空については警戒を高めた方がいいだろう。裏に精通してい

る点も含めてな」

「オーフェリア嬢とも旧知の仲と聞いているしね。彼女から彼の能力については聞かされていないのかい？」

『聞いたならとつくに知らせている。知らないとしか返されねえよ』

「ならば雲崎理空をこちらに引き込むのはどうだ？ 計画の内容を話せば協力してくれるかもしれないぞ」

「そうなってくれば良いんだけどね……」

ヴァルダは《処刑刀》のあまり乗り気ではないその反応を見て溜息をつく。乗り気ではないというよりも不可能に近いということを感じていた。あれはそういうことに全く興味の無い眼だ。理空の助力を得るのは無理だろう。

3人は頭を悩ませていた。容赦なく殺しにくる分あの警備隊長よりも厄介となる可能性が高い。人質をとつても無駄だろう。迷わずに切り捨てる光景が目に見えかぶ。

明確な目的も持たずに自分を見失わず、敵を排除するために手段を選ばないというその理空の異端さを垣間見た気がした。

《時律の魔女》

ホテルに1週間留まったが、あれから特に何も進展は無かった。理空は学生なので当然ながら門限というものを守らなければならないのだが、そこは《冒頭の十二人》の特権で学外に寮をとっていたため、全く問題にならなかった（そもそも守る人間もレヴォルフの中では少数だが）。こういう特権があるものだから返上するのが惜しくなってくる。

そんなこんなで襲撃から2週間ほど経ち、そろそろ頃合いと判断しとある場所へと向かうために外に出る。

支度を済ませた後に星獵警備隊シヤーナガルドムの本部へと向かった。

*

星獵警備隊の本部の入口付近、に着いたのだが2人の警備隊員に声をかけられた。

「おい、君。何をしている？その制服……レヴォルフのものだろう？」

「まさかここで問題を起こそうとしているのか？」

気配も絶たずにレヴォルフの制服を着ている人間が警備隊本部に近づいていれば声がかけられるのは当然ではあるが、理空は元々私服のレパートリーが少ないし気配を絶つていてもあの警備隊長には気が付かれ益々怪しまれるため仕方がないと言えば仕方がなかった。

なので、端的に要件を告げた。

「ヘルガ・リンドヴァルに会わせて欲しい」

「……それを我々が受理すると思うのかね？」

予想通りの返答。が、理空とてそれで引き下がるつもりもない。

「オレがレヴォルフの生徒だから警戒するのも分かるが、あの警備隊長殿なら特に問題はないだろう？」

「だとしても、会わせる理由はないな」

「仮に君が問題を起こしたとしても警備隊長の手を煩わせるまでもない」

「……とりあえず、名前だけでも通してくれ。まずはそこからだ」

意外と頑固なため理空も譲歩する。このままだと平行線で終わってしまう。

「……まあ、良いだろう。名前を教えてください」

「レヴォルフ黒学院高等部一年、雲崎理空」

「警備隊長が会う意思が無かつたらお引き取り願うぞ」

厳しい口調で理空に忠告する1人の警備隊員。それもそのはずで、レヴォルフの生徒は乱闘騒ぎやら何やらで度々警備隊は働かされる。マフィアの中ではレヴォルフの現役学生で構成されているものもあるので警戒せざるを得なかった。

「ああ、それで構わない。日を改めるとする。それと、その警備隊員」

2人の内の1人に目を向ける理空。向けられた警備隊員は怪訝な表情を浮かべながら聞く。

「何かね」

「いや？相手との力量差くらいは把握しておけよ？」

「っ⊠」

理空がそう言った相手は先程「警備隊長抜きでも理空に対処出来る」と言った人間だった。警備隊に入るには警備隊長が設定した試験を突破してしなければならない。要するに、手練の人間のみで構成されており、この隊員もその例外に漏れていないのだが、その手練ならではの勘が告げている。

——この男は危険だ、と。

それはもう1人の方も感じ取ったが先程名前は通すと言ってしまった。もう話を警備隊長に通すしかない。話を通すために1人中へ入った。

*

とある一室にて。

「警備隊長、失礼します」

「どうした？」

「いえ、雲崎理空と名乗る人間が警備隊長と会いたいそうです」

「雲崎理空だと……？」

ヘルガはその名前に聞き覚えはあった。あのレヴォルフの序列四位だ。レヴォルフの生徒にも関わらず、警備隊の世話になるような話は一切入ってこない異端な生徒。

今まで目立った行動をしていなかったのに、何故ここへ？

ヘルガは思案し、返答する。

「……分かった。中に入れてくれ」

「本気ですか？？」

ただでさえ、《鳳凰星武祭》^{フェニクス}の閉会式時に発覚した誘拐事件で普段よりも多忙となっている。

「断る」と言えば済む話ではあるが、向こうに何か目的があるのは明らかだ。そう簡単には引き下がってくれないだろう。そうならば今日帰らせてもまた後日来られて結局いたちごっこになる。

「呼んできてくれ」

「……了解」

警備隊員は気が進まないながらもその命令に従った。

*

警備隊長は受諾してくれたようで2人に中へ案内された。警備隊長は聡い。ここで断っても早いか遅いかの違いでしかないと判断したのだろう。そしてそれは正しい。理空は断られてもまた来るつもりでいたのだから。

案内された部屋に入る。

「君が雲崎理空君か」

凛とした面立ちの美人で、均整の取れた引き締まった肉体を警備隊の制服に包んだ女性がこちらを向いて立っていた。

「ヘルガ・リンドヴァルで合ってるか？」

——ヘルガ・リンドヴァル。

星狼警備隊の創設者にして、現在も隊長を務める女性。《王竜星武祭》^{リンドブルス}を二連覇した最初の人物で、学生時代の二つ名は《時律の魔女》^{クロノテミス}。自らの周囲の時間を操る能力を持ち、アスタリスクの歴史上最強の魔女との呼び声が高い。年齢を含めた肉体の時間も操作可能であり、重傷を負っても時間を巻き戻して一瞬で完治できる。

姿が一定ではないため、一応確認を取る。

理空が敬語を使わないことに何か思うところあるのか、案内をした警備隊員は眉を顰める。が、ヘルガは気にせずに戻す。

「ああ。初めまして」

そう言つて手を差し出し出してくる。手を取ると凄まじいほどに研ぎ澄まされた星辰力ブラーナを感じた。

「警備隊つてよりはあんた個人に用があるから他の人間には席を外してもらいたいんだが」

「貴様！いい加減に——」

「分かった」

「警備隊長！」

理空の態度についてに激昂しかけた隊員を制するヘルガ。

「しばらく外に出歩いてくれ」

「……………」

無言で部屋を出て行く隊員。苦虫を噛み潰したような表情をしていたが、そんなことはどうでも良い。

「そこにかけてくれ」

ヘルガに促され、椅子に座りヘルガも机を挟んで向かいに座る。

「正直、意外だ。流石にこれは洩られると思つていたんだが」

「私自身も君には元々興味があつたからな」

「へえ？ただの序列四位を警備隊長殿が？」

「ただの序列四位ならそこまで強い関心は出てこないさ」

噂通り、いや、噂以上に鋭い人間だ。人の本質を見抜くことに長けている。

「まあ、それは置いておくとして…………… どういう要件かな？」

「とある情報を伝えにきた」

「情報？」

ヘルガは怪訝そうな表情を浮かべるが、理空の一言でそれが全て吹き飛ばぶ。

「——『処刑刀』」
ファミナモルス

「っ!?？」

ヘルガの目が一気に見開く。

「……………何故君がその名を知っている？」

「《蝕武祭》^{エクリプス}を観たことがあるからな」

「……………成程。それで、わざわざここに来たということは何らかの情報をこちらに提供してくれるということかな？」

「話が早くて助かる。2週間前に《処刑刀》に襲撃された」

「何!?!?」

ヘルガは思わず立ち上がった。《蝕武祭》の専任闘技者であり、自身が長年追っている人間。そんな人間が一学生を襲うのは完全に予想外だった。

「もう1人来ていたが、そっちはヴァルダと名乗っていた」

「……………そうか」

「《処刑刀》は封印処理がされているはずの《赤霞の魔剣》^{ラクシャリナーダ}を持っていた。どこかで見たことがある印象の人間だったが、思い出そうとすると霧がかかったような感覚になった。顔は上半分しか隠れていなかったのにだ」

変装としては雑だったんだがな、と付け加えて理空は肩を竦める。

「まさか……………精神操作系の能力者? いや、だとしても星脈世代^{ジエネステラ}に干渉出来るはずも……………純星煌式武装か?」

「オレも同じ考えだ」

《ヴァルダIIヴォアス》のことは敢えて口にしないでおいた。あれは『銀河』の最上級機密事項だ。それを理空が知っていると漏れるのはリスクが大きい。

「《蝕武祭》^{エクリプス}には精神操作系の能力者が関与している可能性も考えていたが……………そういうことか」

「ヴァルダ本人も認識阻害という言葉を口にしていたからな。やたら人がいかなかったし、人を寄せ付けない領域も作れるってことだろうよ。《蝕武祭》では見なかったが《処刑刀》と一緒にいた以上、関与していると見ていい」

認識阻害から人払い。だとするならば人の記憶を改竄するなり洗脳するなり出来ると見て良いだろう。星脈世代にあそこまで効くとい

うのは驚きだが。

「ところで、襲撃されたと言っていたな？」

「ん？ああ」

「襲撃された理由に心当たりはあるかな？」

「ああ、それか。別に、オレが例の誘拐事件の妨害をしたことがバレたらしい。黒幕は《悪辣の王》^{タイラント}だろうから、恐らく手を組んでいる」

「……何故君が関与していたと知られたんだ？」

「何らかの方法で向こうは感じ取ったらしい。そういう能力者がいるんだろうな。その上《悪辣の王》のところには《孤毒の魔女》^{エレンシユキィガル}がいる。厄介過ぎる」

ヘルガ自身が想像していた以上に《処刑刀》は危険な存在なようだ。封印処理がされているはずの《赤霞の魔剣》の所持、精神干涉系能力者、果てには《悪辣の王》とその手駒。この情報が無かつたら危なかったかもしれない。が、

「それで、君の要求は？」

「……何がだ？」

「これほどの情報をただで渡すような人間には思えないからな」

「……本当に鋭いな。その通りだ。——《処刑刀》に関する情報を可能な限りオレと共有して欲しい」

要するに、自分と手を組めということだろう。

「学生である君がこれ以上関わる必要もないだろう？」

「オレとしてもそれが最善ではあるとは思っている。ただ、向こう側がそうしてくれないような気がしてな」

「だとしても、これは我々警備隊の仕事だ。君が危険を冒す必要はない」

「……何か勘違いしてないか？ヘルガ・リンドヴアル」

一旦区切って正面からヘルガを見据える理空。

「オレはあいつらを正義感から捕まえたいわけじゃない。オレにとつて敵だから排除しておきたいだけだ」

「……」

「それに今さらオレが蚊帳の外に逃げるなんてそんな甘いことは出来

ないってあんた程の人間なら気づいているだろ？」

それでも、一学生を巻き込むというのは気が引けた。だが、理空の言っていることもまた事実。ヘルガは腹を括った。

「アドレス……ってことはオレの要求を呑んでくれたってことでいいんだな？」

「ああ、何か進展があつたら報告しよう」

「感謝する。それじゃ」

それを終わりに理空はヘルガの目の前から消えた。

「ああ、もう入ってきて良いぞ」

外に出ていた警備隊員が中へ入ってくる。

「大丈夫でしたか、警備隊長」

「ああ、有益な情報提供をしてくれた」

「それで……あの男は？」

「消えた」

「は？」

「いや、それよりも仕事を再開しよう。まずは誘拐事件の調査からだ」話を逸らして誤魔化する。本当に目の前から消えたのだ。あれは実際に見なければ信憑性が薄いし、伝わりづらいだろう。異質なのは能力だけではなかった。本人はさらりと言っていたが《蝕武祭》を見たことがあるということは十歳前後の時から殺し合いを見ていたということになる。

何より、あれは学生が向ける眼ではない。

一体どういう風に育てばあんな眼が出来るのか。

(雲崎理空、か。調べてみるとしよう)

今日も警備隊長は多忙だ。

若宮美奈兔

ヘルガとの対面からしばらく経ち、自宅でくつろぐ。あの襲撃以降、ロフト歓楽街に行くのを控えているためかなり暇だ。そんな暇を持て余している、携帯に着信が入る。知らない番号だ。空間ウィンドウを開くと、予想外の人物の顔が映る。

『ああ、良かった。合ってたね。いきなりごめんね』

「……何でオレの番号を知っている？ 《戦律の魔女》シグルドリヴァ」

連絡先を交換してもいないシルヴィアの顔が映る。前回とは違い変装はしておらず制服姿だったが、前回とは違いいつになく真剣な表情だった。

「いや、聞かないでおく」

『そうしてもらえるとありがたいかな。ところで、今大丈夫？』

「今？別に暇だが……」

だから何だというのだろうか。

『今からクイーンヴェールに来てくれないかな？』

「はあ？」

すでに空は暗くなっている。たとえそうでなくとも、何か用件があるのならクイーンヴェール以外の場所でもいい。いや、むしろそっちの方が良いだろう。

それが顔に出ていたのか、シルヴィアは微笑みを浮かべ返してくる。

『私の用件だけならわざわざ来てもらう必要もないんだけどね。来てもらわなければ困る人もいるの』

「……」

よほど重要な話らしい。となればここで断ったら断ったで面倒になりそうだ。どうせ暇を持て余していたところだ。あの2人組がクイーンヴェール付近で襲撃してくると思えない。

だが、タダ働きされられるのも癪ではある。

「1つ条件がある」

『うん、何か？』

「…… わかった。 かけあってみるよ」

*

クインヴェール女学園。 六花唯一の女子校である。 戦闘能力よりも容姿を重視するため、前シーズンは最下位と結果は振るわないがシルヴィアや序列二位の《舞神》^{ハトール}といった強者も存在する。 女子校なだけあって春に行われる学園祭は盛況らしいが、理空は大抵家にいるため詳しくは知らない。

その学園の門の前に着き、門の端の方を向く。

「気配を消しないで早く説明しろ、《戦律の魔女》」

「…… 凄いな。 こっちから声をかけるつもりだったんだけど」

流石と言うべきか、シルヴィアは気配を消して立っていた。 《王竜星武祭》^{リンドブルス} 準優勝者なだけあってその技術は拔群だった。 それだけにシルヴィアとしてもこうもあっさりと気が付かれたのは少し想定外だったらしい。

シルヴィアは入校許可証を理空の端末に送る。

「とりあえず、中に入ってくれるかな？」

「…… 分かった」

2人は校門を通り一緒に中に入った。 少し進んだ後に、シルヴィアがベンチに座り、理空がその前に立つ。 建物の中に入らなくて良いのかとは思ったが、いちいちそこを指摘するのも面倒なのでスルーする。

「まずは私の用件からかな。 —— 襲撃されたのは本当？」

「…… 耳が早いな」

一体どうやってその情報を手にしたのか興味は出てくるが、今回の話には関係がない。

「私の探している人が《蝕武祭》^{エクリプス}に関わっていたことは以前に話したよね。 だから、その襲撃してきた人はそういうことにも関わっているんじゃないかと思って……」

「…… なるほどな」

そういうことか。 理空を襲撃してきた人間が《蝕武祭》に関わって

いるとは限らない。だが、仮にも一学園の序列四位が仕留められなかったということは(状況的にそれも知られていると考えるのが自然である)少なくとも只者ではない。事情は知らないが余程大事な人間らしいので、可能性を捨てきれなかったといったところか。

「結論から言うと、関与している奴らだ」

「本当!?？」

シルヴィアは腰を浮かせる。それを理空は冷めた目で見つめながら続ける。

「落ち着けよ」

「あ……うん、ごめん」

「オレを襲撃したのはとある2人組でな。その内の1人の方は《蝕武祭》に出ていたのを見たことがある。もう1人の方は初めて見たが、そんな奴と一緒にいた以上、関与していたと見ていい」

「……その2人組の特徴は？」

「1人は大きいネックレスをつけた女。もう1人は《ラクシャリナーダ赤霞の魔剣》を持つていて、仮面をつけた男だ」

理空の口から《赤霞の魔剣》という言葉聞き、シルヴィアは目開く。

「《赤霞の魔剣》は封印処理がされているはずじゃ……」

「そこら辺はオレもはつきりと分かっていない」

これで話せることは大体話した。そう思っているとシルヴィアから予想外の質問が飛んでくる。

「その2人組はどれくらい強い？」

負けず嫌いなのか、そういうことは気にはなるようだ。どういう風に答えるか。前回の紗夜達の例もあるから一応言葉は選んでおいた方が――

「はつきり言っていないよ」

そんな意思を感じ取ったのか、するりと声を入れてくる。そう言われれば理空としても気が楽だ。

「オレが闘ったのは《赤霞の魔剣》の使い手の方だけだが、そいつはお前よりも強い」

「…………なるほどね。腕、磨かないとなあ……………」

少し落ち込んではいるが、それでも足がかりとなる情報を得られたことによる喜びもある様子だ。

「お前の用はそれで終わりか？」

「うん、ありがとう」

これでシルヴィアの用件は終わり。そして、もう一つ。

「で？ここに来ないと困る奴つてのは？」

「あ、うん。そうだったね。こっちに来て」

さらに奥に進み、灯りの下にあるベンチに座っていたのは赤髪の少女だった。

*

「ごめんね、待たせちゃったね美奈兔ちゃん」

「い、いえ、大丈夫です！」

小柄で赤髪、頭に兎のようなカチューシャをつけた少女はシルヴィアの言葉に元気に反応する。

「シルヴィアさん、この女の人は…………？」

「男だよ」

「えっ!?？す、すいません！」

そのやり取りをみてくすくすと笑うシルヴィア。実際、今は男子生徒用の制服ではなく、Tシャツにジーパンといった格好なので女子に見えなくもない。

「さっき言った助っ人だよ」

「何のだ？というか、誰だこいつ？」

「あー、まずはそこからか。ほら、美奈兔ちゃん自己紹介自己紹介」

「は、はい。若宮美奈兔です」

「若宮美奈兔………… ああ、例の50連敗か」

聞き覚えはある。入学して以降、決闘に挑み続けるも連敗に連敗を重ねる意味歴史上に残る大記録を打ち立てた1人の生徒。

「49連敗です！」

「大して変わらないだろ」

もつと言っならどうでもいい。

「理空君も、ほら」

「…… 雲崎理空だ」

「理空、君?..さん?..」

「好きに呼べ」

普段は物怖じしない性格の美奈兔であるが、シルヴィアがこの場に
いることや最初に性別を間違えてしまった負い目からか、若干緊張し
ている。

「で?..こいつの手助けもしろと?..」

「うん。まあ、美奈兔ちゃんたちを、だけどね」

「どういう状況なんだ?..」

美奈兔が言うには、最近できた友人——クロエとの連絡が途絶え
調べようとしたところで理事長に呼ばれクロエがクインヴェールの
所有物であること、ベネトナージュの一員であること、それらを踏ま
えこれ以上関わるなど宣告されたそうだ。

別にそういうことは珍しいことでもない。ウルサイス姉妹なんか
が良い例だ。そんなことを何故気にするのかも分からないが、表しか
知らない人間からすれば納得がいかないのも仕方がないといえば仕
方がない。

「それで、クロエは《獅鷲星武祭》に絶対必要なんです!..」

「…… 一応聞くが、他の奴じやダメなんだな?..」

「クロエじゃないとダメなんです!..」

「…… そうか」

美奈兔に一通り話は聞いたがどうも引つかかる。ベネトナージュ
の一員を目立たせたくないというのはわかる。だが、そんなもの本人
に出るなど言えばそれで終わりだ。プライベートまで制限する理由
がわからない。

「クロエって奴は何をやらかしたんだ?..」

「えっ?..」

「いくら諜報機関の一員つっても、あくまで一生徒だ。普通ここまで
制限は厳しくはならない」

「そ、それは……」

難しいことを考えるのが苦手な美奈兔といえど、これを言うべきかどうかは迷ってしまう。理事長はクロエの能力は貴重と言っていた。チームメイトの1人はその能力を体験し、美奈兔にも伝わっている。話そうと思えば話せるがそうなれば自分のせいで理空にも学園の手が伸びてしまうのではないかという不安が膨らむ。

そんな不安を見透かしたのか、理空は別の質問をしてくる。

「質問を変えるぞ。いつから、連絡が途絶えた?」

「こ、この間の試合のあとから……」

「その試合の記録映像はあるか?」

「あるけど……」

「安心しろ、別にお前の口から情報を引き出すわけじゃない。オレはただ1つの試合をたまたま見ただけ。だろ?」

屁理屈かもしれないが、確かにそれなら美奈兔の懸念は解決する。シルヴィアは微笑みながら理空を見つめる。

「何だよ?」

「いや、やっぱり君は優しいなと思って」

「…… お前が対価を用意しなかったらそもそも来なかった」

「……………」

美奈兔は2人のやり取りの内容をいまいち掴めないのか、首をかしげる。

「ああ、こっちの話だよ、美奈兔ちゃん。それよりもほら、記録映像」
「は、はいー!」

空間ウィンドウが浮かぶ。決闘にしては珍しいチーム戦のようだ。ルールは《獅鷲星武祭》の同じ5対5でリーダーを倒せば勝ち。

ほとんど一方的と言っている内容で、向こうのチームのリーダーは美奈兔のサポート役をしている人間を黜っている。

「クロエってのはどいつだ?」

「この、常磐色の髪の……」

今のところ、大した働きはしていない。相手の遠距離タイプの《ストレガ魔女》の攻撃の対処に力を割いているようだ。

試合は終盤。相手のリーダーが美奈兔に意識が向いた途端に、クロ

エの周りの万応素が揺らぐ。その直後に驚いた様子のサポート役がクロエの方を一瞬向く。

そして、そのサポート役が見事なタイミングで大技を放ち、試合が決まった。

「理空君、何か分かった?」

シルヴィアが声をかけてくる。

(なるほどな、確かにこれは隠したいし変えは効かないな)

かなり珍しいタイプの能力だ。それに、今調べたところによるとクロエは《魔女》の登録もされていないようだ。

学園側が重宝するのも納得がいく。

「理空君?」

「ん、ああ。まあ、ある程度は」

「それで、どうすれば……?」

「今日は帰る」

「えっ!?」

理空のそのあまりにさらりとした言動に口が閉じない。

「今日行ってもどうしようもない。ここは少し時間を置いた方がいい」

「で、でも……」

「時間を置くつつつても明日とかでいい。もうこんな時間だしな」

あの宣告をした直後だ。警戒心は最大となっているだろう。なら、多少なりとも時間は開けた方がいい。

「んー、じゃ何時にする?」

「放課後とかでいいだろ」

「じゃ、明日の夕方あたりに連絡するね」

「ああ」

その一言を最後に理空はその場から姿を消した。

「消えた……?」

「彼の能力だよ」

「理空君は一体……?」

「少なくとも、美奈兔ちゃんたちの敵じゃないってぐらいの認識でい

いと思うよ」

シルヴィアとしても理空のことをそれほど多く知っていると
わけではない。今の認識は『悪い人では無さそう』程度だ。

だが、シルヴィアからすればそれで十分である。少なくとも、この
アスタリスクでは。

*

理空はベッドに寝っ転がり思案する。一応、材料は揃えた。果たし
て上手く出来るか。こういうことをするのも何年ぶりだろうか。

——クインヴェール女学園理事長 ペトラ・キヴィレフト。

統合企業財体の幹部でもある。以前簡単に言いくるめられたレ
ティシアとは比べ物にならない。

まあ、シルヴィアもいることだし大丈夫だろう。良い暇つぶしの一
環になりそうだ。

明日に備え、瞼を閉じた。

ペトラ・キヴィレフト

翌日、放課後。いつものように授業を聞き流し帰宅する。

帰宅して私服に着替えていると、携帯から電話の音が鳴る。空間ウインドウの色は黒。つまり、音声通信だ。

『理空君、今から来てくれる？出来るだけ急いで』

「ハイハイ、すぐに向かう」

『変装はしてきてよ？。』

「注文が多いぞ」

そう言っただけで切れる。言われなくてもそうするつもりだ。暇を持て余していたとはいえ、予想以上に面倒なことを引き受けてしまったと自嘲してしまう。

やり方は固めてある。後は、実行するだけだ。

*

「早いね」

「身体能力にそれなりの自信はあるからな」

校門の前でシルヴィアが待っていた。

昨日もそうだったが、シルヴィアの想定以上に理空が来るのは早かった。

入校許可証を送られ、シルヴィアと一緒に歩いて行く。普通に歩いてはいるが、理空と同じように気配は消しているようだ。

校舎内に入り、美奈兎と一緒にいる3人——記録映像で見た少女達がいた。シルヴィアはそこに近づくなり、気配を元に戻した。

「え……？」

「はい……？」

「ふえ……？」

穏やかな雰囲気少女と、高貴な見た目の金髪の少女、いかにも気弱そうな少女。全員世界の歌姫が目の前に現れ、固まる。

「シ、シ、シ、シルヴィア・リユーネハイム!? 何故ここへ!?」

「ソフィア先輩、知り合いなんですか？」

「一度剣を交えたことがあるだけですわ！」

「さすがの剣技だったよ」

真つ先に声を上げた金髪の少女——ソフィア・フェアクロフ。理空にも聞き覚えはあった。あのアーネスト・フェアクロフの妹だ。

「初めまして、蓮城寺柚陽と申します」

穏やかそうな少女——蓮城寺柚陽は礼儀正しく、自己紹介をする。

「知ってるよ。柚陽ちゃん天霧綾斗君と知り合いなんですよ?」

「シルヴィアさんは綾斗さんと知り合いなんですか?」

「ふふつ、まあちよつとね」

綾斗と知り合い。決まりだ。例の誘拐事件の件で、フローラの居場所を特定したのはシルヴィアだろう。まあ、今回の件とは関係がない。

「え、えつと……」

柚陽の後ろに隠れている気弱そうな少女——ニーナ・アツヘンヴアルはオドオドしている。

「初めてまして、ニーナちゃん。メルヴェイユ戦ではお見事だったね」

「え……?」

「最後の特技は凄かったよ」

その言葉を聞き、ニーナの顔がぱあつと明るくなる。

美奈兎は理空の姿が見えないことに違和感を感じる。

「あれ?理空くんは……?」

「ここにいますぞ」

「えっ!?!」

シルヴィアの一步後ろに理空は立っていた。

思わず、シルヴィアは感嘆してしまった。ここまで一緒に歩いてきたにも関わらず、見失いそうになるほど気配を絶つのが巧かった。

そして、それは柚陽も同様だった。

(重心の運び方といい、相当な手練のようですね……)

柚陽は綾斗同様、《識》の境地を使える。にも関わらず、ほぼ目の前にいるのに気がつくことが出来なかったのは初めてだった。

「あなたは……?」

「…… 雲崎理空だ」

名乗ってはおいいた。所属学園まで言うとは面倒そうだから伏せておく。

「雲崎理空……？どこかで聞いたような……。」という声が聞こえたが、聞き流す。

「早く移動するぞ。ギャラリも集まってきたしな」

滅多に顔を見せないシルヴィアの存在によって、好奇心からくる視線がチラホラあった。

「うん、そうだね。ついてきて」

歩いて行きシルヴィアは生徒会長の権限で、一般生徒が入れないエリアの扉を開けた。

「こんなところが校舎内に……。」

「ここはベネトナージュ専用のエリアだからね。つと、この部屋かな」

「ここにクロエが……？」

インターホンを鳴らし、空間ウィンドウが開く。

「クロエ！」

『っ！美奈兎？どうしてここに……？』

『どうしてもこうしてもないよ！開けて！』

『いや、けど……』

「早く！」

その圧に負けたのか、扉が開く。クロエを見るやいなや、美奈兎はクロエに抱きつく。

「クロエの馬鹿！あんな別れ方じゃ納得できないよ！」

「ちよ、ちよつと、美奈兎」

ニーナとソフィアも抱きつこうとしたところで淡々とした声が入ってくる。

「麗しい友情ですね。あなたにそのような友人ができたことは私としても嬉しく思いますよ、クロエ」

言うまでもなく、理事長であるペトラだ。

「あなたには後でお話があります、シルヴィア」

「はい」

理空の存在にもすぐに気がついたようで、ペトラは理空の方を向く。

「……あなたがいることは流石に想定外です。何故ここにレヴォオルフの序列四位がいるのです？ 《消失の魔術師》」

「え……？ 理空君がレヴォオルフの序列四位？」

元々情報に疎い美奈兎だけではなく他の3人も驚愕している。

「一応髪の色は変えてただけだな」

「その瞳の色は特徴的ですからね」

今度カラーコンタクトでも買うか、と呑気な思考を頭の片隅でする。

「まあ、それは置いておくとして……クロエをここから出すわけにはいきません。理由は既に話した通りです」

美奈兎はペトラの前に立つ。

「どうしました？ まさか力づくで連れ出すつもりというわけでもないのでしょうか？」

「あたしもそこまで馬鹿じゃないです」

「ならば嘆願ですか？ 何を言われようと私は——」

「いいえ理事長、これは交渉です」

「……交渉？」

美奈兎が内容を口にしようとする瞬間、理空がするりと声を入れてくる。

「…… 《獅鷲星武祭》の優勝、か？」

「ちよつ!?? 言わないでよ！」

「言つとくが若宮。それじゃ交渉になってないからな？」

「何で!?? 《星武祭》の優勝は立派な功績じゃ……」

「優勝出来て初めて差し引きゼロなんだよ。お前らが優勝する確率なんて低すぎるからな。そうなればただでそいつを晒すだけだ」

「そういうことです」

「ちよつと！ あなたはどちらの味方なんですの!??」

ソフィアが口を挟んでくるがスルー。ペトラは理空に視線を向ける。

「結局のところ、あなたは何をしに来たのです?」

「こいつらに協力してくれって、リユーネハイムに頼まれただけだ。まあ、今のところ例の試合を観るくらいしかしていない。これをどう捉えるかはお前の自由だ」

「……………」

ペトラが今取れる選択肢は2つ。クロエを『出す』か『出さない』かだ。前者が最悪で後者が最善である。

正直、この最悪を最善よりも良く思わせるのは難しい。ならば、最善を最悪よりも悪く思わせる。

要するに、理空は出さなくてもクロエの能力はもう分かっているぞ、出さなければこの情報をばら撒くぞ、と遠回しに脅しているのだ。

これはハツタリの部分もある。それなりに自信はあるが確証は得られていないのだから。ペトラが質問をしてくるとすれば――

「クロエが《ストレガ魔女》であることを見抜いている、ということですか。どういう能力と見ているのでしょうか?」

来た。この回答を間違えればただのハツタリと化す。だが、当てれば本物の脅迫だ。

「…………… 精神感応系、テレパシーってところか」

ペトラの顔が一瞬固まる。どうやら正解のようだ。

「ペトラさん、美奈兎ちゃんたちは話してないよ」

シルヴィアからの後押し。これはありがたい。理空が見ただけで気づけたのだ。別の目敏い人間にも見抜かれている可能性がペトラの頭の中で膨らんでくれる。

これで両方最悪にできた。あとは、『出さない』よりはマシと思わせる材料を突きつければいい。

「それでだ、ペトラ・キヴィレフト。もしこいつらが優勝出来なかったときは大きい損失を被る、だろ?」

「そうですね」

「ならその分の担保を用意すれば良いわけだ」

「… 確かにそれを用意してくれるのであれば、考えなくもありません。クロエの過去の実績などから金額に換算すると――ざっとこ

れくらいになりますか」

「なっ!?!?」

美奈兎たちにとって見たこともない桁の額は数えるのも億劫になるものだった。

「ズ、ズルい…… そんなの理事長の好きな額にできるもん……」

「信用がありませんね」

「まあ、割と妥当な額ではあるな」

「だからあなたはどちらの味方なんですか?!?!?」

「仮にあなたがこれを払えるとしても、受け取る気にはなりませんね」

「へえ?理由は?」

「率直に言いますと、信用出来ないからです」

予想通りの回答をしてくる。この展開も織り込み済みだ。そもそも、理空がクロエの能力を言い当てた時点でもう詰んでいる。

「だ、そうだ。リユースハイム」

「うん、ペトラさん、相変わらず変なところで誠実だね。それこそ、いくらでもごまかすことができたのに」

「……?」

「これくらいなら私でも払えちゃうよ?」

空気が固まる。その状況下ですぐに意識を戻せたペトラがシルヴィアの方を向く。

「いきなり何を言い出すのですか、シルヴィア」

「もちろん無条件ってわけじゃないけどね」

シルヴィアはクロエの側まで行き何かを耳元でささやく。

「え……?」

「さあどうする?決めるのはクロエの意思だよ」

「わ、私は……」

クロエは美奈兎たちと目を合わせて、美奈兎たちは力強く頷く。クロエの眼から迷いが消える。

「申し訳ありません、理事長。どうしても私は彼女達と一緒に《獅鷲星武祭》で戦ってみたいのです」

その言葉を聞き、ペトラは諦めた様子でため息をつく。

「そう、ですか……」

「それじゃ私との取引は成立ってことでいいかな？」

「え、ええ。意図は計りかねるけど……」

「じゃあ、担保金を負担するよ。ペトラさんも、自分が提示した額なんだから嫌とは言わないよね？」

「…あなたは一体何を考えているのです？シルヴィア」

「私も私なりに学園のことを考えているだけだよ。ペトラさんとは違う形で、ね」

ペトラは再度ため息をつく。

「不本意ではありますが、もう1つの条件を満たせばクロエの出場を認めましょう」

「もう1つの条件……？」

「——チーム・ルサルルカに勝利することです」

空間ウィンドウを開き、美奈兎達に見せる。

「優勝を目指すのであれば、これくらいは出来ないとお話にならないでしょう？」

一瞬怯んでしまうが、すぐに気合いを入れる美奈兎。

「分かりました！その勝負、受けて立ちます！」

「では、私はこれで失礼します」

「——待てよ」

部屋を出ようとしたペトラを理空が引き止める。ペトラは若干驚いた様子で理空の方に振り向く。

「なんででしょう？」

「なんでしようじゃねえよ。リユーネハイムから話を聞いてないのか？」

「…シルヴィア？」

「あははー、先に言っても断られそうだったからさ」

その可能性は否定できない。そうでなくとも何らかの対策を練られてもおかしくはない。

「オレはお前との一対一の対談を要求したんだけどな」

「対談？どういうことでしょう？」

「そのままの意味だ」

「ペトラさんにとつても、悪い話じゃないんじゃない?」

シルヴィアが伝えなかったことで考える時間は無い上にクロエの情報を握られている今であれば要求を断る理由はない。

ペトラとしても、情報が少なすぎる理空と話せるというのは少なからずメリットはあるのだ。というよりも、断ってしまうば理空が情報をばら撒こうとしかねない。結果的にはシルヴィアのファインプレーだったということになる。

「30分程度しか取れませんがよろしいですか?」

「充分だ」

「いいでしょう、ついてきて下さい」

「じゃ、そういうことで」

それを最後に、2人はこの部屋から出て行った。

「さてさて、クロエ。制服に着替えて」

「えっ?」

確かに今はクロエは制服を着ていない。だが、別に今着替える必要はないはずだが……

「シルヴィアさん、何を……?」

思わず美奈兔が質問してしまうが、それは他の4人も同じ意見である。

シルヴィアは悪戯っぽく微笑んだ。

「もう少しだけ理空くんには働いてもらおうかなって」

*

とある一室にて、理空とペトラは向かい合って座っていた。

「話とはなんでしよう?」

「とある情報を調べて欲しい」

「…………… 対価として何を差し出してくれるのです?」

ペトラから見て、理空は相当に頭が切れる人間だった。記録映像からクロエの能力を特定するあたり、それは明らかだろう。

だとすれば、この要求がタダで呑んでもらえるはずがないということとは分かっているはずだ。

「そうだな。——オレの能力の内容、とか？」
「っ!?？」

理空の能力。どの学園も正体が分かっていないもの。それは情報力を売りにしているクインヴェールに取って喉から手が出るほど欲しいものだった。

「その代わり他言無用だけどな。上に知らせるのもタブーだ」
「……………」

正直、上にも何ならシルヴィアにも知らせるのがベストではあるがそれでも知れるというのであれば魅力的だ。

「分かりました」

「んじゃ、説明するぞ。オレの能力は——

*

——つていうもんだ」

「……………」

ペトラの予想以上に恐ろしいものだった。これが真実なら、ある意味世間の認識よりも強力なものということになる。

「それで、とある情報とは？」

「ああ、《ラミナモルス処刑刀》と呼ばれる人間について調べて欲しい」

「……………特徴は？」

「《ラクシャールナーダ赤霞の魔剣》を持っている。仮面をつけていて正体は不明だ」

封印処理がされているはずの《赤霞の魔剣》を持っていることに疑問は出てくるが、押し殺す。それについての答えはほぼ出ているようなものだ。

「分かりました、掴めたらあなたに報告します」

「ああ」

「話は終わったかな？」

理空が能力で消えようとした瞬間シルヴィアが扉を開けて入ってくる。ペトラはまたため息をつく。さすがに話の内容までは聞かれていないだろうが、タイミングが良すぎる。時間を聞かれたのは不味かったかもしれない。早く切り上げるつもりが、能力の説明に時間がかかった。

「何の用だ、リユーネハイム」

何故か制服姿に着替えているクロエと美奈兎達4人もいる。

「うん、美奈兎ちゃん達を鍛えてくれないかなって」

「はあ？」

「協力するっていったでしょ？」

「……」

断れる話ではある。ここまでしたんだから美奈兎達とて、文句はな
いだろう。ただ、シルヴィアがここまで肩入れするチームに興味はわ
いてくる。

「今日一本。それつきりだ。それ以降はもうやらない」

「充分だよ」

まあ、少なくとも今の段階なら余裕で勝てるだろう。久しぶりの決
闘が序列戦ではなくこういう形でやるとは思っていなかった。

今までにない、妙な感覚が理空の胸に引っかかった。

チーム・赫夜

地下の訓練室にて。理空と美奈兎達5人——チーム・赫夜は向かい合っていた。

「理空くん、本当にいいの？」

「別に一本やるくらいどうってこともない」

「いや、そうじゃなくて……」

「何だよ？」

「いくら何でも5対1って……」

どうやら、美奈兎は5対1というルールに引け目を感じているようだ。例の決闘ではチーム戦ではいえクインヴェールの序列七位を倒している。まぐれとも言えるがそれでも相手も5人だった。

序列四位でも、5人で行くのは不公平だと感じているのだろう。理空から持ちかけたルールなのだから気にする理由はよくわからないが。

「気にするな。お前らこそ、フロックハートの能力は詳しく聞いたのか？」

「……一通り話したわよ。発展途上もいいところだけだ」

むしろ理空からすればこれでもハンデが足りないくらいだった。もつと時間を費やしていたならともかく、急造もいいところのチームに負けるとは思えない。連携の部分はクロエの能力で補うのだろうが、すぐに出来るというものでもない。

そこら辺はクロエも分かっているのか、それとも理空を警戒しているのか、美奈兎のように後ろめたさは感じていないようだ。

「それでは初めてください。私もあまり時間ありませんので手早くお願いします」

訓練室の外、ガラス越しからの声が響く。予想外のことが立て続けに起こり、精神的な疲労があるのだろう。そんなペトラの側に堂々と立っているシルヴィアは中々に肝が座っている。理空としても早くやることに異論はない。

「クインヴェールの理事長殿もああ言ってるんだ、さっさと始めるぞ」

「……………羨望の旗幟たる偶像の名の下に、我らチーム・赫夜は汝雲崎理空に決闘を申請する」

ニーナを除いた全員が煌式ルークス武装を起動する。美奈兔はナツクル型、柚陽は弓型でかなり珍しい。

「受諾する」

『バトルスタート
試合開始』

「はあっ！」

機械音声が響くとともに、美奈兔が真っ直ぐに飛び込んでくる。

左手に構えた拳銃型煌式武装を発砲するが、柚陽から放たれた矢で撃ち落とされる。

”九轟ナイン・バレットの心弾！”

ニーナの周辺の万応素マナが反応し、ハート型の光弾が放たれるがそれを回避する。

「玄空流———旋破！」

美奈兔の拳も躲した瞬間、

「そこです……………！」

柚陽から数本の矢が放たれる。タイミングは申し分ない、が。真っ直ぐに飛んでくるものを避けるのは難しくない。

それらも全て避け、柚陽の目が丸くなる。

「はああ！」

「やあっ！」

ソフィアの剣と美奈兔の蹴りを短剣で防ぎ切り、2人を弾く。ソフィアの剣技はアーネストに匹敵するが、校章しか狙ってこないのならば捌ける。

「へえ……………」

理空は余裕を持ってクロエを見据える。予想以上にあの能力の恩恵は大きいようだ。連携が上手い。口にするよりも遥かに早いのだから当然だが、今日初めて能力を体験していることを考えるとかなり質が高い。

反対に美奈兔達は動揺していた。5人がかりで攻めて、一撃も入らなかったのだ。前に倒したことがあるのはクインヴェールの序列表七

位。目の前にいる男はレヴオルフの序列四位である。

他学園とはいえ、三つしか序列が違わないのにここまで差があるものなのだろうか。だが、このまま逃げるわけにもいかない。

再度、美奈兔とソフィアは前に出て攻撃を仕掛け続ける。援護が面倒なので、理空は他の3人の間に必ず2人がいるような位置取りをし、捌き続ける。ニーナの周辺の方応素がまた揺らめく。先程よりも反応する数が多い。

美奈兔の拳が空を切ると同時に視界から理空が消える。

『上よー!』

クロエの声が4人の頭に響く。理空は星辰力を脚に集中し10メートルほど跳躍していた。美奈兔とソフィアの攻撃はどうやっても届かない。だが、後衛にいた3人は別だ。

『ニーナ!今よー!』

「クイーン・ハイドトレイト女王の崩順列!”」

巨大な光弾が理空目掛けて放たれる。美奈兔とソフィアを盾にされていたことでさつきまでは放てなかったが、空中にいる今ならば、躲すことが出来ない今であれば当たるはず。

そう、絶好のチャンスだ。だからこそ、クロエはニーナに指示した。だが、クロエは忘れていた。

この男の二つ名を。
その名前の由来を。

光弾が理空に届く前に。それは跡形もなくなった。

「え……?」

美奈兔達は呆然としてしまう。攻撃が躲されるでもなく、防がれるでもなく、消滅してしまった。こんなもの目の前で見たことがあると言う人間の方が圧倒的に少ないだろう。

その間に星辰力を再度脚に集中し、空中を蹴って高速でニーナとの間合いを詰めて、校章を切り裂く。

『ニーナ・アツヘンヴァル、バツブアローケン校章破損』

その機械音声ではっとし、柚陽が矢を放とうとした瞬間。
「えっ」

柚陽が立っている場所に突然穴が空く。それに従って柚陽は落下するが、落ち切る前に校章を撃ち抜く。

『蓮城寺柚陽、校章破損』

2人が落とされ、クロエが1人後衛で孤立している。当然、そんな隙を見逃すわけもない。

クロエに接近し、右手に持った短剣を振り上げる。

『クロエ・フロックハート、校章破損』

《獅鷲星武祭》のルールと違い、チームリーダーが倒されれば終わりというものではないから続行される。

後衛の人間がいなくなったので、銃をしまいもう1本の短剣型煌式武装を起動する。

美奈兔とソフィアが近づいてきて2人がかりで攻撃を仕掛けてくるが、先程に比べると連携がかなり雑だ。連携の元であるクロエが落とされてしまったのだから当然だ。攻撃をするまでにタイムラグが起きたりしていて、むしろ1人1人別々に来た方が強いのではないかと思うほどだ。

だからこそ、読みやすい。ソフィアの右足が踏み込もうとしている場所に能力を使って穴を開けソフィアの体勢を崩し、短剣を振るう。

『ソフィア・フェアクロフ、校章破損』

残るは美奈兔ただ1人。最早詰みと言つていい状況である。美奈兔の近接戦闘能力は確かに高いが、ソフィアの方が数段上手だ。クロエがいた時の連携を崩き切れたのだから、美奈兔1人にやられる要素はない。それに、見たところ美奈兔の星辰力は極端に少ない。理空も言うほど多くない、というか、平均を下回っているが美奈兔のそれは理空のそれよりもかなり少ない。理空のように精密な制御が出来るわけでも無さそうだから、能力を使うまでもない。星辰力が切れるまで攻撃を崩き切れればいいだけだ。

その状況がわからないほどに頭が悪いのか、諦めの悪さは一級品なのか、美奈兔の眼はまだ死んでいない。ナツクルが膨らむ。流星闘技メテオアーツだろう。このままじゃジリ貧だと察するだけの判断力はあるようだ。

直進ではなく、ジグザグに俊敏に動きながら突っ込んでくる。星辰

力を使っていない割にはかなりの速度だ。普通に見切れる範囲の中だが。

繰り出された右の拳は理空の左手の短剣によって防がれていた。

「う……………く……………」

美奈兎は苦悶の表情を浮かべている。どうやら、星辰力が底をついたようだ。このまま倒れ込むかと思いきや、理空にとっても想定外のことが起こる。

「おおおおおおおおおー！」

「なつ……………!?」

空になったはずの星辰力が急回復しており、再び星流闘技を施した左のナツクルで攻撃を仕掛けてくる。初めて理空の表情が驚愕に染まる。

理空の校章に向かったその拳は。

短剣を手放した右手によって掴まれていた。

(そ、そんな……………)

美奈兎は呆然としてしまいが、理空はそんなものは視界に映っていない。

「……………お前、その体質……………」

さすがに自分と同じ体質を持つ星脈世代ジュエネステラを見るのは初めてだ。

美奈兎は理空が言っている言葉がよく分からずに困惑している。というか、それどころではない。今度こそ美奈兎はもう動けないのだから。

理空に拳を掴まれていることで倒れずに済んでいるという状態だった。

「……………まあ良いか」

理空は思考を切り替え、美奈兎の校章を切り裂く。美奈兎は手を離され、うつ伏せに倒れる。

『若宮美奈兎、校章破損』

『勝者、雲崎理空』

決着を告げる機械音声^が鳴り響き、地面に落ちた短剣を拾いしまう。

能力を使ってその場から変えようとする矢先。

「——少し待っていただけじゃないでしょうか、雲崎さん」

するりと、穏やかながら、真剣な声が入り込んでくる。声の主は柚陽だ。

「……何だ？」

「美奈兎さんのこの体質について何かご存じなのでしょうか？」

そういえば、例の試合の記録映像でも美奈兎は星辰力切れで倒れていた。その際にも似たようなことが起きたのだろう。何か知っているのであれば教えてもらうことに損はない、という意図が読み取れる。

「教えてやる義理はない」

返されたものは突き放すような冷たい言葉だった。

この決闘とて、大サービスだったのだ。これ以上する気は起きないし、教えたところでどうにかできるものでもない。

「じゃあな」

「あ、ちよつとー」

ソフィアの制止も虚しく、理空は姿を消した。

反応がもうイエスと言っているようなものだ。可能ならば、教えてもらえるとありがたかったが、あそこまでしてもらっておいてそれは虫が良すぎる。

「お疲れ様〜」

シルヴィアが訓練室の中に入ってくる。ペトラはどこかへ行っただよう。ガラスの向こう側にももういない。

「理空君は……もういなくなっちゃったか……」

「?何か言いました？」

「ううん、何でもない」

シルヴィアの独り言が漏れる。総評も言わないとは、まあ、理空らしいと言えば理空らしい。ただ、シルヴィアからすれば終わった後に連絡先を交換するつもりだったので当てが外れてしまった。

(ぶっきらぼうだなあ……)

苦笑しそうになるが、切り替える。生徒会長としての務めも果たさ

なければならぬ。

「消化不良なところもあると思うけど見つけられたものもあると思うから、頑張ってね」

「はいー」

横たわったままながら、美奈兎は元気良く返事をする。

自身の夢を叶えるための道のり。その達成は、まだまだ遠い。

*

自宅に戻り、思案していた。あの体質を持つ者がこの六花にいる可能性は否定していなかったが、こんな形で見つかるとは思っていない。それを抜きにしても、あのチームは中々に興味が惹かれるところがあった。

記録映像を見たときも感じたが、かなり癖が強いチームだ。それぞれの得意分野と苦手分野がはっきりしている。

それ故に崩れれば脆いが、ハマれば強い。それでもルサルカに勝てるかと言われれば厳しいと言わざると得ないが。だが、仮に出場が出来ればそれなりに楽しませてくれそうではあった。

そんな期待をしていると携帯の着信音が鳴る。また知らない番号だ。空間ウインドウを開くと見知った顔が浮かぶ。

『雲崎、今大丈夫か?』

『リースフェルト?何か用か?』

クローディアから理空のアドレスを貰ったのか、ユリスの顔が空間ウインドウに映る。心なしか、いつもよりも不機嫌そうだ。

『… ああ、少しな』

珍しく歯切れが悪い。いつもはつきりと物事をいうタイプだというのに。そして、その不満そうな表情を浮かべたまま用件を理空に告げる。

『——冬季休暇の予定は空いているか?』

沙々宮家にて

北関東多重クレーター湖上のフロートエアポート。

その特別ラウンジにて搭乗時間を待っていた。ガラス越しには側面に複雑な国章が描かれた飛行機の姿があった。

ユリス曰く。先日のフローラの一件でユリスの兄がどうしても国に招きたいと言い出したそうだ。それで、綾斗達4人はその誘いを受けたらしく、一緒に待っている。

「それにしても、雲崎君が来るとは意外ですね」

クローディアに声がかけられる。その言葉はごもつともである。

ただでさえ煌式^{ルークス}武装の持ち出し申請をしなければならぬ上に国王陛下からの招待となると、何かしら面倒そうだ。理空はそういうことを好むタイプではない。

「まあ、どうせ暇だったからな。それに——」

「それに、何です?」

ユリスの故郷であるリーゼルタニアには多少ながら縁がある、とは言わない方がいいだろう。

「いや、沙々宮の煌式武装の製作者には興味はあるからな」

「なるほど」

一応は誤魔化せたようだ。紗夜の煌式武装に興味があるのは本当だから理由の一つではあるが。

「オレが来るって聞いてお前らは良い気分じゃなかったんじゃないか?特にリースフェルトと沙々宮」

実際に、今日理空が来た時に先に待っていた2人は理空の顔を見るなり、顔を顰めていた。ユリスに至っては電話をかけてきたときから不機嫌な様子で、他の奴に言ってもらえば?と思ったレベルだ。

「ええ、それはもう。ですが、誘拐事件で助力してくれたのは事実ですからね。沙々宮さんも渋々ながら納得してくれました」

「お前は?」

「はい?私ですか?協力者が来ることに文句はありませんよ?」

「『協力』、ねえ……………」

という名の『利用』の間違いだろう。どうせ、何かしら理空について知りたいからすぐに了承したという魂胆だろうに。

そんなことを考えていると、綾斗の携帯が鳴った。どうやら電話らしい。のだが、かけてきた人間の名前を見るなり、綾斗の顔が固まる。

「綾斗、どうした？」

「いつ、いや、何でも——って、あ！」

紗夜から手元を隠そうとした弾みでボタンに指が触れてしまう。

『やつほー、綾斗くん、今ちよつといいかな？』

その瞬間、空間ウィンドウに朗らかに笑ったシルヴィアの顔が浮かぶ。理空は即座に気配を消して向こうの空間ウィンドウに映りようがない場所に移動する。

こつちに気付かれて声をかけられたらどうなるかわかったものではない。

その後、シルヴィアが綾斗にデートの誘いをした後に通話を切れ、他の4人の視線が綾斗に突き刺さっていた。

*

離陸した後に5人は別の部屋に移動していた。理空はもともと座っていたリクライニングシートになっっている通常座席にいる。シルヴィアの件で色々うるさく言われていそうだし、横になるのならこつちのほうがいい。

シートを思いつきり倒して横になった。

「きしし。そろそろ時間ですよ、雲崎理空」

「…………… ああ？もうそんな時間か。」

「珍しいですね。いつもはキミから来るというのに」

たまにはそういうときもあるだろうよ。それに、オレが行かなかっただけなんだからスルーしてもよかつたんだぞ？

「ちつちつち。それではギブアンドテイクが成り立たないでしょう？あたしはちゃんと約束は守りますよ」

「…………… そうか。オレから持ちかけた話だからな。きつちりと受けさせてもらう。」

「ええ、そうですね。それでは今日教える分野ですが……」

今日の分はこれで終わりです。明日は授業ではありませんからそのつもりで」

やっとかよ。さっさと部屋に戻るか。

「理空？終わったの？」

ああ。まあな。お前は今日は無しか。オーフェアア。

「今日は理空の方に付きつきりだったから、さすがにないわよ」

ふーん。まあ、精々頑張れよ。

「……他人事ね。あなたも似たようなことされるのよ？」

しょうがねえだろ。オレにとっては必要なことだったんだから。

じゃあな、オレは戻る。

「……することもないのに？」

それはお前もだろ？

「ええ、だからお話ししましょ」

……話すことなんかないんだけどな。

「じゃあ私の話を聞くだけでもいいから」

まあ、どうせ暇だから別にいいけどよ。

栗色の髪の少女と紺色の髪の少年は壁に寄りかかり、初めて会話をした。意外にも、これはそれなりに長く続いていた。

お互いにとって、小さな習慣になる程度には。

*

「——空！理空！」

声がかけられて眼を開けてみると、綾斗が理空の側に立っていた。どうやら寝ていたらしい。

「何だよ、天霧？」

「もう着いたよ？」

「ん、そうか」

綾斗が少し不思議そうな顔を浮かべてこちらを見つめている。

「何だよ？」

「ちよつといつもと様子が違うな、と思つて……何かあつたの？」
返答に困る質問をしてくる。しかもあながち的外れでもないから
余計に困る。

「別に何もねえよ。少し珍しい夢を見ただけだ」

嘘ではない。あれに何か思い入れがあつたわけではないのだから。

「他の4人はもう降りたのか？」

「うん、外で待っているから急いで」

「その前に、天霧」

「?何だい？」

「——歌姫様の生歌が聞けて良かったな」

「えっ!?？」

綾斗の顔が青褪める。シルヴィアの件について理空から何も言われなかったことで内心ホツとしていたのだが、今こんな形で言ってくるのは予想外だった。綾斗からすればあの件は隠し通せていると思つていたのでから。

理空は《鳳凰星武祭》^{フェニクス}の閉会式の日の時点で見抜いていたわけなのでその努力は無駄だったわけだが。

「別にスキャンダルに興味はないから安心しろ。確かめたかっただけだからな」

「う、うん……」

それに頷きつつも、やはり不安が膨らむ。理空以外の人間にもバレている可能性が出てしまった。そんな不安を見透かしたかのように理空が言葉を続ける。

「これは推測だが、その件に気づいているのは多分オレだけだ」

「えっ?で、でもレヴォルフの諜報機関つて情報網が凄いんじゃない?」

《悪辣の王》^{タイラント}を嫌っている連中は至る所にいるんだよ。あの場所なら尚更だ。反乱分子をどうにかすることに意識を割いているからそんな細かい情報は手に入り難い」

なるほど。筋は通っている。特に歓楽街^{ロトリフト}の人間にも嫌われているという点が。

「仮に入っていたとしたら、何かしらのアクションを起こすだろうよ。けど、あの歌姫様は普通の様子だったろ？お前の懸念はただの思い過ぎだ。少なくとも今のところはな」

確かに、空間ウインドウに映っていた顔は初めてであった時と変わらない朗らかな笑顔だった。

「これをオレのいい加減な意見か適当な嘘と取るかはお前の自由だけどな」

「ううん、ありがとう」

「んじゃ、降りるか」

2人は飛行機から降りて、その際に紗夜に文句を言われたがいつものごとくスルーした。

*

空港から電車で1時間。紗夜の実家に到着した。一見普通の一軒家だが、そこら中にセキュリティが配置されていて、厳重な警備がされているのが分かった。

「…………… ただいま」

「おや、ようやくお帰りかい、馬鹿娘」

紗夜がセンサーとロックを解除してドアを開けると、顔立ちが紗夜そっくりな女性が出てくる。紗夜とは違い身長は綾斗と同じくらいあり、かなり高い。母親が男である理空よりも高いのに、紗夜の身長が小学生並みなのは不思議だ。

「香夜さん、お久しぶりです」

「ああ。久しぶりだね、綾斗。いい男になってきたじゃないか」

綾斗は紗夜と幼馴染だけあって親しげに話している。紗夜の母親は香夜というらしい。

「沙々宮夫人、本日はお世話になります」

「ご丁寧にごも。星導館の生徒会長さんだね？」

「はい。クローディア・エンフィールドと申します」

「あ、あの、私は——」

『まあまあ、そんなところで立ち話もなんだろう。とにかく中へ入りなやう』

「ひゃあっ!?」

綺凜が挨拶しようとした瞬間、半透明の男性が現れる。

見たところ、ホログラフのようだが……

「紗夜のお父さんの創一さん。昔事故で生身の身体を失ったんだよ」

綾斗が耳打ちしてくる。なるほど、それならば半透明——実体がない事も頷ける。

綾斗自身、実態がない姿を見るのは初めてなのか、何とも言えない表情を浮かべている。

『ははっ、そんな顔をするな、綾斗くん。確かにわしは生身の身体を失ったが、別に不自由しとらん。むしろ煌式武装の制作にはこの方が適しているくらいだからの』

「……はい」

「……」

あっけからんと言う創一に思わず苦笑して返す綾斗。

頭のネジが飛んでいる研究者は2人知っているが、これはこれぞ中々のマッドサイエンティストだ。

「まあ、創一さんの言う通りこんなところで立ち話もなんだ。とりあえず入って入って。大したもんじゃないけど、晩ご飯も用意してあるから」

そう言われ案内されてリビングに通される。中央に置かれたテーブルの上には、ずらりと料理が並んでいた。

「普段は自分の食べる分しか作らないからね。久しぶりに腕を振るう機会が出来て嬉しかったよ。ほら、座った座った」

香夜に促されテーブルに着くと、ユリスと綺凜が改めて自己紹介をする。

「ユリスはアレクシア・フォン・リースフェルトです。紗夜……さんには、先日身内が大変お世話になりました、感謝しています」

「まさかうちにお隣の国のお姫さんがやってくるとは思わなかったよ。狭い所だけど寛いでいっておくれ」

「あ、あの、刀藤綺凜です。私も《フェニックス鳳凰星武祭》では本当に紗夜さんに助けていただいて……」

「あはは、そんな畏まらなくていいよ。寧ろうちの子が迷惑をかけたかったかい？」

「い、いえそんな……」

自分以外が挨拶し終えたため、一応自己紹介しておく。

「…… 雲崎理空。一日よろしく」

「ああ、ゆつくりしていつてくれ……。それにしても両手に華どころじゃないね」

何か最後に呟いた気がしたが、スルーしておこう。

その後、賑やかな食事が始まったが、理空は会話が面倒なので適度に気配を消しながらつまんでいた。

その度に紗夜がこちらを睨んでいたことは言うまでもない。

*

「さて、それじゃ部屋の方に案内しようか」

夕食を終え、しばらくしたところで香夜がそう言って立ち上がった。

「2階に来客用の部屋が2つあるから、紗夜の部屋を入れて各部屋2人ずつでいいかい？」

「はい。問題ありません」

「ただねえ…… 部屋割りはどうする？」

「部屋割り？俺と理空が一緒の部屋でいいんじゃない？……？」

綾斗の言う通りだ。というか、それが一番無難だろう。

「何だい、綾斗はそういうタイプが好みだったのかい？」

「え？」

益々意味がわからない。好み？何の話だ？

「だって男子は綾斗1人だろう？」

疑問が解けた。何やら、勘違いをしているようだ。

「香夜さん、理空は男ですよ？」

「えっ……？ほんとに？」

理空は無言で自分の学生証を見せる。そこにははっきりと『男』と明記されている。

「えーつと…… 悪いね」

「別に良い」

特段珍しいことでもない。この前美奈兔にも間違えられた。何も気にしていなかったのだが、他の4人はチャンス逃したかのような表情を浮かべていた。

*

時刻はすでに深夜。眠気は全く湧いてこなかった。普段あまり寝ないのに飛行機の中で昼寝をしたのだから当然だ。

綾斗も何故か眠れないようで、未だに目が開いている。

「理空、起きてる?」

こちらに声をかけてくる。無視しようかとも思ったが別に相手をすることに問題はない。

「ああ、起きてるぞ」

「眠れないの?」

「それはお前も同じだろう?」

「あはは……まあね……… あの子」

「何だよ?」

一瞬言うかどうか迷った様子だったが、切り出す。

「飛行機降りるとき、どうしたの?」

「……随分と踏み込んでくるな」

「いや、協力するってことだからお互いを知った方がいいんじゃないかなって」

「……」

綾斗の方に向き、見据える。いつもと同じとぼけたような様子だ。

正直なところ、ある意味理空は綾斗やシルヴィアのことを苦手にしてきた。

こと、駆け引きにおいて。

利益を優先するクロードディアのようなタイプの方がよっぽどやりやすいが、綾斗のようなタイプはそういう打算が少なすぎて読みづらい。

「別に、昔のことを思い出したただけだ」

「昔の？」

「古い知り合いだ。別に仲良くもなかったけどな」

端的に告げる。これ以上話すことはない。

（相変わらずよく分からない奴だ）

何故そんなことを知りたがるのか全くもって理解出来ない。所詮、利用し合う関係だというのに。

そんなことを考えていると扉が開き、反射的に2人は身体を起す。

が、入ってきた人物を見てすぐに警戒を解く。

「何だ、紗夜か。どうしたのき、こんな時間に」

「んんー……………」

どうやら寝ぼけているらしい。そのままふらふらとやってきた紗夜は綾斗のベッドに潜り込む。

「ちよ、ちよつと待った紗夜！それはマズいってば！」

面倒になりそうなので部屋の扉へ向かう。

「じゃ、天霧。幼馴染の世話頑張れよ」

「いやいや！起こすの手伝ってよ！」

それを無視して外に出る。どうせ寝ないのだ。なら布団に入っている必要もない。

廊下の壁に寄りかかり、夢の件を思い出す。何故今さらあんな夢をみたのだろうか？

リーゼルタニアに向かっていているから、というのは流石に無理があるか。おそらく偶然だろう。

あの変わり果てた知人は敵になる可能性がある。その時はどうするか、なんて考えているといきなり甲高い音が鳴り響く。

全員が部屋から出てくる。ユリスと綺凜は眠そうに目を擦っている。

理空を含めて誰も状況を掴めていないようだ。

『おー、すまんすまん。驚かせてしまったの』

ホログラフが現れ、音も止まる。

『裏庭に侵入した輩がおったようだが、すぐに逃げてしまったようで

の』

「侵入者、ですか？」

『うむ。今は痕跡などを解析しておるところだ。まあ、我が家の警備システムはそうそう破れん。安心して休んでくれていいぞ』

そういうと、ホログラフは掻き消えた。

「……………」

いつになく、クローディアが真剣な表情をしているのを理空は見逃さなかった。

綾斗も気付いたようだが、その前にユリスからピリピリした声がかげられる。

「ところで綾斗。1つ質問があるのだがな」

「うん？」

「おまえと紗夜が同じ部屋から出てきたのはどういうことなのだ？」

「……………あ」

部屋と言われると理空にも矛先が向いてきそうである。それは面倒なのと悪戯心が湧いてきたので敢えて語弊がある言い方をする。

「ああ、そういえば沙々宮が天霧の布団に潜り込んでいたな」

「理空!?!？」

「ほう……………じっくりと話を聞かせてもらおうか」

結局綾斗は誤解を解くのに朝までかかり、綾斗が女難から逃れるのは相当に難しいというのがわかった時だった。

リーゼルタニア

「……さすがに眠いな。朝になるまではやり過ぎたな」

「そ、そうですね。今日の夜はしっかりと休みましようね？」

「……」

翌朝。朝まで綾斗を問い詰めていた影響でユリスは欠伸をしており、綾斗、綺凜も差はあれど眠そうにしている、紗夜に至っては立ちながら寝るといふ器用な芸当をしている始末だ。

クローディアはというと、深夜の侵入者について何か思うところがあるのか、時折真剣な顔をしていた。

創一曰く、動物と言っていたが、それについて思うところがあるということは襲われる原因に心当たりがあるわけで。そんなことを考えていると門の前に黒塗りの車が停まる。

「皆さま、お迎えに来ました！」

車の扉が開くとフローラが降りて正面に立つ。

「相変わらず元気だね。フローラちゃん」

「あいっ！それが取り柄ですから！」

そのやり取りを見ているとフローラがこちらに歩いてきてペコリと頭を下げる。

「雲崎様、《鳳凰星武祭》^{フェニクス}の時はフローラを助けていただいて本当にありがとうございます！」

「……別に良い」

《黒炉の魔剣》^{セルベスタ}の使い手云々で動いたわけだし、フローラのことはいの時も今もどうでもいい。

「それじゃ、創一おじさん、香夜さん。お世話になりました」

「あ、姫様と天霧様は後ろの席でお願いします」

綾斗が挨拶をし、車に乗ろうとすると、フローラが席を指定してくる。2人は不思議そうにしながらもそれに従う。

「では、出発しまーす！」

フローラの声を合図に車が発進する。

「そういえばユリス、どれくらいで着くの？」

「そうだな……ここからなら車で2、3時間といったところだな」
「思ったより近いのですね」

「リーゼルタニアはドイツとオーストリアの境にある山国だからな。まあ、時間もあるし簡単に我が故国について説明しておこうか。約1名、下手をすれば私より詳しいかもしれない奴がいるが――」

ユリスの視線がクローディアへと向けられる。

「ふふっ、誰のことでしょうね」

「はぁ……」

相変わらずのクローディアの態度に思わずため息をつくユリス。

（……確か統合企業財体の傀儡国家だったか）

記憶が正しければ特一等級ベルティス隕石を狙って造られた統合企業財体の箱庭だったはずだ。

それについての具体的な説明をユリスからされた。

*

「……つまり、傀儡国家？」

「身も蓋もなく言ってしまうばそうなるな……ん？」

ユリスは説明を終えると、違和感を感じているような声を上げる。それと同時に、理空も車の速度が極端に落ちていることに気がついた。

「どうしたの？」

「あ、いや王宮へ行くのならこの道は遠回りになると思ってな。どういうことだ、フローラ？」

「えっと、これも陛下から仰せつかってますので」

「兄上から？」

「あい。ちよつと待ってくださいね」

「えーと、『せっかく帰ってきたんだから、ついでに凱旋パレードをよろしく』だそうです」

「なっ……？」

ユリスが愕然としてしていると大歓声が巻き起こる。《フェスタ星武祭》のそれに匹敵するほどだった。

沿道には人が溢れ、皆口々にユリスの名前を叫んでいる。空からは

紙吹雪が舞い散り、街のあちこちにユリスの写真が付いてあるポスターがある。フローラが席を指定した理由が分かった。

「くう……！ 兄上め、覚えていろ……！」

そう毒付きながらも笑顔で手を振っている。堅物故に営業スマイルは出来ないのかと思っていたが、意外とそうでもないらしい。

その後綾斗まで手を振る羽目になり、ユリスの機嫌はさらに悪くなるのだった。

*

予想以上にパレードが長引き、ようやく王宮に着いた。終わった後もユリスは明らかに不機嫌であり、事実今もズンズンと王宮内を歩いている。

「兄上！ 一体どういうことだ！」

「ああユリス、おかえり」

ユリスが勢いよく部屋の扉を開けると、ソファの上に寝転がり、ふわふわとした巻き毛の女性に膝枕をされている男性がいた。トレーナーを着ていて、王宮内の雰囲気に合わせていなかった。

濃い赤色の髪で、瞳の色はユリスにどこか似ている。ということはこの男性がリーゼルタニアの国王なのだろう。どう考えても政治などに興味を持っていなそうだが。

（傀儡国家だからボンクラの方が都合が良いんだろうな）

あるいはそれを分かっているかもしれない。

「初めまして。今回は不躰な招待を受けてくれて嬉しいよ。僕はユリスの兄でヨルベルト。一応この国の国王をやっている。で、こっちは妻のマリア。ああ、ここは僕の私室なので君達も寛いでくれて構わないよ」

やはり国王だったらしい。クロードディアとユリス以外は呆気に取られた顔を浮かべている。

その後、ユリスはヨルベルトにつっかかかかかかかかかわされていた。まあ、性格的にそうなるだろう。

ようやく収まったところで、ヨルベルトがこちらを向いた。

曰く、フローラのお礼をするために夜会を開くらしく、それに是非

出てもらいたいそうさ。衣服は好きなのを貸してくれるらしいし、女子4人はともかく、綾斗と理空は着替えれば終わりだ。

それについても聞いていなかったらしく、ユリスがまたつかかっていたが、上手くあしらわれていた。

*

あの後男女で別れ、綾斗と理空は礼服を着るだけなのですぐに終わった。理空はしなかったが、綾斗はワックスでオールバックにしていた。

(似合わなすぎだけどな)

普段長めの髪を下ろしている人間がオールバックにするのは違和感だらけだった。

「それにしても……長えな、女は」

「あはは、まあ仕方ないよ」

男子側が終わってからすでに1時間は軽く越えていた。身だしなみだのオシャレだのそういうことに疎い理空は服にここまで時間をかける理由が思い当たらなかった。

夜会についてもあまり気が進まないし、食事等は適当に振る舞われるのが丁度良かったというのが本音だ。

「天霧はこういうのに乗り気なのか？」

「俺？うーん、あまり慣れないけど……まあ別に良いかなって」

「はあ、善人が……まあ適当に気配消してりゃいいか」

「ちよつと不味くない？それ」

「いいんだよ。レヴォルフの生徒がいるって思われるのもあれだろ……それに、オレの情報取りたがる人間の対応をするのもめんどくさい」

「……………」

急に黙ってしまった。何か思うところでもあるのだろうか。

「何だよ？」

「……………気配で思い出したんだけど昨日紗夜の実家で夕食食べてる時に時々気配消してたよね？」

「ああ、それがどうかしたか？」

お人好しらしく、好ましく思っていないのか、という懸念を綾斗は裏切ってくる。

「いや、凄く巧いなって……理空って序列四位だよ？上の3人は理空よりも強いのか？」

「《吸血暴姫》程度なら余裕だな。一位、二位を決闘で倒せてなるとかなり厳しいけどな」

——イレーネは、強い。体術もさることながら、《霸潰の血鎌》グラヴィシーズを使われたらいかに燃費が悪いと言っても綾斗1人では苦戦は免れないだろう。

それを目の前の序列四位は「余裕」と言った。第三者からすれば大言壮語にしか聞こえなかっただろう。

だが、綾斗はそうは思えなかった。身のこなし、星辰力の制御技術、そして正体不明の消滅させる能力。あの能力を他者の能力にも使えるのならある意味反則とも言えるだろう。

「オレは序列には興味ないから関係ないけどな」

「《星武祭》に出たりとかは？」

「今のところする予定はない。力を見せびらかす趣味もないし、

——殺したらダメとか、面倒すぎる」

全身が、総毛立つ。綾斗は何か得体の知れないモノが見えた気がした。それが何かはわからない。だが、気を抜くとそれに吞まれてしまいきそうない

ピリリリリッ。

携帯の音が鳴る。クローディアからだ。ボタンを押し、空間ウインドウを開く。

『綾斗、こちらの方も準備が終わりましたよ』

「……」

『綾斗？』

「え？ああ、うん。今からそっちに行くよ」

そう言つて通話を切る。

「んじゃ、行くか」

背筋が凍った。この平坦な声のたった一言でだ。もしこのままあの空気を吸い続けていたら、自分はまともでいられただろうか。

関われば関わるほど。

知ろうとすればするほど。

理空に対する得体の知れない恐怖が膨らんでいくのを綾斗は感じた。

*

(無駄に金かけてんなあ……………)

夜会が始まり、離宮のホールに入ると目に映ったのは煌びやかなシャンデリア、高級そうな飲み物や軽食、かなりの数の人間だった。おそらくほぼ全員が統合企業財体の者だろう。

気配を消しているのだからいちいち人を避けなければならないのが面倒だが、質問攻めに遭うよりはまだマシだ。

実際にあの5人はそれをされており、クローディアとユリスは慣れた様子で、紗夜は相変わらずのマイペースっぷりで対応していたが、綺凜は見るからにオロオロし、綾斗もかなり四苦八苦しているようだった。

(……………んん?)

1人の老人が目に入る。一見普通の紳士に見えるが身のこなし方が普通ではないし、星辰力も感じる。

何より時折綾斗達に視線や意識を向けていた。

綾斗、紗夜、綺凜が外に出るに従つて老人も外に出て行った。

理空もその老人を尾けて外に出る。

その瞬間、老人から剣呑な雰囲気が発せられる。

「……」

3人ともそれを感じ取ったようで即座に下がる。

数秒前まで穏やかな雰囲気だったが、老人が何か言った瞬間にそれ

が変わったらしい。会話を聞くために耳を澄ます。

「どう——意味——うか」

「いえいえ、簡単な——すよ」

夜風のせいで上手く聞き取れない。もう少し近づこうとしようとする、次の発言ははつきりと聞こえた。

「貴方達がエンフィールド嬢のチームに入ると困る方がいらつしやるのです」

チーム？《獅鷲星武祭》の？クローディアと組むな？《獅鷲星武祭》に出るのではなく？

「……断ると言ったら？」

「仕方ありません。子供を手にかけるのは忍びないですからな。この子に任せるとしましょう」

老人の足元に魔法陣が現れ、巨大な何かが出てくる。

「グルルルルル……！」

「……キマイラ、か？」

獅子の頭部、胴体に翼、尾に蛇。まさしく伝説の生物とそっくりだった。

ただの万応素^{マナ}の塊にもみえるが。以前襲ってきたトカゲもどきに似ているような気もする。

あの老人は召喚してすぐに逃げたようだ。

先程の老人の言葉を振り返る。クローディアと組むなということ。はクローディアと組まなければ《獅鷲星武祭》に出てきてもいいということだ。つまり、クローディアが誰かにとって何か困るわけで。

（……ダメだな。情報が少な過ぎる）

まずはあれを退けることから、と考えていると綾斗が中庭で素手で戦っている。

手を出す必要は無さそうだ。

「咲き誇れ、六弁^{アサ}の爆焰^{マリリス}花！」

「どどーん」

「ガアアアアアアア！」

大爆発が起こり断末魔の絶叫が響き渡る。炎の中でキマイラは

ゆっくりと溶けていき、それに伴い高濃度の万応素が周囲に四散していった。

今回仕留められなかったことはあの老人も把握しているだろう。つまり、また来るということだ。

(休暇旅行どころじゃなくなっちゃまったな)

どうやらこの旅行もただじゃ済まなそうだ。内心やや毒づきながら理空は明日以降のことを考えていた。

《孤毒の魔女》

昨日と同じ部屋に理空達は呼び出されていた。マリアがいないがそれは置いておこう。

「ギユスターヴ・マルロー？」

「うん。まあ、僕もよく知らないんだけどね。昨日襲撃してきた人間はそういう名前らしいよ。なんでも国際指名手配されているんだとか。確か出身は……えーと」

「アルルカント・アカデミーですね。その筋では有名ですよ」

（ああ、あいつが言ってたな。《超人派^{テノリオ}》のOBであの万応素^{マナ}の塊はフリガネラ式粘性攻体とかいうやつ^ナの基だったっけか）

やたら印象が似ていると感じたのも納得だ。

ギユスターヴが召喚するあれも数十分もすれば消滅するらしい。

ちなみに、指名手配されているような人間を何故通してしまったというと、本物の『銀河』のIDを持っていたらしく、止められなかったのこと。

そういえば、クローディアの母親は『銀河』の最高幹部で父親は幹部一歩手前だったはず。

だとするなら。

今の報告を聞いた際にクローディアは眉を顰めていたことといい、昨日のギユスターヴのあの言葉といい、今回の黒幕は――

「ああ、そうそう。一応警察から護衛をつけるよう要請がきてるけど、どうする?」

「不要だ」

「わたしも……」

「俺も遠慮しておきます」

紗夜も無言で首を横に振る。

「オレも要らないな」

（傀儡国家からの護衛なんて当てにならないし）

「ふふつ、皆さん不要のようですね」

「……」
「そもそもこの国に軍隊はあるのか？」

「痛いところをついてくるなあ」

ふとした理空の疑問にヨルベルトは感心したように見てくる。

「え？ないんですか？」

「うん。有事の際は統合企業財体から兵を借りることになっているんだ」

全く、本当に立派な傀儡国家だ。

「お話の途中ですが、私は少し用事ができましたので先に失礼します」
クローディアが頭を下げて背を向ける。何やら急いでいるようにも見えた。

「オレも適当にぶらつく。何かするならオレの邪魔にならない範囲で頼む」

理空もクローディアとほぼ同時に部屋を出た。

*

柄にもなくクローディアは真剣な表情を保ちながら歩いていた。先程の話から考えると、黒幕に心当たりがあるからだ。

もしその考えが正しければ、寄る場所も出来る。もしそうなら。

「急い方がいいかもしれませんね……」

「——へえ、何にだ？」

聞き覚えのある平坦な声が真横から聞こえる。

言うまでもなく、理空である。突然のことに驚きを隠せない。何とかいつもの笑みを浮かべて理空を見る。

「ついてきていたのですか、雲崎君」

「まあな。部屋出てからずっと横にいたぞ？」

ということは、先程まで浮かべていた表情も見られていたということだ。

「……何か御用でしょうか？」

「用事が何なのかと思ってな」

「………… 私事ですから教える気にはなりませんね」

クローディアにしては珍しいはつきりとした拒絶だ。まあそんなことはどうでもいい。

「私事、ねえ。父親に関することとか？」

今度こそ表情が崩れた。一瞬しまったと思っただけで戻そうするがそれを見逃してくれるほど理空は甘くない。

「やっぱりな。今回の黒幕はお前の父親か」

完全にバレているようだ。理空がいる時に険しい顔を浮かべたのは失敗だった。

「………… 何故その考えに至ったのでしょうか？」

「テロリストが天霧達にお前と組むなって言ってたからな。お前に優勝されると困る人間、つまりお前の願いを知っている人間だ。それを知り得るのは精々お前の家族くらい。んで、母親は『銀河』の最高幹部だからあんなテロリストを使う必要はない。そうなるに残るは――」

「私の父、になりますか…………」

観念したようにクローディアはため息をつく。

「………… 確証はないですがおそらく父でしょうね。私が優勝したら父がというより『銀河』が困るからでしょう」

「ふーん」

興味なさそうに理空は踵を返す。

「詳しい話を聞かなくていいのですか？」

「興味ねえよ」

大体の察しもつく。

「傍から見ればお前はただの死にたがりにしか見えないうけだな」

「………… そうでしょうね」

自嘲したようにクローディアは呟く。理空の背中もうすでに小さくなっている。

「それでも私は自分の望みを譲るつもりはないのですよ。雲崎君」
毎晩襲ってくる悪夢の中の唯一の光。それを諦めるわけにはい

かなかった。

クローディアの声は理空にも、誰にも聞こえることはなかった。

*

クローディアの元を離れ、外に出る。何やら不機嫌そうな表情を浮かべているユリスを見かけたので尾ける。あの知人によればユリスは自分の元いた孤児院にもよく遊びに来ていたらしいので、ユリスがそこへ向かうだろうという期待からだ。あれが元いた場所というのはそれなりに興味がある。

ユリスが入っていった孤児院は郊外の汚れたアパートともまた違った古さを感じる。

だが、庭の子供たちは元気そうに雪合戦やかまくら作りを楽しんでいるようだ。

孤児院ということは食事も賄っているということだろうがとても賄い切れるとは思えない。まあ、借金の抵当としてあの知人が強制的に徴収されたと話を聞いていた時点で大方の見当はついていたが。

車の扉が閉まる音がし、振り返ると綾斗が孤児院に向かって歩いてきた。気配は消しているので気が付かれはしないだろうが、静かに入口の端に寄る。建物の扉が開き、初老のシスターが出てくる。2人は促されるがままに建物の中へ入っていった。

敷地内に入り、窓から建物の中を覗く。それをし終えた後に温室があることに気がつく。

(そっぴや、あいつは花が好きだったな)

どこで花の知識を得たのかは謎だったがこういうことか。

一通り孤児院は見終えたので、外に出ようとすると浮かぬ顔をしたユリスと付き添う綾斗が出て行くのを見た。どこか今日のユリスは不安定だ。

それを見届け、理空も孤児院を出る。元々の目的地はここではない。道を歩いていき、森の中へと枝分かれした道を進む。何故か車が止まっていて、足跡が3組あった。綾斗とユリス、後1人は誰だ？と

首を傾げながら進むと、かつて自分がいた場所が見える。吹雪で見えづらいが確かにそうだ。

足跡を辿るように進んでいくと、突然禍々しく、無限に湧いてくるかのような星辰力プラナを感じる。

思わず目を細めてしまった。例の知人がここに来ているのは流石に想定外だった。人影を見る限りではあの場所に綾斗とユリスもいる。

殺されはしないだろうが、クローディアへメールを送る。理空はため息をつきながら森の中心にある平原のような場所へと歩いていった。

*

綾斗は窮地に立たされていた。ギユスターヴに襲撃されたから、ではない。目の前の少女にだ。

雪のように真っ白な長い髪、赤い月をはめ込んだかのような瞳、表情は今にも泣きそうなほどの悲壮感を湛えている。

《孤毒の魔女》エレンシユキィガール オーフエリア・ランドルーフェン。

《王竜星武祭》リンドブルスを2連覇しており、世界最強の《魔女》ストレガの呼び声も高い。

その能力は『毒』。

すでにユリスは毒の瘴気の腕を喰らって気を失っており、綾斗も無味無臭、無色透明の瘴気を吸ってしまい意識をどうにか保っているという始末であった。

勝利どころか、撤退も絶望的だ。何せ今にもこちらを襲おうと、オーフエリアから出ている瘴気の腕が大きくなっているのだから。

「ごめんなさい。でも、すぐに楽になるわ」

その腕が振り下ろされそうになり、気力を振り絞って《黒炉の魔剣》セルベレスタを握り直そうとした瞬間、

——その腕が消え失せた。

(この、能力は………！)

「つたく、とんだ休暇旅行だな」

見慣れた紺色の髪と大きな金色の瞳。いつもに比べれば声に感情が入っているだろうか。

「——よう、オーフェリア」

*

「理空………？どうしてここに？」

「旅行のついでだ」

「そう………」

「お前は？オーフェリア」

「私の運命がそうさせただけよ」

(理空？オーフェリア？)

そのやり取りに綾斗はやや違和感を感じるが今はそれに意識を割く余裕はない。意識を保つので精一杯だ。

「で？オレとここで殺り合うか？」

「…… やめておくわ。貴方の運命に関わる気にはならないもの」

そんな言葉をかけた後すぐにオーフェリアの目の前に空間ウインドウが開く。

『おい、オーフェリア。てめえ、どこで油売ってやがる。あれほど研究所から出るなつつつたろうが』

音声通信だったが、苛立ちが大量に混じった声ですぐにデイルクだと分かった。

「……… すぐに戻るわ」

そう言つて空間ウインドウを閉じ、こちらに視線を向ける。

「さようなら、理空……… ユリスにはもう関わらないでと言つておいて」

「天霧こいつに頼めよ」

「………」

理空の言葉に反応を示さずに止まっている車の方へ向かう。

「……… お前はいつまでそうしてんだ？」

虚空に視線を向けてそう言葉を紡ぐ。

「おやおや、気づいていましたか」

宙に昨日と同じ格好をしたギユスターヴが立っていた。

(ギユスターヴ・マルロー!?? 不味い……!)

綾斗は手負い。とても満足に動ける状態じゃない。

「あなたに手を出すなどは言われていませんからね。
《消失の魔術師》。邪魔をするのならば容赦はしません。用を済ませてもらいましょう」

その言い回しを聞く限り、理空とクローディアの考えは当たっているようだ。

ギユスターヴの両脇に魔法陣が浮かび上がり、昨日よりも一回り小さく、だが万応素の力強さが大きいモノが出てくる。

「ご紹介いたしましたよう。我が作品、オルトロスとケルベロスです。
星獵警備隊の隊員を何人も屠ってきた愛しき番犬……」

ギユスターヴは勝ち誇ったように笑みを崩さない。
——が、次の瞬間。オルトロスの2つの首が、ケルベロスの3つの首が消えた。

「……………は?」

「頼んでもない説明ご苦労さん……それで」

興味がなさそうな視線をギユスターヴに向ける。

「——これで終わりかよ?」

さすがにこれにはギユスターヴも焦りを隠せない。

(攻撃にも使えるのか……………!)

朦朧としてきた意識の中、綾斗は理空の能力を脳に焼き付けていた。

「それと、もうすぐエンフィールドがこっちに来るそうだ。お前からすれば困るんじゃないのか?」

「…………… 不愉快なほどに聡いですな」

無言のままこちらを睨んでくるが、大きいため息をつき首を横に降った。

「仕方ありませんな。ここは引くといたしましょう」

ギユスターヴは森の中へ消えていった。

——ドサツ。

緊張の糸が切れたのか、綾斗は気を失った。先程クローディアに連絡は入れたから平気だろう。

改めてここら一帯を歩き回る。地面の至る所が腐食し、花どころか草一つ生えていない。

自身の力で自身の最も好きだったものを壊すとは、運命というものが本当にあるのなら皮肉なものだ。

「綾斗？ユリス？」

クローディアが到着したようだ。焦燥感を隠さぬ雰囲気醸し出しながらこちらへ走ってくる。

「しつかりして下さい、お二人共……！」

「オーフェリアの毒喰らって気失ってるだけだよ。介抱すんなら好きにしろ。オレは先に王宮に戻る」

「……………分かりました」

元来た道を歩いて行く。正直言って、オーフェリアと戦うのはリスクが大きすぎる。あの場から引いてくれて助かった。

理空が気紛れである場所に寄るのなら、オーフェリアも寄る可能性も考慮すべきだった。

「いや、それは無理な話か。理空にも知れることには限界がある。

「…………… 本当にとんだ旅行に來ちまったな」

自嘲気味に呟いた声は白い息と一緒に空気の中へ溶けていった。

ギユスターヴ・マルロー

「ここは……?」

「目が覚めたか」

「そうか、あれから気を失って……」

王宮内の綾斗にあてがわれた部屋に理空がいた。

ベッドの上には眠っている紗夜と綺凜もいる。ユリスの姿がないようだが……

「ああ、目が覚めたのか」

部屋の扉が開き、ユリスが入ってきた。

「えーと、何でこうなっているのかわからないんだけど……」

紗夜と綺凜へと視線が向く。

「お前、どれくらい目を覚まさなかったと思う?」

「え?」

「3日だ」

「3日も!?!」

「この2人も余程心配なのか付きつきりだった。後で労ってやれ」

実際、2人はすやすやと寝息を立てている。

「それと…… すまない、助かった。ギユスターヴまで来たところクロアディアから聞いている」

「ああ、別に大丈夫だよ。ていうか、ほとんど理空がやってくれたし」

若干驚いたのか、ユリスの目が見開く。

「そうなのか?」

「向こうが引いてくれたただだ。オレがやったのは例の幻獣の始末だけ」

「…… そうか」

ユリスが理空に対して静かな態度を取るのには些か新鮮だった。

「それで、ユリス。教えてくれないかな?——オーフェリア・ランドルーフェンとの関係を」

「…… そうだな。こうなってしまった以上、お前にも知る権利があるろう」

ユリスはオーフェリアとの過去を話し始めた。
理空はほとんど知っていると、聞いても特に何も湧いてこないの
で聞き流していた。

*

「だから綾斗、これは私とオーフェリアの問題だ。余り手を出そうと
しないでくれ」

「……了解」

「そこで狸寝入りをしている2人も口出し無用で頼むぞ」

紗夜と綺凜がゆっくりと起きる。

「……ばれていたか」

「あ、あはは……ごめんなさいです」

「気にするな。それよりも今はギユスターヴ・マルローのことを優先
せねばな」

「あれ？そういえばクローディアは？」

「あいつなら一足先に帰国したぞ」

「えっ？」

「寄る場所が出来たといっ言っていた。詳しくは教えてくれなかった
が……」

理空に顔を向ける。

「雲崎、お前何か知っているのではないか？」

「エンフィールドに聞け。ここから無事に帰れりや本人から言うだろ
うしな」

「やはり何か知って——」

「ギユスターヴ・マルローの方を優先するんじゃないか？」

「……そうだな」

上手く丸め込まれてしまったが、理空の言っていることも間違いで
はない。それにしても——

「理空と一緒にいるなんて珍しいよね」

理空の性格上、どこかでぶらついていそうなものだったが……。

「そのバカ姫に言われたんだよ」

面倒くさそうに親指でユリスを指さす。

「この状況で単独行動をされてはこっちが困るからな」

「元はと言えばお前がオーフェリアに挑んだのが原因だろうが。力量差も弁えずに突っ込みやがって」

「ぐっ……………」

「理空、さすがにそれは……………」

言い過ぎだ、という言葉を読み込んだ。オーフェリアの力は破格中の破格だ。それに特に準備もせずに挑むのは確かに無謀と言えた。

それでも身も蓋もないその言い方に紗夜がジト目で理空を見る。

それに気が付いていないのか、興味がないのか、マイペースに言葉を紡ぐ理空。

「次に襲ってくるか、とすれば帰り道か、それとも——」

「た、たたた大変です！ 姫様！」

理空が自身の予想を言い終わる前にフローラが慌てた様子で部屋に入ってきた。

フローラ曰く、大人1人と同じくらいの大サイズのトカゲ(?)がかなりの数飛んでいるらしい。街はパニック状態に陥ったようだ。

「やっぱそう来たか」

「え？」

「どういうことだ？」

理空の言葉に首を傾げる4人。

「陽動だよ。警備を街に集めさせる腹だろうよ」

「いや、でも……………」

いくら傀儡国家とはいえ今回派遣された警備の数は相当なものだ。必要な主要施設には人員は割いているはずだ。

「……………なるほど、そういうことか」

苦々しい表情を浮かべながらユリスは舌打ちする。

「貧民街の方の警備はもういないな。統合企業財体からすればあの場所を守る理由は何もない」

「そして私達を釣ろうということか。——くそっ！」

ユリスはテーブルに拳を叩きつける。顔が怒りに染まっております、
万応素^{マナ}が揺らめいている。

「姫様……………」

フローラの一言ではっと我に帰る。

「ユリス……………」

「…………… 大丈夫だ」

大きな深呼吸をする。今この場にはフローラもいる。動揺を見せ
てはいけない。

というか、フローラがいる前で平然とこんなことを口にできる理空
の神経を疑う。

髪を掻き上げて綾斗達に向き直った。

「恐らく、ギユスターヴはこの陽動に気が付かれる前提で動いている。
それでも私は行かなければならない。理由は——先程言ったな
?…………… 一応言っておくが、お前たちが来る義務はないぞ?」

「今更何を言っているのさ」

紗夜と綺凜もそれに頷く。

「オレも行くか」

「…………… 何を考えている?」

「例の幻獣をもう少し見ておきたくてな」

本当にこの男はブレない。だが、戦力にはなるだろう。貧民街をど
うこうするつもりもなさそうなので止める理由はない。

「私に考えがある。その通りに動いてもらえるか?」

*

空中を蹴って湖上を通る。冬ということもあつて夜風は冷たかつ
た。

ユリスは綾斗を抱えながら炎の羽を背中に生やし飛行していた。

なにやら少しユリスは顔を赤らめているが、綾斗は何故それに気が
付かないのかが不思議だった。

(誰を選ぶことになるのやら)

綾斗は1人も気づいていないという朴念仁ぶりを発揮し続けている。

そんなことを考えていると、貧民街付近の湖畔に1人の男が待ち構えているかのように立っていた。

「ギユスターヴ・マルロー……！」

「きつと来ていただけだと思いますっておりましたよ」

「孤児院には手を出していないだろうな」

「ご安心を。正直に申し上げれば——がはっ!?？」

突然ギユスターヴの胸から血が溢れ出る。

「喋ってる余裕があるならもう少し警戒しろよ」

「くっ、《消失の魔術師》……！」

急所にまでは届いていないものの、深傷には違いない。理空とて、命を奪う気はないのだが。

「一応聞いておくが、依頼主は誰だ？」

「……私もプロの端くれ。そればかりはご容赦を」

有能かどうかは置いておいて、そこまで小物でもないようだ。

「——ですが、私の最高傑作をご紹介致しましょう」

巨大な魔法陣が現れ、湖面から9つの首が現れる。

おおよそ、40メートルといったところだろうか。

「こいつはヒュドラか……！」

「その通りですよ。王女陛下」

傷を押さえながら嬉々とした声で頷く。

「私の作品を説明出来ないのは惜しいですが、これで私は失礼致します」

ギユスターヴは闇の中に姿を消した。

それと同時にヒュドラの1つの首が大きく口を開き、膨大な量の万応素が渦を巻く。

その光線はコンクリートを抉るように吹き飛ばす。

(……威力は沙々宮の煌式武装と同じくらいか)

綾斗が何かユリスに言っており、それに反発するが綾斗の案に乗ったようだ。ユリスが再度炎の羽を生やし飛び去る。

綾斗が理空の隣まで来る。

「リースフェルトは？」

「住民の避難に向かったよ。紗夜の準備もそろそろ終わるだろうけど、理空、サポートを頼める？」

「連携なんてやったことないから期待はすんな。けどまああの光線の対処くらいはしてやるよ」

「充分……！」

民家の屋根に飛び乗り、光線を掻い潜って1つの首を斬り落とす。

「え……？」

——が、その斬り落とした首がぼこぼこ泡立ちながら元通り再生した。

「倒す条件は知らんが全部仕留めるしかなさそうだぞ？」

「……だね」

神話通りなら中央の首を落とせば終わりだがそれをやるにしても他の首が邪魔だ。

理空の能力で瞬殺出来はするが、それではわざわざ来た意味がない。

綾斗が再度構えたかと思うと急にあさつての方向へ動き出した。

何やっているんだと思いいてみると、腰が抜けている女性がいて、今にも瓦礫が崩れ落ちそうになっている。

その瓦礫を蹴飛ばす隙に1つの首が綾斗の前に回り込んでおり、その口が開かれる。能力を使い対処しようとした瞬間、その頭部が炸裂する。

綾斗の空間ウィンドウが開いている。どうやら紗夜の狙撃だ。

何か話した後に綾斗が動き出す。先程よりも多少強引に斬り落としにいつているが、そこは紗夜の狙撃と理空の能力で埋めていた。

順調に進んで、残り3つの内の2つを流星闘技メテオアーツで綾斗が薙ぎ斬る。その隙に中央の首から光線が放たれるが理空によって対処される。

綾斗が最後の首を落とそうとした瞬間に再生を終えた別の首から光線が放たれ、光線ごと斬ろうとするが無理があり屋根に叩きつけられる。

(再生を1か所に絞ったのか)

もう充分にこれを見たので理空が2つとも仕留めようとすると、聞き慣れた声がかから降る。

「——よくやってくれたぞ、お前たち。お陰でこちらの仕掛けも完了した」

見上げるとユリスが空中で両腕を振り上げている。

「綻べ——ラフレシア・デユオフロリス大輪の爆耀華・二輪咲！」

巨大な魔法陣が複数重なり、ヒュドラを包むかのような大爆発が起こった。

(……脳筋な。また威力重視か)

ため息をつきながらも収まってきた炎の中で蠢うごめいている白い何かを真っ二つにする。

骨からも再生するようだ。

神話へのこだわりが強い。どうもアルルカント関係の人間はそういう性格の者が多いらしい。

その骨は溶けるように消えた。

*

あの後、ギユスターヴは綺凜によって気絶されられその身柄を警察に引き渡した。あの傷を負っていたのでそう遠くには行けなかったらしく、すぐに見つけられたそうだ。

事情聴取もされそうになったので理空は早々に王宮へ戻りベッドで寛いでいた。元々、理空はギユスターヴのターゲットではなかった。ので今回ばかりはユリスも紗夜もなにか言いたげな様子はなかった。翌日は王宮内に全員集まったらしい。らしいというのも理空はそれもすつぽかして自室で寛いでおり、持ってきていた適当な本を読んでいた。

綾斗はその日に急用が出来たと先に帰国してしまった。内容ははぐらかされたが、十中八九遥関係だろう。見つかるにはやたら早すぎる。とも感じるがそれが1番有力だ。

その3日後、理空達も帰国することになり、行きと同じリムジンに乗っていた。

いつもうまく理空と折り合いをつけるクローディアと綾斗がいなかったため、車内はかなり静かで特に誰も何も喋らずにいた。

外をぼーっと眺めていると、ユリスから声をかけられた。

「雲崎」

「何だよ」

「今回の件、礼を言う」

「別にお前らとかこの国のために動いたわけじゃないから気にするな」

「それでも、だ。オーフェリアの一件の時といい、世話になった。――

――ありがとう」

そう言っって頭を下げた。

少し驚いてしまった。理空のことを良く思っていなかったユリスがこうして頭を下げてくるとは。紗夜も綺凜も目を見開いている。

特にその後も飛行機の中でも何も起こらなかったが、理空は妙な感覚を感じていた。

綾斗の依頼

帰国から2日後。朝日も上っていない時刻に理空は星導館へ向かっていった。

——『明日のこの時間に星導館へ来てください』

昨日の夜クローディアから送られてきたメールだ。

今回の用件は全く見当がつかないので断ろうかと思っただら同じ内容のメールが何回も送られてきたので諦めて今向かっているという状態だ。

星導館の校門が見えてくる。クローディアが立っていて、こちらに気が付いたらしく歩いてくる。

「わざわざこちらまで来ていただきありがとうございますとございます」

「行かなきゃまたメールを連発されるからな」

「まあそのつもりでしたね」

皮肉に対して満面の笑みで返すクローディア。やはり腹黒い。が、どこか中途半端にも思える。

「とりあえず生徒会室に案内します」

そう言ってクローディアが空間ウィンドウを操作すると理空の端末に入校許可証が送られてきた。

歩いて行き、生徒会室に入ると他の4人がソファに並んで座っていた。端にスペースが空いているのでそこにクローディアが座るのだろう。

「そこにかけてください」

テーブルを挟んで同じようなソファにかける。

クローディアが無言で全員分の紅茶を注ぐ。

「…………… 何の用だよ」

「珍しく予想がついていないのですね」

「心当たりがなさすぎてな」

「では、まずはユリスから」

（複数あんのかよ）

別に眠いとは言わないがこんな時間にわけもわからず呼ばれるの

は癩だ。

「オーフェリアとはどういう関係だ？」

「…… そんなこと聞くためにわざわざ呼んだのかよ」

ユリスがムツとしかけるがその前に綾斗がするりと入り込んでくる。

「だってあの時、お互いに下の名前で呼び合っていたよね？」

「……………」

オーフェリアは綾斗のことをフルネームで呼んでいた。ユリスのように面識がない限り理空もそう呼ばれるはずなのだ。

理空に至っては綾斗たちの知る限り下の名前で呼ぶ存在を知らなかった。

要するに、ある程度交流はあるということだ。

「…………… 別にただの古い知人だよ」

古い知人？ユリスの記憶が正しければ理空はあの孤児院にはいなかったはずだ。ということは——

「お前も《大博士^{マグナム・オーパス}》の実験台だったのか……………！

「まあな」

他の4人も目を見開くが、理空は何でもないことのように返す。

「つつても、生まれつきオレは《星脈世代^{ジュエネステラ}》で《魔術師^{ダンテ}》だけだな。オーフェリアとは別だ」

内容は？とは聞かなかった。否、聞けなかつた。そこまでの度胸は綾斗達にはない。

「んで？他の用件は？」

ただ1人マイペースにいる理空が問いかけてくる。

用件はこれだけではない。むしろ、今から言う方が本命だ。

「この前の休暇旅行でさ、俺だけ先に帰国したの覚えてる？あの時は誤魔化したんだけどさ……………」

この空気の中、どうにか伝わるように言葉を出す。

「俺には姉がいて——」

「ああ、天霧遙のことか？」

「えっ!?!?」

「またも全員の顔が驚愕に染まる。」

「……何故お前がハル姉を知っている」

「別に面識はねえよ。見たことがあるだけだよ」

「……どこで」

「《蝕武祭》^{エクリプス}。あの試合はオレも観てたからな」

「……やっぱり姉さんは《蝕武祭》に出てたんだね」

「どこか残念そうに呟く綾斗。」

「やっぱり？お前そのこと自体は知ってたのか？」

「あ、いや……」

「しまったという顔をしているがもう遅い。意を決して正直に明かす。」

「……《鳳凰星武祭》^{フェニクス}中に《悪辣の王》^{タイラント}から聞いたからね」

「ふーん。で、何を聞かれた？」

「え？」

「あいつがタダで提供するわけねえだろ」

「……マディアス・メサとどういう関係だって……」

「……へえ」

「何故そこでマディアスが出て来るのかは全くわからないが、何か意味はあるのだろうか。」

「話が逸れたけど、姉さんは5年前に失踪したんだ」

「《蝕武祭》の時期と被るな」

「それで、5日前に見つかったんだ」

「そりや良かったな」

（白々しい……）

ユリスは内心不機嫌そうに鼻を鳴らしていた。試合を観ていたということは今の遥の状態も知っているとということだろうに。紗夜も同じようなことを考えていたらしい。

「……ハル姉の状態を知っていたのか？」

「ん？ああ」

「なら何故何もしようとしなかった」

「どこにいるのかは知らなかったからな」

「それでも推測したりは出来たはず。でもお前はそれすらしなかったのか」

非難の眼差しを理空に向ける。それに対して理空はどこか冷えたような呆れたような眼を向ける。

「沙々宮って馬鹿なのか？」

「……………何？」

「他人を当てにしてんじやねえよ。何で特に意味もなく赤の他人の手助けをしなきゃならない？天霧が親族関係ってことくらいは予想はしてたけどよ、それでも本人の口から聞いてたわけでもなかったんだよ」

「……………それは」

「大体お前は何かしたのかよ。天霧からこの件を聞いてなかったって訳じゃないよな？聞いた後にお前は何かしようとしたのか？」

「……………でも」

「でもも何もねえだろ。お前は自分や天霧を基準にし過ぎなんだよ。お前がどう考えようと勝手だ。けどそれをオレに押し付けんな」

相変わらずの平坦な声をぶつけてくる。理空自身、紗夜の発言に対してどうこう思っていない。苛立つてもこない。心底くだらないものを見たかのような眼をしていた。

「紗夜、落ち着いて」

「綾斗、でも……………」

「理空の言っていることは何も間違っていないよ。これは本来、俺が成すべきことなんだから」

諭すような綾斗の言葉に紗夜は唇を噛む。

紗夜だってその程度のことからわからないわけじゃない。冷静になっってみれば理空や綾斗に言われるまでもないことだ。

ただ、自身の幼馴染と自分によくしてくれた姉のような存在が絡んでいたことでいつもと比べて感情的になってしまっただけなのだ。

「姉さんはヤン・コルベルさんって言う人のところにいたんだけど」

「ああ、あの爺さんね」

「理空も知っての通り姉さんは自分の能力———万物を戒める『禁

獄』の力で自分自身を仮死状態にしているんだ」

「それで？」

「先生はあらゆる治療法を試したけど無理だったって……。今も続けてくれているけどね」

「……………」

「——理空の能力で『禁獄』の力を消して目覚めさせてくれないかな？」

これは予想外だ。まさかそんなことを頼んでくるほど信用されているとは。

「さっき理空が言ったことは正しいと思うし、俺は何も見返りは用意出来ない。それでも、やって欲しい……………」

「……！」

「……………」

顔を上げる

ゆっくりとおそろおそろ顔を上げてくる。
「正直言うと最近事情が変わったから、これに対して絶対やりたくないとは思わない。むしろ、天霧遥が目覚めてくれればオレにとってもメリットはある」

これは本音だ。別に綾斗が見返りを用意できなくとも、目覚めた遥から提供してもらえそうなものはある。それに魅力は感じている。

「じゃあ……………」

「……！」

それでも。理空の回答は決まっている。

喜びかけた綾斗の顔から、力がなくなる。

「——断る」

理空の能力

重い、重い空気が溢れかえっていた。

綾斗にとって、理空は『得体の知れない存在』だった。

それでも何度かこちらを手助けしてくれていたし、妨害しようとする様子も見られなかったからある程度信用を置いていた。

だからこれほどにくるものがあるのかもしれない。

この頼みを断られることは想定していた。していた、はずだったのだ。

「……………理由を伺わせてもらってもよろしいでしょうか」

クローディアですら、普段の笑顔が消えている。

「オレの能力に関わるから言いたくないんだけどな……………」

それじゃ引き下がってくれないか、と諦めた様子でいる。

「——まず、オレの能力は『消失』じゃない」

「なっ!?？」

全員の顔が驚愕に染まる。今日何度目かももうわからない。

ただ、それも無理はない。

理空の能力を知っている人間はヒルダ、ロドルフォ、ペトラのみな
のだから。おそらく、他のほぼ全ての人間が誤認しているだろう。

「オレの能力は『移動』だ」

「『移動』……………?？」

「……………やってみせた方が早いかな」

テーブルの上に置いてあるカップに触れる。その直後、中央付近に
あったはずのカップが端にあった。

「これだけだ」

「……………」

「『移動』は主に3種類だな。オレ自身を移動させる『瞬間移動』、触れたものを指定の場所に移動させる『指定移動』、2つの座標を入れ替える『相互移動』だ。だから、消すなんて真似はそもそも出来ないんだよ」

「……………質問」

紗夜が手を挙げる。

「何だよ？」

「ここまで聞くと『指定移動』よりも『相互移動』のほうがよっぽど便利に見える。『指定移動』のメリットはあるのか？」

紗夜の疑問は最もだ。

『相互移動』が座標を2つ設定するだけなのに対し、『指定移動』は座標を設定する前にまず触れるという条件を満たさなければならぬ。

「もちろんある。『指定移動』は触れたものの中でも移動するものを選び。」

「べる」

「いまいちよくわからないという顔をする紗夜。綾斗、クロードイ

ア、綺凜も同様だが、『魔女』^{ストレガ}であるユリスは理解が早かった。

「なるほど、そういうことか」

「えっ？どうということなの？」

「例えばここに濡れた紙があるとす。『指定移動』ならば紙に含まれた水分のみを移動することが可能ということだろう」

「そういうことだ。『相互移動』の場合は紙ごと移動するけどな」

脳裏によぎるはバラストエリアの一件。

あの時理空が綾斗と綺凜に触れた瞬間服は一瞬で乾いてしまった。

あの時に『指定移動』を使っていたということだ。

思い返してみれば、目の前から消えるのも、能力が消されるのも『移動』によるものだとするれば辻褄が合う。

「あのさ、『孤毒の魔女』^{エレシユキィガル}の能力に使ったのは……」

「『相互移動』だな」

「『指定移動』って触れば発動出来るんだよね？」

「？ああ」

「触った瞬間に移動するっていうのは出来ないの？」

もしそれが出来るのならば、鉄壁の防御だろう。あの幻獣の首を消し飛ばしたことを考えると、『相互移動』による攻撃は恐らく防御不可。

無敵に近いのでは？と思うほどの破格の能力だ。

『指定移動』で移動できるものはオレが解析済みのもの限定だ。例えば、『魔女』や『魔術師』^{ダント}だったら人によって星辰力^{ブラーナ}と万応素^{マナ}の接合パターンは違うし、そういうのは間近で見るとなりしなきやならない。普通の物質とかでも同じ。どういう性質を持つとかを知らなければならぬ

「なるほどね……………」

今言っているような制限はあるものの、ある意味『消失』よりも強力なものだろう。攻撃、防御、回避、機動、全てに精通している。

「要するに理空の能力は『移動』だから姉さんを目覚めさせるのは無理なことか……………」

「いや？満更無理でも無いと思うぞ？」

「ええっ!?？」

腰が浮きかける。それに気がつき、慌てて座り直す。

「さっき言ったろ。解析済みなら『指定移動』が使えんだ。なら『禁獄』とやらをオレが知ればそれをどかすことはできるだろうよ」

「じゃ、じゃあ……………」

「最後まで聞けよ。けどそれはリスクがデカいんだ。解析してる間に何が起るかわからない。もしかしたらオレ自身が『禁獄』にかかるかもしれないし、『禁獄』が暴走して天霧遥に何が起るか全く予想がつかない。そんな条件で試しているのか？」

「…………『相互移動』は？」

「座標を間違えればあの世行き。『指定移動』よりリスクがデカい」

「……………」

その通りだった。今回のような特殊なケースでなくとも、能力が暴走する実例はある。『禁獄』が暴走してしまえば遥の命にも影響するかもしれない。かといって能力を遥の身体ごと移動しても意味がない。結局、手詰まりだ。

いや、手はある。あるが、その方法は取りたくない。

「まあでも、どうしても目覚めさせたいなら『大博士』^{マグナム・オーパス}の助力を得ることを勧めるぞ？」

「え……………」

「つーかオレ連絡先持つてるから掛け合つてやろうか？それとも連絡先もらつとくか？」

「いや……………」

余りにも予想外の言葉が出てきて呆然としてしまう。

ユリスも信じられないものを見たような眼をしている。

「理空つてさ、その……………《大博士》の実験台だったんだよね？」

「？それがどうかしたのか？」

「っ!?？」

恐ろしいほどに冷めた眼に思わず身を引こうとしてしまう。

「別にあいつのことを恨んでるわけじゃねえよ。オレの場合は対等な取引によるもんだ。オーフェリアだつてあくまで借金の抵当に充てがわれただけで、誘拐されたわけじゃないんだろ？筋は通つてんじやねえか」

「……………」

「取引の内容について詳しく聞きたいか？」

「いや……………いいよ」

「連絡先は？」

「知らないよ……………」

ヒルダを解き放つわけにはいかない。そこは譲れなかった。

「オレからすれば何でそれを拒むのかわからんけどなあ」

「いや、だって——」

「あー、何となく予想はつく。大方オーフェリアみたいな犠牲だのを出したくないとかだろ？」

「……………うん」

「それでも理解は出来ねえな」

一旦区切つて、相変わらずの平坦な声で続ける。

「《鳳凰星武祭》で優勝してる時点でもうすでに数百人蹴落としてるよ
うなもんだろ。んで、お前らは《獅鷲星武祭》に優勝しようとしてんだからまた数百人蹴落とそうとしてるわけだ。それとあいつを解き放つことの何が違う？」

「それは——」

「犠牲は生まれるもんだ。それを生まないようにするってお前は神か何かかよ」

理空を言っていることは恐らく間違っていないのだろう。

それでも、自身の友人とその親友の例を考えると、手を借りる気にはならなかった。

「大体お前、どうやって目覚めさせる気だ？あの爺さんじゃ無理だろ」

「それは、《大博士》も先生も言ってた」

「何だ、もう接触済みか。てことは話はもう来てて、それを断ったのか」

「……うん。《大博士》を解き放たずに姉さんを目覚めさせる方法を見つけてみせる。そのためにも《獅鷲星武祭》にも優勝する。蹴落とすっていう行為かもしれないけど、それでも《大博士》の犠牲になることはまた別のことだと思っから」

「ふーん。精々頑張れよ」

確定情報じゃないので何とも言えないが、統合企業財体の手を借りてもかなり時間がかかるだろう。数年か、十数年、下手すればそれ以上。ヒルダを解き放てばすぐだろう。本当にそうなら、綾斗はどちらをとるのか。

(…その意地がどれだけ続くか見ものだな)

「一応言っとくが、オレはあいつの味方ってわけじゃないからな。連絡先は持つてるが、それも取引っただけで協力関係じゃない」

「だろうね」

協力関係を結んでいるなら連絡先を持っていることをわざわざバラす意味はない。

「はあ……」

「落ち込んでるところ悪いが、仮に能力が『消失』だったとしても断っているからな」

「……………何故でしょう？」

これまでほとんど黙っていたクローディアが口を出す。

「天霧遥を《蝕武祭》^{エクリプス}で負かした奴が何をしてくるか分からんからな」

「どうしてそう断定が……」

もういいだろう。ここまで明かしてしまった以上、もう隠す意味もない。

「《鳳凰星武祭》の閉会式の日に襲われたからな」

「なっ!?!?」

「目的は知らんが何かしらやろうとしてんだろ。天霧遥のことを把握してないとは思えない」

「その人の特徴は?」

「それ聞いて天霧はどうするんだ?」

「それは…… 捕まえて話を……」

だから言いたくなかった。予想通りすぎる。

「天霧遥が《黒炉の魔剣》セルベレスタ持ちで負けたんだぞ? 今のお前じゃ話になんねえよ」

「うっ……」

「封印が完全に解けてない。精々あの状態を1時間程度保つので精一杯。《黒炉の魔剣》も持て余す。どうやって勝つ?」

実際、戦ってみてわかった。あれに勝てると言い切れるのは界龍ジエロンの《万有天羅》やオーフェリアくらいのもだろう。普通の序列一位の3人分の実力はあると見た方がいい。

「それでも自分の手でどうにかしたいなら突っ込んでさっさと死ぬ。仮に情報を渡すとしても下手に挑まないっていう条件つきだな」

「…… わかった」

意を決したようだ。

「《処刑刀》ラミナモルスって名乗ってた男だ。仮面を付けてる。《赤霞の魔剣》ラクシヤナーダの使い手だ」

「《赤霞の魔剣》……?」

「どういう剣なの?」

「《黒炉の魔剣》と同じ『四色の魔剣』の一振りだ」

「ですがあれは……」

「ああ、封印処理がされているはずだ。けど持ってたってことは要するに——」

「――《悪辣の王》と組んでいるということですね？」

「だろうな。んで、あいつの手駒の中にはオーフェリアもいる」
「……………っ」

ユリスはかなり辛そうな顔を浮かべた。自身の親友が綾斗の姉である遙を負かした人間の仲間とくれば当然だ。

(…《ヴァルダⅡヴァオス》のことは言わなくていいか)

ヴァルダ自身が戦う可能性は低いし、能力を知ったとしても対処出来るものでもない。それに、あまりに知りすぎていると怪しまれかねない。

「オレから話せるのはこれくらいだな」

「雲崎、一ついいか？」

これで帰ろうとしたところ、ユリスが入り込んでくる。

「まだ何かあんのかよ」

「私は………… オーフエリアに勝てるか？」

悲痛そうな様子で聞いてくる。本人も薄々、いや、はっきりと分かっているのだろう。

「無理だろ」

「ちよっ、理空」

「差がありすぎる。はっきり言って勝負にならない。少なくとも今のところはな」

「……………」

下を向いてぎゅっとな拳を握りしめる。爪が食い込んで血が出そうなほどに。

(つつても、こいつもそれが分かかって突っ込むタイプだからな)

理空にとって最優先は《黒炉の魔剣》の適合者である綾斗だ。正直、他の4人なんてどうでもいいが、誰かが殺されて綾斗に何らかの影響が及ぶのは可能なら避けたい。

かと言って、理空にはユリスの実力を飛躍的に伸ばすことなど出来ない。
「………… リースフェルト」

よって博打に出る。下手すればユリスの心が折れるかもしれない。

でも上手くいけば変化はもたらせるかもしれない。それに折れたら折れたで荷物が1つ消えるのでそれはそれでありだ。

理空の声に反応し、顔を上げる。

「オレと1回戦ってみるか？」

「……何？」

「同じ能力者だからな。何かしらのヒントは得られるかもしれないぞ？ああ、安心しろ。別にオレはお前の技を解析出来るなら後々役立つ」

「……」

「——どうする？」

ユリスにとっても魅力的な面はある。理空の能力もかなり珍しい部類なので、そういう意味ではオーフェア対策にはなる。断る理由はない。

「……頼めるか？」

「ああ。トレーニングルームはそっちが用意しろよ？」

「……ついてきてくれ」

（……ちよつと仲良くなってる？）

ユリスと理空は元々かなり仲が悪い、というかユリスが一方的に嫌っていたのだが、休暇旅行を経て少しそれが和らいだように感じる。

思わず顔が綻びそうになる。

願わくは、これが少しでもユリスのためになってくれることを綾斗は祈った。

《華焰の魔女》

「……………綾斗、どっちが勝つと思う?」
「えっ?」

歩いている途中、少し離れて前を歩くユリスと理空には聞こえない音量で来た唐突な紗夜の問いに綾斗は間抜けな声を漏らす。そして、考える。

「俺個人の感情で言えばユリスって言いたいところだけど……………」
理空の強さは未知数。

わかっているのはレヴオルフで序列四位をキープし続けていること、これは本人談だが《グラサインシリーズ覇潰の血鎌》持ちのイレ―ネ相手なら圧勝ということ。

能力的な相性を考えるならば、ユリスにとって理空は最悪の相性だ。

それらを加味するとなると……………

「……………理空の方が有利だと思う」

綾斗にしては珍しく明言した。

「私も同意見ですね」

「あんまり言いたくないですけど、正直、わたしも……………」

クローディアと綺凜もそれに同意する。

「……………そう」

認めたくないが、紗夜も同じ見解だった。

紗夜はどうしても理空のことを好きになれない。単純に気に入らないというものもあるだろうが、そもそも根本的に相容れないところがあるのかもしれない。

数少ない友人と比べてどちらを応援したいと思うかは言うまでもない。

内心厳しいと思っただけでも、紗夜はユリスの勝利を期待していた。

*

「……煌式武装、変えたんだな」

《冒頭の十二人》専用のトレーニングルームの中に理空の声が響く。その視線の先には宙に浮かんでいる6本の煌式武装がある。

「ああ、煌式遠隔誘導武装といってな。まだ使い始めてから日は浅い。だが、こいつのおかげで《鳳凰星武祭》に比べて格段にパワーアップしたと自負しているぞ？」

「……へえ」

ユリスは感情的になりやすいが、冷静なときは大言壮語をする人間ではない。余程自信があるらしい。

とはいえ、《鳳凰星武祭》を見る限りではそこまで期待は出来ないが。

理空も煌式武装を起動する。

理空のスタイルが気になるのか、ついてきていた4人の間にも緊張感が走る。

「いつでもいいぞ」

「そうか。なら、遠慮なく行かせてもらおう！咲き誇れ！——
鋭槍の白炎花！」

飛来する炎の槍を躲す、躲す。

『相互移動』でまとめて対処してもいいがこんなところで星辰力を無駄遣いしたくない。いくら燃費が良くしたからといって、星辰力が少ないのは変わりはないのだ。

「むっ……」

あつさりと全て躲されたことにより眉を顰めながらも新たに技を展開するユリス。

「咲き誇れ！——
赤円の灼斬花！」

20個近くの戦輪が浮かび全方向から理空へと襲いかかるが、隙間を縫って躲す。

（あれも躲し切るとは……何て身体能力と動体視力だ！）

ユリスが感じているように、理空の身体能力はアスタリスク内でもトップクラス。第2段階状態の綾斗よりも上だろう。

理空は躲しながら前に出て短剣型煌式武装を振るう。

「間合いを潰しに来ましたか……」

「でも、今のユリス先輩には……！」

観ている人間達が咄くのと同時に6本の煌式遠隔誘導武装が理空の短剣を捌き、身体に攻撃を加える。

だが、ユリス自身は特に何の仕草もしていない。

(……思考で操作できるってわけか)

自分より接近戦に優れている使い手相手でもこれならば少なくともある程度は対処ができる。

煌式武装の動きを誘導しようと足を踏み出すと、足元に魔法陣が浮かび上がる。

「綻べ——栄裂の炎爪華！」

いつの間にか設置型能力が準備されていたようだ。巨大な炎の爪が理空の足元から吹き上がる。それをバックステップで回避する。改めてユリスを正面から見据える。

確かに、《鳳凰星武祭》に比べるとレベルアップしている。接近戦への対処はもちろん、技の展開速度が上がっている。

そんなことを考えていると、下がる理空を追うかのように炎の竜が出てくる。

「咲き誇れ——アンテリナム・マジエス？竜の咬焰花！」

この煌式武装は本格的に導入されればロドルフあたりが使い始めそうだ。あの身体能力とバトルセンスなら充分に使いこなせるだろうし、ものによつては能力の欠点を補える。

だが、思考で操作するというのであれば穴もある。

足元の地面の一部に対して『指定移動』を使う。飛ばす先はユリスの頭上。

「がつり？」

脳天に瓦礫が直撃する。勿論、この程度では大抵の《ジエネステラ星脈世代》はダメージを負わない。だが、虚をつかれれば集中は切れる。

炎の竜は誰もいない方向へと逸れていく。

逸れた竜を『相互移動』で消しとばし、『瞬間移動』で背後に回り込

んで足を払って転ばせる。

ユリスの目が見開くがもう遅い。顔に短剣を突きつける。

「はい、終わり」

「ぐっ……」

全体的にユリスの動きはそこまで悪くはなかったが、いかんせん正直すぎる。

大技、小回りの効く技、設置型。幅は広い方ではある。だが、『万能』とまで言われているシルヴィアのそれには敵わないだろうし、火力に至ってはユリスより上の人間はそれなりの数がいる。実際、レヴォルフの《冒頭の十二人》^{ペーヅ・ワッ}下位にもいる。

しかしこの馬鹿正直さをどうこうしたところでオーフェリアには勝てないだろう。火力という最も大きな難題がある。理空や《黒炉の魔剣》^{セル・ベレスタ}のような特殊な能力ならともかく、ほぼ全ての攻撃はあの無限に等しい星辰力に阻まれる。

「……もう何本か頼めるか？」

何か手応えを感じたからか、それとも何も感じられなかったからなのか、ユリスの眼は真剣そのものだ。

「……あと15分だけな」

再度最初の位置につく2人であった。

*

「……もう1本だけ頼む」

「もう時間だから終わりだ」

結局合計で10本やり、理空の全勝だった。それだけでなく、回数を重ねるにつれて負けるまでの時間が短くなっていた。

単に理空が観察をやめて実力差が出たというのもあるが、原因はそれだけではない。

「というかお前、何回同じような手に引っ掛かれば気が済むんだ？ 学習能力がないのか？」

1番の問題はそこだった。瓦礫投げ、目潰し、落とし穴、そのよう

な搦め手にいくらなんでも弱すぎる。いや、弱いだけならまだいい。だが警戒しようとしてもしないのは流石に理解に苦しむ。

「う、うるさい！ 自覚はある！」

「じゃ直せよ」

「ぐっ……………」

ぐうの音も出なくなってしまうた。

界龍ジエロンの双子と戦った時やデイルクに嵌められた時からその手のこ
とがまるで成長していかないのだ。

「まあ、そういう戦い方を知らないってのもあるだろうけどよ」
そう言つて一旦切る。

「——」 “知る” ことよりも “知ろうとする” ことの方が遥かに難し
いぞ?。」

ユリスの目が見開く。思い当たる節があったからだ。

最たる例はオーフェリアの一件だろう。あんなことになった1番
の原因にあの時何も気がつこうともしなかった。孤児院の借金にも、
自分の国の現状にも。

そして、今の自分にもだ。力や技を磨くしかないと躍起になってい
た。視野が狭くなっていた。

「…………… 助言、感謝する」

「……………」

そのまま何も言わずに理空は消えた。『瞬間移動』で帰ったのだら
う。

ユリスは理空の言葉を深く、深く噛み締めた。

*

「——」 “知る” ことよりも “知ろうとする” ことの方が遥かに難し
いぞ?。」

この言葉は4人の方まで聞こえていた(勿論その前のやり取りまで

ある)。

紗夜は露骨に顔を顰めていた。

今、はつきりした。紗夜は理空のこういうところが気に入らないのだ。他人を、現状を、何もかも見透かしているかのような雰囲気を出すが、そんな風に言ってくるのが。

もしかしたら、これは単なる自分だけの被害妄想かもしれない。だが、これだけははつきり言える。

嫌いだ。

学園祭

「そういうえばもうすぐ学園祭ですね」

「そうだな」

高等部2年に進級し、プリシラとまたクラスメイトになった理空。昼休みになり、例のごとくプリシラがこちらへ来たので適当に逃げようとしたのだがあまり良い言い訳が思いつかなかったのとしばらくフェードアウトをし続けたことによるプリシラの押しに押し切られてしまった。

「理空さんはどこかに行くんですか？」

「んー……………」

会話にほとんどなっていない。プリシラが何か話題を振って理空はそれに気のない返答をする。いつものパターン、というやつだ。

このままでは埒があかないと思いついプリシラは理空の興味を引く話題を頭の中から引つ張り出し意を決して切り出す。

「——今更になってしまいますけど理空さん、姉の一件、ありがとうございますございました」

「……………はあ？」

今日初めて、いやこの一年以上を含めても初めて、理空はプリシラに焦点の合った眼をむける。

「何の話だよ」

「『フェニックス鳳凰星武祭』前に姉に『力だけが全てじゃない』って言ってくれたことです」

確かに内容的にそんなことを言った覚えがある。

それをどうして何を理空がイレーネに貢献したと取れるのだろうか。

「その一言が無かったら姉はあのまま吞まれてたかもしれないです
か」

「どっちみち天霧とリースフェルトがどうにかしてただろ」

実際、イレーネを『グラヴィティ覇潰の血鎌』から解放したのはあの2人だ。

「いえ、姉が理空さんの一言がなかったら危なかったかもしれないっ

て言っていましたから」

「……………」

「序列は下がつちやいましたけどあれから少し変わったというか、戻ってくれたんです。理空さんのお陰でもありますからお礼を言っておきたくて」

「……………」

「……………」

「あと、もう一つ」

「まだ何かあるのかよ」

「学園祭で私、露店を出そうと思ってるんです。良かったら是非来てください」

そう言つて自分の席へと戻る。いつの間にか昼休みが終わりかけていたようである。

*

学園祭最終日。大して興味もないので毎年のように自宅に引きこもっている。行くとすればレヴォルフでのカジノくらいだが、これも普段歓楽街ロトリフトに行っているのでわざわざ人が多い日に行く気は起きないため昨日までずっと自宅にいた。

しかし今日に限つて言えば、グラン・コロッセオというイベントがある分時間が潰せる。何せあの《万有天羅》が関わっているという情報もある。

そういえば、綾斗は旅行の際にシルヴィアにデートの約束を取り付けられていたが……………」

（……………」

絶対に不機嫌になつている。クローディアはニコニコしていながら内心何を考えているか分かつたものではないし、綺凜は不機嫌とはいかないまでも平常心でやり過ぎるのは無理だろう。さらに問題をややこしくしているのは綾斗の朴念仁ぶりだ。おそらく誰の好意にも気がついていない。

シルヴィアはまだ友人感覚かもしれないが3日もあの女たらしと一緒にいるとなると――

いや、やめよう。少なくとも直接的には理空と関係のない話だ。

そう思いつつも、シルヴィアが落ちるのも避けられないような気がしてならなかった。

*

《フェスタ星武祭》でも使用されるシリウスドームのステージにはすでにグラン・コロッセオに出場する選手が集まっていた。

正直、選手で目を引くのは綾斗くらいだと思っていたがステージを見るとアーネストとシルヴィアまで立っている。グラン・コロッセオに綾斗が参加するのは知っていたがアーネストとシルヴィアまで参加するとは思っていなかった。他にも有力な生徒としてイレネと《ジャオ・フーフオン天苛武葬》趙虎峰がいるがこの2人は別に無視でいい。

人数が減って綾斗達5人にまで減っていたが難なく最終フェイズまで到達した。

元よりアルルカントが造った玩具に興味はない。《万有天羅》が何か出してくるとすれば最終フェイズだろう。それを心待ちしていたところ、強烈な寒気に襲われて思わず息を吞んでしまう。

(誰だ?このデカイ気配は……?)

オーフェリアのそれと遜色ない。つまり《万有天羅》ファン・シンルー范星露だろう。

誰か気に障ることでもしたのだろうか。だとすれば馬鹿極まりない。最もあれの地雷など常人に予期できるようなものでもなさそうだが。

最終フェイズの始まりが近づき二体の人形が出てくる。実況の声を無視して虎峰の唇の動きに注目して読唇する。

(『初代《万有天羅》が残した界龍の仙具』……?)

読唇したところ本来界龍の外に出してはいけないものらしい。それを躊躇いもなく出してくるあたり何者にも縛られないというのは

本当のようだ。

最終フェイズが始まり仙具も動き出す。かなり俊敏な動きで《冒頭の十二人》レベルの動きだ。

シルヴィアの流星闘技を関節部分に喰らっても平気なあたり相当に頑丈だ。一体どんな素材でできているのかぜひ解析してみたいものだ。

仕切り直しとなったところでシルヴィアの表情がある一点を見たまま固まる。不審に思いその方向を見てみると理空の目が見開く。

「……………何でいるんだよ」

見間違えるはずもない。ローブで素顔はよく見えないがあの大きいネックレスは。

《ヴァルダⅡヴァオス》……………！！

すぐに席を立ちヴァルダが歩いて行った方へ向かう。割合すぐに追いつき陰から様子を伺う。

見ればどういふ状況かは知らないがヴァルダと綾斗が対峙し綾斗の後ろにシルヴィアが座り込んでいる。ヘルガにメールを送信して姿を見せる。

「よう、久しぶりだな。ヴァルダ」

挑発代わりに軽口を吹っかける。挑発だと分かっているけどヴァルダにとっては不愉快極まりない。

「雲崎理空……………この左肩の傷と共に貴様を目にすると忌々しさが込み上げてくる」

（……………オレからすりやあれで仕留めときたかったっての）

あの初見殺しで一人も殺せなかったのは中々に痛い。

「最初は貴様もこちらへ勧誘しようとも考えたが、どうせ来る気はないのだろうか？」

「そうだな」

「……………だろうな。能力を考えても貴様は計画の弊害にも程がある。ここで死んでもらうぞ」

「はっ。お前から死ぬ」

口ではそう言うものの星辰力の流れ的に恐らく限界寸前であろう

綾斗と何故かは知らないが戦う気が感じられないシルヴィアを庇いながらヴァルダを仕留めるのは難しい。ヘルガが来るまで時間を稼げば済む話だ。

とはいえ、死んでもらいたいのもまた事実。殺気を放ちながら短剣型煌式武装ルークスを起動する。そのあまりにも濃密な殺気に思わず綾斗もシルヴィアも息を呑む。

「……………」

「……………」

両者共に動かない。ヴァルダが下手に動けば前回の二の舞以上に悲惨な結果に成りかねないし理空もそれを狙っている。

「——ッ!!?」

『相互移動』による斬撃、ではなく銃型煌式武装による理空の早撃ちを咄嗟にしゃがんで躲す。ヴァルダの後ろの壁には穴が開きしゃがんでいなければ額に直撃していただろう。短剣を2本持っていただけに意表を突かれた。

星辰力を脚部に集中させて間合いを詰めて短剣を振るう。能力を隠しておきたい以上、『瞬間移動』は使えない。ヴァルダとしても、すぐにも精神干渉を使いたいが理空の能力の本質が分かっていないため迂闊に使えない。今乗っ取っている身体のスペックが高いのが幸いだ。

だがそれでも、情報の有無は大きい。

「がっ!!?」

ヴァルダの左脇に直径数ミリの孔が空く。面ではなく線の『相互移動』。辛うじて心臓は避けたが深傷だ。理空はまたしても致命傷を与えられずに舌打ちしたくなるのを抑える。

ヴァルダは理空の能力を知らないし《ヴァルダⅡヴァオス》の能力が割れていることも知らない。一対一で勝つのは当たり前前だ。

再度脚部に星辰力を集中させて前に出ようとした瞬間、思わぬ妨害が入る。

「——待って、理空君!」

シルヴィアが斜め後ろから腰抱きついてくる。理空は脚を止め、シ

ルヴィアに細めた目を向ける。

「……………何のつもりだよ？」

「この人は……………ウルスラは私の探してる人なの！」

その一言で大方の察しがついた。《処刑刀》ラミナモルスかディルクの手によって誘拐か拉致かはたまた脅迫か——とにかく彼らの策謀の一つとして使われているというわけだ。

だが理空からすれば関係のないことだ。

「知るか。こいつはオレの敵だ」

「え……………」

自分の身に何が起ころうとも自己責任だ。こういう目に遭いたくないのなら、それ相応のやり方がいくらでもあったのだから。

シルヴィアが固まっている間に視線を戻してヴァルダに向けて数発発砲する。弾はそれぞれ心臓、額、首、鳩尾、両目へと飛んでいくがそれらをヴァルダは辛うじて躲したが体勢が悪い。格好の的である。

(こつちにだけ意識が向いてて助かったぜ)

思ったよりも苦戦せずに済んだ。《処刑刀》クラスかと警戒したが杞憂だったようだ。『相互移動』を行うために星辰力を練る。理空の周囲の万応素マナが吹き荒れる直前にまたしても妨害が入る。

「理空、ストップ！」

「……………今度はお前かよ」

綾斗が間に割って入って来る。さつきシルヴィアが入ってきたあたりから薄々察してはいたがいざやられるとさすがに苛立つ。

「いくらなんでもやりすぎだよ。そりゃあ向こうから襲ってきたわけだけどこれ以上は……………」

そういえば綾斗達にはヴァルダが《処刑刀》の仲間、つまり遥の一件に関わっていると伝えていなかった。それがこんな形で裏目に出るとは思っていなかった。

最も、伝えていたところでお人好しがこうしなかったとも思えないが。

「甘えんだよお前は。次邪魔したらお前ごとやるぞ」

銃口を向けるが引く気配がない。敵でなくともこういう時に厄介な人種だ。クローディアの方がよっぽど御しやすい。

「お前もだぞ、リユーネハイム」

身体をビクツと震わせるがすぐにシルヴィアもまた真つ直ぐな眼を向けてくる。これも綾斗と同じ人種だろう。

「……………何だ、仲間割れか？ならば我はそのうちに引かせてもらうぞ」

「別に仲間つてわけじゃ——！！？」

突然ヴァルダの首から黒い光が広がって3人に頭の中がかき乱されるような苦痛が襲いかかる。

（これが精神干渉か……………！！『相互移動』の発動が遅れちまった……………！）

「殺すとか言つといてテメエから逃げんのか」

「安い挑発だな」

流石に乗つてこない。純星煌式武装^{オーガルククス}だけあつて合理的だ。ここで仕掛けても返り討ちに遭うだけだ。止める手段は、ない。

頭の中の苦痛がなくなつたと気づいたころにはすでにヴァルダの姿はなかった。

（搜索は無理、か）

千載一遇のチャンスを逃してしまい思わず溜息がこぼれる。

「ね、ねえ理空君」

座り込んだシルヴィアに顔を向ける。

「何だよ」

「……………ウルスラのこと、殺すつもりだったの？」

「ああ」

問いに対するあまりにも端的で残酷な答え。

シルヴィア自身、理空に対してそこまで理想を抱いていたつもりはなかったが友人になれそうだと思つてた人間が自身の師を殺そうとするのをこの眼で見るのはやはりショックだった。

「で、でもさ殺すことはなかったでしょ、シルヴィの大切な人なんだ

し……」

「オレには関係ねえんだよ。綺麗事は通じる奴にだけ言つとけ」
「……っ」

本当にこの2人の言っていること、特に綾斗の言っていることは意味がわからない。

「それとさつきも言ったが、次オレの邪魔したら容赦しねえからな」
「———そこまでだ」

威嚇のつもりで剣先を2人に向けたところで背後から声がかかる。声で誰だかはすぐに分かった。間が悪いというかなんというか、欲を言えばもつと早く来てもらいたかった。

「ヘルガ・リンドヴァル警備隊長!?」

「初めまして、だな。雲崎君からおおよその事情は聞いている。急で済まないが話を聞かせてもらおう」

理空に一瞬鋭利な眼を向けてくるヘルガ。

仕方がないと言えば仕方がないのだが、これから長い取り調べが始まると考えると再び溜息をついた。

《時律の魔女》②

「……………」

「……………」

とつくに日も暮れ、辺りが暗くなっている時刻に警備隊本部のとある一室にヘルガと理空が机を挟んで向かい合っていた。

暗くなっているというのも、綾斗の封印解除状態があの後すぐに限界を迎えて気を失いその介抱やら何やらで時間を食ったのだ。介抱なんてする気は起きなかったがヘルガとシルヴィアがいた手前やるしかなく、綾斗が目を覚ますまで待機していなければならなかった。挙げ句の果てに取り調べの順番を最後に回されてしまい今に至る。

すでに綾斗とシルヴィアは帰宅している。ヘルガからは厳しい目を向けられており、内心やらかしたと少し後悔している。ヴァルダに關しては仕方ないまでもあの2人に剣を突きつけているところに来られたのがまずかった。ヘルガも気配を消していたのだろうが、周辺に人がいないか確認を怠ったのは理空のミスだ。

「…………… 一応弁明があるなら聞こう」

「弁明？何の？」

理空のすつとぼけにヘルガは眉を顰める。

「天霧君達に剣を突きつけていたことだ。在名祭祀書入りネームド・カルツしていないカリスト下位のレヴォルフの生徒がやるのは珍しくないしそこまで大きな問題ではないが序列四位の君がやったとなれば流石に軽視できない」

「突きつけていただけだ。本当に手を出す気でいたなら他にいくらでも手段はあったぞ？」

「やる意思があるか否かではない。実際に剣を突きつけていたのが問題なんだ」

まあこうなるだろう。どう考えても危険行為なのだから。

「…………… まあいい。この件に關しては不問としておく」

意外な処置に少し驚いてしまう。この件が一番重く見られると思っていた。それが顔に出ていたらしくヘルガは理由を続ける。

「天霧君もリユーネハイム君もその件に関しては特に何も言っていないからな。やられた側の人間が問題視していないのなら少なくとも今回は不問とする」

肩透かしを喰らった気分になるが安心は出来ない。ヘルガはこの件に関してとは言った。つまりまだ終わらない。

「むしろ今から話す方が本題だ」

「他に何かしたか？」

相変わらずのふてぶてしい態度だがその程度で冷静さを失うほどヘルガの経験値は低くない。

「以前話していたヴァルダと名乗った精神操作系能力者に対しての殺傷行為だ。これに関しては意思を確認するまでもないな？」

「ああ、殺そうとしたがそれがどうかしたか？」

「意図的な殺傷行為は星武憲章違反だ。知らないとは言わせない」

「あれくらい正当防衛と認めて欲しいんだがな。『死んでもらうぞ』と言われていたのを天霧達から聞かなかったか？」

「勿論聞いている。だが回避と防御に徹して私の到着を待つことも出来た筈だ。そうしていればあの2人が邪魔をすることもなかっただろう。ヴァルダの捕縛の成功確率も高かった」

結果論になってしまいがそれは否定できない。そもそも邪魔さえなければ理空があのだの2人に剣を突きつけることもヴァルダを逃すこともなかったかもしれないが所詮仮定の話だ。何事においても最優先されるのは結果だ。

今回残った結果は理空がヴァルダに対して殺傷行為をしたということ、ヴァルダを逃したこと、そして綾斗とシルヴィアに対して剣を突きつけたという3つのみだ。

「捕縛？オレは最初会った時に言ったよな？オレはあいつらを捕まえたいんじゃないやなくて排除したいんだ。勘違いするな」

結局、そこなのだ。

ヘルガは六花の治安を守るために犯罪者を捕まえようとしているのに対し、理空は敵となっている者をただ排除したいだけ。ヴァルダと《処刑刀》フミナモルスを共通の敵としているが、ヘルガと理空の目的は一致し

ていない。

「排除をするしても他にいくらでも手段があるだろう。今回のように過激なことを繰り返されては六花は無法地帯に成り果てる。簡単にそういうものは伝染するんだ」

「元々無法地帯だろうが。それにオレだって人殺しが趣味ってわけじゃない。正当防衛だつったろ。今回の相手はそんな甘いこと言ってもらえない」

「君がそこまでする必要はないだろう、と言っているんだ。正直に言えば、君の助力を得るのも内心気は進んではない」

「あんたのことはともかく、オレは警備隊は全く信用していないんだよ。『組織』ほど信用出来ないものはない」

「…あまり侮らないでもらおう。警備隊員は皆私が設定した試験を潜り抜けている。いずれ警備隊を担っていく存在でもあるんだ」

「いずれじゃなくて今の話をしろよ。だいたい、そういうあんたは今まで過激な方法を取らなかったのか？」

答えは否、である。警備隊長に就いてから数十年、凶悪犯や大事件だつて起きた。最たる例が『翡翠の黄昏』だろう。そういった事件に対処する際に過激な方法だつてとつた。

だが、ヘルガと理空では立場が違う。裏に精通していようと、理空も生徒の一人だ。理空からすれば知ったことじゃないのだろうが、警備隊がある大きな理由として六花の民衆の安全を守ることが挙げられる。まして生徒の手を汚させることをそうそう容認できるはずもないのだ。

(…これほど、とはな)

ヘルガは理空に出会う前から理空のことを注視していた。というのも、レヴォルフの生徒にしてはあまりにも問題がなさすぎたのだ。序列二位であるロドルフロートルフオは歓楽街最大級のマフィアのトップであるし、序列一位であるオーフェリアもデイルクの手駒となっているだけあって黒い噂は絶えない。ここまで極端でなくとも、街での乱闘や他学園の生徒の襲撃すらも一件も見つからなかった。

だからこそきな臭かった。実際に会ってみれば問題がないなんて

とんでもない。十数歳とは思えない眼をしており、危険性も感じていた。だが、これほど逸脱しているとは思っていなかった。

狂気による非人道的行動をしている人間の方がまだマシだ。狂気による行動ならば地雷さえ踏まなければ最悪は免れる。しかし理空は理性で非人道的行動をしているのだ。簡単に命を絶つことのできる能力を持った上で、だ。核爆弾に遠隔爆破機能がついているようなものだ。

「これ以上は水掛け論になるだけだ。終わりにしないか？」

「…………… そうだな」

ヘルガも大人しく引き下がる。理空を説得するのは少なくとも現時点では不可能だ。

「そうそう、ヴァルダの件なんだが」

しれっと話題を切り替えてくる。しかもどうでもいい話題ではないのがタチが悪い。

「具体的な能力までは分からなかったな。頭の中がかき乱された。奴自身のスペックは序列一位クラスだが、あんたと一対一をすれば確実にあんたが勝てるレベルだ」

残念ながら、精神干渉云々では綾斗とシルヴィアから聞いた情報とほとんど差異はなかった。

「以前闘った《ラミナモルス処刑刀》に比べると劣るな。あいつはまだまだ実力の底は見えない」

「…………… そうか」

「まあどっちみちオレが向こうの立場だったらあんたと戦うのは避けるけどな」

当然の話だ。わざわざリスクを冒してまでヘルガとやる理由などどこにもない。ヴァルダを二度も窮地に追いやっている以上、理空に仕掛ける可能性も薄い。それだけに、あの場で仕留め損ねたのは悔やまれる。今更言っても仕方がないが、あの2人ごとやる覚悟で『相互移動』を発動すべきだった。今後は《セルベレスタ黒炉の魔剣》の使い手と世界の歌姫といえど、切り捨てる選択肢も浮かべておくべきだろう。

「もう帰っていいか？多分もう伝えることはない」

「ああ、構わない。だがその前に言っておくことがある。――

先程も言ったように君の取る手段には賛成しかねる」

はいはい、と言いきうようになるが堪えて部屋の扉の方へ立って歩く。

「それともう一つ」

その一言で扉の前で足を止める。

「私は君のことを調べている」

わざわざそれをバラす意味はない。要するに、『完全には信用していないぞ』という警告だろう。理空とて他人のことをそう簡単に信用しない。ヘルガのこともある程度は信用を置いているものの、完全には至っていない。状況的に裏切られることはないとは思いますが、裏切らないからといって理空にとつて不利益なことをしないとは限らない。「で？何か出てきたのか？」

「いや、何も」

「でも何かはあるはず、って顔だな」

「……………」

「まあ調べるだけ調べるんだな」

扉を開けて外に出る。二人警備隊員が立っていた。理空にはあまり視線を向けてこない。ありがたい。今、理空の頭はヴァルダと《処刑刀》の件とヘルガへの警戒でいっぱいなのだ。

ヘルガの方は脅威とはなっていないが障害にはなり得る。敵に回さないに越したことはない。ヘルガも自分を説得しようとするとは思わなかった。ヘルガは綾斗と違い現実を知った上でそうしている。思わず他人事のようになって眩く。

「……………ブレねえんだろうな、お互いに」

*

現実というものは勝手に消えてはくれないものだ、というのを再度実感させられた。

今まで自分にできることはしてきたつもりだ。星^{シヤ}獵^ナ警^ガ備^ル隊^ムを設立し、優秀で誠実な人員を集め、六花の治安を守ってきたし難事件やテロだって解決してきた。

それでも尚、ああいう子供が作られてしまう。

勿論、全ての人間を救えるなんて大それたことは思っていない。だが、すんなりと受け入れられるものでもない。

「警備隊長、大丈夫ですか？」

「ん？何がだ？」

「いえ、何か思い詰めたような顔をしてらしたので……」

一緒に職務をしていた隊員に指摘され少しドキリとしてしまう。顔にまで出ていたということは相当だったのだろう。

「気のせいだ、心配するな」

「そうでしたか」

「ああ、早く片付けよう」

半分嘘である。少し、疲れたのかもしれない。

それでも。この因果な世界においても。自らの『義』を捨てる、という選択肢は浮かんでこなかった。

《万有天羅》

—— どうしてこうなってしまったのだろうか。ヴァルダとの交戦から月日が流れたとはいえ、無警戒になっていたというわけではなかった。だが、過去最大の危機を迎えることになってしまった。目の前には一見無邪気な目をしていてその実、とんでもなく獰猛な雰囲気を出した童女が立っていた。

*

ことは数分前に遡る。

ロートリフト 歓楽街のカジノに行くために再開発エリアを通るためにいつも使っているルートを通っていたら突然発生した光が包み込んできた。『瞬間移動』を発動しても何故か全く景色は変わらず、同時に強烈な悪寒を感じさせられた。

(おいおいおいおい……！こんなバカでかい気配、それこそオーフェリアクラス……！)

この気配に覚えはある。先日行われたグラン・コロッセオで感じたものだ。直接見たことはないがおそらく彼女のものだろうと推測していた。

(いやだしたらヤバいだろこれ——！)

脱出ルートを探すが、どこを見ても光、光、光。できるだけ上空に移動してみても景色は変わらず自然落下するだけ。大きな気配がどんどん近づいてくる。

(あ、これももう無理だ)

光がさらに強まり思わず眼を閉じてしまう。しばらくして眼を開けると、広い草原に大きな岩があちらこちらに生えており崖と見間違える大きさのものもあった。

先ほど感じ取った大きな気配を感じる方向に顔を向けると、10歳程の童女がこちらに歩いてきていた。

そして現在に至る。

*

「ほっほっほー！初めましてじゃの。雲崎理空」

普段であれば適当な返事ができただろうが、そんなことをする気も起きないほど理空の気分は下降していた。

「……………《万有天羅》、ファン・シメル范星露、だな？」

「いかにも儂が范星露じゃ」

———《万有天羅》 范星露。

六歳の頃ジェロン界龍第七学院の序列一位の座につき、以降三年以上キープし続けている。

それだけならばまだしも、『何でもあり』と言われる《万有天羅》の称号を継いでいるというのがさらに異常だ。そもそも先代である二代目の《万有天羅》は史上初全ての《フェスタ星武祭》を制覇した人間だ。称号を継ぐにはある特殊な資格が必要と聞いたことがあるが……………。

(まあ総じてヤバすぎる存在ってことか)

こうして向かい合っているだけでも感じる。オーフェリアと同じく無限ともいえるプラーナ星辰力量。

恐らく唯一正面からオーフェリアと互角に戦える、いや、オーフェリアの場合身体に負荷がかかりすぎることを考えるとアスタリスク最強は目の前にいるこの童女だろう。

「どうやってオレをここに引きずり込んだ？」

「縮地術の応用じゃな。汝等の言葉で言うならば瞬間移動じゃ」

いきなりお株を奪われた気分だ。本当に気分が悪くなってくる。いや、気分が悪くなってくるのはそれだけが原因ではない。《万有天羅》は代々相当な戦闘狂と聞いている。この異空間(?)はほとんどなく広い。そんな場所にわざわざ引きずり込んできたということ……………。

「いやはや…元の場所で人を待っておったんじゃが早く来すぎての

う。このまま待つのも退屈じゃからおぬしをここへ連れてきたというわけじゃ」

「お前には形式上とはいえ界龍との約定があるんじゃないのか？」

「ふむん？ぬしはレヴォルフの諜報工作員かえ？」

「さあ、どうだか」

自分の情報を無闇に明かす趣味はない。理空の情報は漏れていないとは思うが星露の情報も全く出回っていない。まずは出方を伺う。「ほっほっほ！面白いのう。儂を相手に腹の探り合いか！じゃが一つ訂正をしておこう。あの約定は儂の行動を縛るものではない。あくまで儂が譲ってやっておるだけじゃ。儂が本当に事を成そうとすれば誰であろうと止める事はできん。それは統合企業財体であっても例外ではない……………それに儂はぬしに前々から興味があったから

のう」

なるほど、よくわかった。

「やはりよく鍛えられておる。今からでも界龍に来んか？」

よく、わかった。現状、駆け引きをしても意味のないことが。

「——もういいよ」

「む？」

キラキラと輝かせていた星露の目がキョトンと丸くなる。

…………… 要するに、ただオレと戦いたいだけだろ？」

星露はただ自分の趣味のためだけに生きている存在。損得勘定をしてくれないのならば、懐柔する手立てがない。

「…………… ほう」

星露の雰囲気から幼さが消える。

「話が早くて助かるのう」

「とつとつここから出たいんだよ」

「それは困るのう。できるだけ長く楽しみたい」

「オレはちつとも楽しくねえよ。お前ら戦闘狂と一緒にすんな」

口を上手く動かせてはいるが、正直背筋が凍っている。力の大きさはオーフェリアと互角。感じるプレッシャーだけならばそれ以上だ。この差は戦いに対して気合いが入っているか否かだろう。

恐らくあと数秒もすれば仕掛けてくる。この際能力が割れてもいい。先手必勝だ。

「むっ……！！」

僅かな血が飛び散る。星露の右腕から出たものだ。この化け物にも赤い血が流れていたのかと感心している場合ではない。

（……初見でほぼノーダメージかよ。しかも今回は数力所仕掛けたつてのに……！！）

ほんの少し身体がブレていつの間にか数メートル遠くまで後ろに下がっていた。理空が使う『瞬間移動』と同じ類のものではない。単純な速度だ。

これは相当に不味い状況だ。とつと逃げたいが異空間のせいで出来ない。『相互移動』は動きが速い人間に相性が悪い。座標に設定するという性質上設定した場所からズレると当たらない。いや、動きが速いだけならまだいい。その速度に合わせた設定をすればいいだけなのだから。だが星露の場合それ以上に反応速度が厄介だ。初見で『相互移動』をほぼ無傷で凌がれたということはこれ以降、かすらせることすら難しくなってくる。しかも《万有天羅》は近接戦闘を好むという話を聞いた事がある。

最強クラスの實力に加えて相性も最悪。この時点でかなり絶望的だ。遠距離タイプのオーフェアの方が全然やりやすい。

「ほっほっほ！久方ぶりじゃぞ！血を流したのは！」

もう興奮状態に入っているらしいが理空はかなり気が滅入っている。初見でヴァルダにすら致命傷を与えることができなかったのだからそれは最初から諦めていたが、薄皮一枚程度しか削れないのはや来るものがある。

星露が何か呟くと無数の火球が出現する。ユリスとは比較にならない数だ。『相互移動』でまとめて飛ばして視界をクリアにすると意外な光景が目に入る。星露が一步も動いていなかったのだ。まるで何かを見定めるかのようにこちらを見ている。

「ふむ……… 微妙じゃが火球が炸裂した音が聞こえるのう。ぬしの能力、『消失』ではなく空間転移の一種じゃな。良い能力じゃ」

たった二回で見抜かれた。異空間を警戒して普段より距離を短くしたのが裏目に出た。それでも10キロ以上は飛ばしたはずなのにそれが聞こえるのは驚きだ。

（…とか考えてたらきりがないんだろうな）

この異空間といい、身体能力といい、《魔女》^{ストレガ}や《魔術師》^{ダンテ}のような能力（恐らくは星仙術を極めたもの）を平然と使ってくることといい、『何でもあり』という噂は強ち間違いではない。認めるべきだ。あらゆる非常識が本人の中では常識である過去最高の難敵だ。

まあ良い。バレたらバレたなりの戦い方がある。

気を取り直して今度はこちらから仕掛ける。星辰力を脚部に集中させて高速機動で間合いを詰めて蹴りを放つ。星露はそれを綺麗にいなしながら宙を舞う。立て続けに拳を数発放ち最後の一発が当たったと思ったら、突然星露が陽炎のように揺らめき消える。気配を探り上空を見上げると複数人の星露が向かってくる。《鳳凰星武祭》^{フェニックス}で界龍の双子が使っていたものと同じだ。本物を冷静に見極め蹴りを側面から受け止めると、地面がクレーター状に凹み理空の身体も軋む。何とか踏ん張って再度拳を放ち今度はいなされなかったが星露はまるで意に介していない。というかこちらの拳が痺れている。

「ほほ。楽しいのう。じゃがそれでは儂は倒せぬぞ？」

「余計なお世話だ。それとオレは楽しくねえ」

しかし星露の言っていることも事実だった。ユリスの最大火力程度であれば星辰力だけで防げるレベルの人間にただの拳を放ったところで効果はない。

『瞬間移動』を使って近くの岩陰に隠れる。向かって来られる前にとあるものを手の中に握る。星露が目の前に来ると同時に先ほどのような格闘戦が始まる。拳を躲されたタイミングで『指定移動』を発動する。コホッと星露が血を吐く。移動したのは岩の欠片だ。岩陰に隠れた時に削ったのだ。多少ずれたが胴体のどこかには埋まっただろう。

追撃を仕掛けようとした瞬間に悪寒を感じ下がる。星露は俯いて表情は読めない。

「ほほ…… ほっほっほ！これほどとはもう！滾る！滾るぞ！」

「…… やっぱ頭おかしいなお前」

体の中に石ころを埋められて喜ぶのは最早戦闘狂の域を超えてマゾヒストではないだろうか。

そんなことを考えられるくらいにはまだ余裕があるわけだが内心冷や汗をかいていた。最初に『相互移動』を躲した際の星露の動きはまるで捉えられなかった。あれを回避ではなく攻撃に使われたらたまったものではない。

だからこそ今の攻撃でダメージを与えて機動力を落としたかったのだがこの様子を見る限りでは期待できない。

「では次はこちらから行くぞ！」

(消えっ——！?!?下か！)

星露の左拳が右脇腹に入る。咄嗟に星辰力を集めるも衝撃で数メートル吹っ飛ぶが即座に『瞬間移動』で間合いを詰め拳を振り下ろす。それをいなされ、再び攻撃が来る前に『瞬間移動』で退がった。

「ゴポッ」

胃液と血が混じったものの味を感じ吐き出す。集中星辰力で守ってなおこのダメージ。何発も食らっていられない。『瞬間移動』で数キロは離れたいところだが移動した座標に岩があると生き埋めになってしまうためできない。

再度星露が仕掛けてくる。目は慣れてきたものの、対抗できるレベルではない。

「ぐっ、う」

星露の波状攻撃に対応しきれない。どうにか急所は外しているがみるみるダメージが蓄積されていく。あつという間に形勢逆転してしまった。こちらも何回か攻撃を繰り出したが全て有効打にはならなかった。

額からは流血、右腕の骨にはヒビがはいり肋も三本ほど逝っている。何より星辰力の消費が激しかった。元々かなり少ないほうなの

に星露の攻撃を防ぎ続けていればあつという間に減ってしまうのは自明の理だった。

『相互移動』を発動しようとするのと一瞬でその座標から動いてしまおう。発動する際の星辰力の流れや力の入れ具合を読まれているのだろう。それに加えてハイテンション状態になりながらも『指定移動』と『相互移動』への警戒を全く怠つてくれない。ロドルフォの能力と同様、この二つは強弱など関係がない問答無用の力なのだから当然といえは当然だ。意外にも理性は存在するらしい。

一方で理空の拳や蹴りに対しては、たとえ流星闘技メテオアーツのように星辰力を纏っていたとしても避けようとしてもしない場合がある。単純に効かないのと戦い自体を楽しむ目的があるからだろう。

そこに付け入る隙がある。本気で星露が殺しに来ればとつくに決着はついているだろうが、そうではない。

目も大分慣れてきた。星露の攻撃をどうにか捌き星辰力を纏った右拳を繰り出す。例のごとく避けようとしめない。

当たる直前に指を伸ばして拳に纏っていた星辰力を人差し指の先に集める。

ドツという音と共に星露の体がのけ反る。制服の左肩の部分に穴が開き、少し血が垂れている。

ますます星露は笑みを濃くする。

「考えたのう。じゃが儂は《万有天羅》。その程度ならば何の問題にもならぬ」

このままではジリ貧だ。『瞬間移動』でその場から離れる。今の指先一点に星辰力を集める攻撃はそう何回も使えない。馬鹿正直に受けてはくれないだろうし、指先以外は無防備になってしまうため頑丈すぎる星露の身体を突くと簡単に指の骨が折れてしまうのだ。攻撃に使った右手の人差し指はおかしな方向に曲がっている。

手札を整理しよう。星露に通用しうる攻撃は三つ。

① 全星辰力を指先に集めた一撃

② 『指定移動』で星露の体内の血液等を飛ばす

③ 『相互移動』の斬撃

①：全星辰力を指先に集める時間が必要。仮にそれを作れたとしても星露に当てなければならぬ。こちらの体術の癖や性質がすでに掴まれている↓却下。

②：星露に直接触れなければならぬ上に、何を移動するかを選択している間に潰される。↓論外

この時点で消去法で③しかない。③を成功させる方法を考える。ただ使っても躲されるだけ。動きを止める必要がある。捕らえられればベスト。捕らえる為になにをすべきか。

地面を削って檻を作るか？いや、一瞬で壊されるのが目に見える。理空は純星煌式オーガルクラス武装持ちではないし、ワイヤー等の小道具も今は持っていない。カウンターで使っても躲されるだけ。

(この方法しかない、か)

手はある。一番最初に思いついた最も単純で手っ取り早い方法が。しかも高確率で捕らえる事ができる。だがはつきり言ってやりたくない。ひどく気が進まないのだ。こんな脳筋な方法。しかしこれ以外に思いつかないのだから仕方がない。

『瞬間移動』を駆使し逃げ回るふりをしながら最初の場所まで戻る。
(…………… あった)

この草原の中でも一番大きい岩。崖と見間違えそうなほどだ。それに背中を預け、正面から見据える。それを見た星露は訝しげな表情を一瞬浮かべながらも虚空を蹴って突進してくる。

普通ならカウンターが成立するタイミングで両腕目掛けて『相互移動』を仕掛けるが当然のように当たらない。カウンターを仕掛けにいったため、今の理空の防御は不完全だ。

やや落胆したような星露の顔が脳に焼きつく。

——星露の右拳が理空の鳩尾に叩き込まれた。

《万有天羅》②

嫌な音が聞こえる。

自分の身体が壊されていくのを感じる。

生暖かくて赤い液体が口いっぱい広が

り外へ溢れる。

だが、これでいい。

鳩尾にめり込む右手の手首を左手で掴むと同時に手首の関節を極める。

星露の目が大きく見開く。自分の手の感触に気がついたのだろう。理空の狙いにも。

渾身の拳を相手に叩き込んだ直後は必ず動きが止まる。その瞬間を捕らえるために拳が叩き込まれる直前、理空は残り星辰力の大半を鳩尾に集めた。いかに急所といえど、強大な星露の一撃といえど、これで即戦闘不能は避けられる。残りの星辰力の八割は鳩尾に、二割弱は手首を掴む左手につき込んだ。もうほとんど空だが『相互移動』1回分の星辰力はある。

『相互移動』発動。狙いは左肩から左足。身体ごと心臓を真っ二つにしにいく。万応素が吹き荒れると同時に鈍い音が鳴る。

しかし。

「……………惜しかったのう」

一メートル程星露が後退している。制服が裂けた左肩から腹まで血が流れているが浅い。手首の骨を自分で折って脱出したようだ。

そして、もう理空には星辰力がない。《ジェネステラ星脈世代》は星辰力が尽きる
と休眠状態に入り回復を待つ。

だが例外もある。

星辰力の総量が乏しい者の中でも稀に働く逆のメカニズムが。理
空はその特異体質を使いこなせる。

相手の星辰力が空になるのを目の前で見て警戒が緩む瞬間。

(……………これを待ってたんだよ！)

星辰力の超回復。当然、能力が使える。

「これは……………!?？」

「死、ねッ！」

鮮血と肉片が飛び散る。『相互移動』で削られたものだ。かなり近
い座標にしたためだろう。

(どっちだ……………?)

斃せたか、否か。これで斃せなかった時のことは考えていない。

制服の左半分が赤く染まった星露の身体が仰け反りそのまま倒れ、
なかった。

一瞬頭が真っ白になる。それでも斃しきれなかったのか、と。相当
な深傷のようだがそんなこと理空には関係がない。

星露がゆったりとこちらへ歩いてくる。途中で右手を拳に変える。

すぐに頭を切り替える。腕を上げたいが力が入らない。ゆつくり
と小さな拳が向かってくる。

コツン、と顎が揺れた直後に膝が崩れ落ちる。普段であれば多少足
の力が抜ける程度のものだが、今の理空が倒れるには充分なものだ。

そのまま仰向けに倒れた。敗北、である。

ここからもし星露が自分にトドメを刺そうとしたとしても何もで
きない。何せもう会話もままならないのだから。

目の前の化け物の気まぐれ次第でいまから死ぬことになる。だと
いうのに精神が落ち着いている自分に驚く。

結局、自分は死にたいわけでも生きたいわけでもない、ということだ。

「いやはや……随分と無茶をするのう」

興奮しているのかと思いきや意外にもかなり真面目な表情だ。やれやれ、とでも言いたげな気がする。化け物星露もこういう顔をもっているらしい。なにかを憂いているようにも見えた。

「先日、同じ体質を持った者と手合わせしていなかったら最後の一撃は決まっていたかもしれんのか」

この体質を持つ人間はかなり珍しい。十中八九美奈兎だろう。どういいうつながりかは全くわからないが知り合っているらしい。そういえばルサルカとの勝負はどうなったのだろうか。

「ぬしのその体質は使えば使うほど命を削っていくものじゃぞ？」
（……… だろうな）

予想はついていた。何度も何度も試行錯誤しているうちに何らかの副作用があるのではないかと。ヒルダの見解とも一致している。だが、どのみちもう遅い。既に数え切れないほどのこの体質を使っているのだから。

「ふむ。知っておったという顔じゃな。これほど儂を追い詰めたこと
といい……… ますます面白い。ぬしに稽古をつけるのも吝かではないと思っておるほどじゃ」

「……………」

「むう……………」

口にはしていないが迷惑そうな視線と表情が答えだ。

そんなもの最初から願い下げだ。強くなろうとしてしているわけでもなりたいたいわけでもない。何より強くなりきつてから喰らおうという考えが見え見えだ。この化け物とは関わりたくない。今回ここまで善戦できたのも理空の能力や戦い方が知られていなかったからだ。

「ぬしと体術で対抗できるのも儂の弟子の中では暁シヤオフエイ彗だけなのじゃがのう…………… では、一つだけ助言をやろう。思考に拘りすぎて想像

の幅を狭めぬ方がよいぞ」

「……？」

何のことか見当がつきそうでつかない。こんなことをわざわざ言う意図もわからないが、先程みせた表情などを見てもただ単に強い者と闘いたいだけでもなさそうだった。

一種の悟りすら感じる。見た目は完全に童女だが。

言うことを言って気が済んだのか、星露は異空間を解除する。視界に映る明るい空(?)が暗い景色へと変わっていく。理空が元いた場所ではない。再開発エリアの廃ビルの中だ。具体的な位置まではわからない。

(…いや、どうだよいい)

視界が廃ビルの天井で埋まるのを最後に理空の意識が暗転した。

*

見事。

目の前で気を失った人間を素直に賞賛した。

ここまで追い詰められたのはこの六花来て以来初めてだ。

千年以上の経験の中で理空以上の逸材がいなかったかと言われるばそうではない。現に今の六花にもオーフェアやヘルガがいるのだから。

玉か石かと言われれば玉だ。しかし理空の能力はオーフェアほど強大なものではないし、理空自身は星露のように最強ではない。

それでも正面戦闘に拘らずに捌め手を上手く使えば最強をも喰らい得る奇石のような一面もある。本人はもう通用しない思っているようだが仮にまた自分が理空を襲っても何らかの手は打ってくるだろう。少なくとも例の空間転移を繰り返し使用されたら梃子擗ることは間違いない。

みっちり修行をつけたいが残念ながらヘルガ同様嫌われてしまったらしい。

もうしばらくこの余韻に浸っていたいが知人との約束の時間が来ている。理空を治療院へ飛ばしてこの傷を幻影で覆い隠す。

見慣れた赤い髪に兎の耳のような形のカチューシャをした少女が現れる。

「ゴメン星露ちゃん、少し遅れちゃって……」

「もう、美奈兎さん！置いていかないでくださいまし！」

「まあまあ。ソフィア先輩落ち着いて」

「おお、ようやく来たかえ。汝等」

チーム赫夜のメンバーも続いて来る。

この奇石達も着々と力をつけてきている。才能が開花する瞬間というものは何度見ても面白い。

「むう………」

不覚にも頬が緩みかけてしまう。あの逸材奇石の才が開花するのを見てみたい。恐らくそれが見ていられる時間はそう長くはないだろうが、星露にとっては早いか遅いかの違いでしかない。

自分は常に置いていかれる側。そんなことはとつくに受け入れているのだから。

ヤン・コルベル

真っ白な天井。目を開けて最初に映ったものだ。周りを見渡せばローボードの上に小さめのテレビとベッドが一つがあるだけの殺風景な部屋。そのベッドの上で理空が仰向けで寝ている状態だった。どうやら治療院の病室にいるらしい。あれだけやられた身体も傷一つないどころか痛みもない。どれだけ経ったかはわからないが治療能力者によるものだろう。

(…こりや治療費と入院費が嵩むな)

金を稼ぐつもりで外出したつもりが金を消費するきつかけを作っているというのはなかなか笑えない。

——— 想像の幅を広げろ。

星露の言葉を反芻する。癩^{ラミナモルス}だが聞き入れるが吉だろう。今の自分ではヴァルダはともかく《処刑刀》は退けられない。

まだ自分の能力を引き出しきれしていない、ということか。

「ん？目を覚ましていたか」

いきなり病室の扉が開き眼鏡をかけ頭がほとんど禿げ上がった偏屈そうな老人が入ってくる。

「……初めまして、ヤン・コルベル。何しに来た？」

アスタリスク治療院の最高責任者にして世界最高の医師。それほどの存在がわざわざ様子を見に来たということは痛みがないだけで何らかの後遺症が残るほどの重症なのだろうか。

「案ずるな。別におまえの怪我についてはもう心配いらん。見つけたときは瀕死に近かったがな」

「どこでオレを見つけた？」

「……？見つけるも何も治療院の入り口付近で倒れていたわい。むしろ聞きたいのはこっちじゃがな。あそこで倒れていたのもそうだがあれほどの傷をどうやったら負うのかが不思議で仕方がない」

確実に星露の仕業だろう。どうせなら中まで運んで事情まで説明してもらいたかった。

「まあいいわい。怪我よりも不可解な点があったからな。…星^{ブラーナ}辰力の回復が早すぎる。星辰力を使い切ったにも関わらずたった数時間で目を覚ます実例がまた出るとは……………」

「また？」

「数ヶ月前に同じような嬢ちゃんが入院していたぞ。最近の若者はすぐに無茶をする。こっちの身が持たんわい」

また美奈兎か。

「少しデータをとらせてもらおう。もう一日二日泊まっていくがいい」

ヒルダをもつてしてもかなりの時間をかけて調べた体質だ。データを取ったところで大して変わらないとは思うが特段断る理由はない。

「それと、警備隊長が一回来ていたぞ」

ヘルガ？何か進展でもあったのだろうか。ポケットから端末を取り出そうとして今は病衣を着ていることに気がつく。

「そういや、オレの端末は……………」

「粉々になってポケットに入っておったぞ。一応保管はしてあるがどうする？」

「…いや、いい。処分しといてくれ。」

当たり前といえば当たり前だ。あれほど激しい戦いをしたというのに無事なはずがない。

いずれヘルガも来るだろうが情報は早く取得しておきたい。

「警備隊長と通信させてもらえるか？」

「む、まあいいだろう」

ポケットから端末を取り出し、空間ウィンドウを開く。音声通信だ。がすぐにつながった。

「よう、警備隊長殿？」

『……………雲崎君か？もう目覚めたのか？星辰力が切れていたと聞いているが……………』

「その話は後にしろ。何か用があったんじゃないのか」

『ああ、その通りだ。通信で言えるようなものではない。今すぐにそちらへ向かうから待っていてくれ』

通信が切れる。どうやら、休息もろくに与らせてくれないらしい。

*

「すまない、待ったか？」

「10分ぐらいな」

そこは『別に待ってない』と言うべき場面なのだが、理空はそういう人間だともう充分知っているので特に気にしない。

「オレが寝てる間に一回来たのは本当か？」

「電話もメールも繋がらなかったからな。君はいつもすぐに反応するだろう。何かあったのかと思って搜索能力をもった能力者に探してもらったんだよ。治療院前と聞いた時は耳を疑ったがね。君を治療院送りにできる人間はそう多くないと思っていたが……。」

事実その通りだ。勝ち目が薄いとわかれば『瞬間移動』で適当な場所に逃げればいいのだから。異空間なんてものを展開されでもしなければ今回も確実にそうしていた。それを加味すれば理空を単体でここまで追い込める人間はこの六花にも精々片手の指で足りる程度だろう。

「《万有天羅》と少しな」

「……《万有天羅》だと？」

「前々から目をつけてたそうさ。遭遇したのは偶然だと思うけどな」

「あまり関わらないことを薦める。あれは別種の存在だ」

「分かっている」

向こうが勝手に絡んできただけだ。自分から関わる気など毛頭ない。

「それで、何の用だったんだよ。急を要するものだったのか？」

「ああ、見てもらいたいものがある」

「今からか？」

すでに日も沈み辺りはすっかり暗くなっている。

「ああ。急いでくれ。あまり時間は取れない。ああ、着替える必要はないぞ」

「……………」

色々と聞きたいことがあるが後にしよう。病衣でいける場所なんてそうそうないし、それにどこかヘルガの機嫌が悪そうだ。

(院長室……………?)

「ふん、来たか」

ヤンが座って待っていた。空間ウィンドウが開き操作をすると扉が開き通路が見える。明らかに普通の場所ではないことがわかる。

「ついてきてくれ」

ヘルガの声に従い進む。途中途中で患者が目に入る。どうやら表に出せないような人物が大怪我を負った際に運ばれる場所らしい。道理でヘルガの機嫌が悪いわけだ。警備隊としては非常に不本意な事実だろう。

ヤンが足を止めると同時にとある方向を向く。つられて理空も見る。

思わず息を呑んでしまった。

カプセルの中で死人のように眠っている女性。紫色の髪。どこことなく綾斗と似た雰囲気を持っている。

眼鏡はつけていないが見間違うはずがない。あの時《処刑刀》に斬られた人間。天霧遙だ。

「これをオレに見せて良かったのか？」

「ああ、申請が受理されたからな」

「何のために見せた？」

「君の記録映像には他者の能力を消滅させるものがあつたからな」

その一言で察した。奇しくも綾斗とヘルガは同じ発想に至つたらしい。

「単刀直入に聞こう。君の能力でこれを解くことは可能か？」

「…………… 不可能じゃないだろうな。けど少なくとも今はやる気が起きない」

綾斗達にも言ったことだがリスクが大き過ぎる。下手に『移動』させようとすると能力が暴走して遥の命を断つかもされない。こんな重労働をした上に何のリターンも帰ってこないのは御免だ。よしんば成功したとしても《処刑刀》が何をしてくるか全く読めない。少なくとも《赤霞の魔剣》ラクシャールナーダによる保険はかけられているだろう。情報を遥から聞くだけ聞いて見捨てるという考えも浮かんだが聞く前に殺されては元も子もない。やはりヒルダにやらせるのが一番だろう。《獅鷲星武祭》グッリプスで優勝出来たとなればその時は綾斗の封印もおそらく全て解除されているだろう。それでも《処刑刀》に勝てるとは思えないが多少は抵抗できる。

「… 何か考えがあるんだな？」

「ああ」

「まさかまた——」

「その類のものじゃない」

「… そうか」

納得、とまでは行かないまでも受け入れてはもらえたらしい。

「見つかった時期は？」

「冬季休業の時だ」

「いくらなんでも早すぎないか？」

ヘルガは痛いところを突かれたのか、苦虫を噛み締めたような表情になる。

「ああ、天霧君には悪いが早く見つかりすぎて悔しく思ったくらいだ。《蝕武祭》エクリプスを始めとした統合企業財体が隠蔽した情報を手にいれるチャンスだったからね」

「搜索ポイントを指定してきたのはマディアス・メサだったよな？」

「ああ…………… 君も同じ考えか？」

「どこまで関わってるかは知らんが元々あいつから胡散臭さは感じていた」

《処刑刀》の正体の有力候補にはなる、というかほぼ理空の中では確定している。辻褃が合ってしまうのだ。《ヴァルダⅡヴァオス》の能力を使ってまで正体を隠さなければならぬほど有名で尚且つあれほどの戦闘能力を有している人物。

——何より《星武祭》^{フェスタ}の開会式か閉会式でしか見ないがそれだけでも感じ取ることができるあの温厚そうな笑みの下に隠れたドス黒い『何か』。

しかしそうなると目的が尚更見えてこなくなってくる。もしマディアスが《処刑刀》なら理空がこの場に入る許可を与えるメリットはないはずだ。

理空の方にもあまりメリットはないが、それにしても手間を考えたらやる意味はない気がする。

「お喋りなら余所でやつとくれ」

ヤンがぶつきらぼうな声を浴びせてくる。だがまだこの老人には聞きたいことがある。

「一つ聞きたいんだけどよ」

「なんだ」

「あんた、なんでこの女の治療を続けてるんだ？誰かに依頼されたのか？」

この返答次第じゃヤンも怪しくなってくる。

「前《星武祭》^{フェスタ}委員長にな」

「？もう死んでるだろ。やる義理ないんじゃないのか？」

「そこまで落ちぶれとらんわ。ダニロが死のうとも契約自体はまだ生きとる」

（いや、生きてねえと思うけど……）

自分ルールというやつか、はたまた良心がそうさせているのか。どちらにせよ、・理空の懸念は杞憂のようだ。

今理空がすべきことはマディアス・メサという人間を捕らえることだ。それは尻尾の先すら全く見えない胡散臭いでは済まないであろう人物を掴まなければならぬということとてつもなく大きい難関に直面しているということを再認識した。

《獅鷲星武祭》編 舞台裏の陰謀

《獅鷲星武祭》開会式当日。本来行く必要もないイベントだが、マディアスをこの目で見ると見るためには足を運ばざるを得ない。すでにマディアスによる演説が行われている。

出場チームを見るとチーム・赫夜の名前もあった。驚いたことにルサルカに勝つたらしい。あの短期間ではいくらなんでも無理があると思っていたが、想像以上の成長率を持っていたらしい。

シリウスドームの観客席に座りステージを見下ろすと大型改修により最早別物に変わっていた。噂では次の《王竜星武祭》に統合企業財体の最高幹部が来るという話がある。そこまでこぎつけさせたのもマディアスだとか。

その辺りの裏事情を考慮すると今回のマディアスの演説は詭弁にしか聞こえない。綾斗も同じなのか、《鳳凰星武祭》の時以上に冷静だ。

マディアスと一瞬目が合ったような気がした。その人の良さそうな顔の裏には自分と同じような空虚さが垣間見える。やはり胡散臭くてしょうがない。何かへ向かって今の立場を確立し、それを最大限利用しているように感じられる。少なくとも他人に尽くすタイプには見えないのだ。

(何を企んでいる？マディアス・メサ)

*

観客席の最上段に座っている紺髪の少年を見据える。やはり、私たちの計画に引き込めるとは思えない人材だ。かつての自分にそっくりだ。

他人のことをどうでもよく思い、物事や人物を害か無害で判断する。

かつて自身が二代目《万有天羅》に指摘された鬼気の欠如。

自分と似たような生を送って来たとするなら無理もないだろう、と思う。自分とて自身が唯一愛した人間が消されなければその身に宿すことはなかったのだから。

とはいえ、打算を優先するのであれば引き込む事はできなくとも手を引かせる事は可能かもしれないと考えたところで一旦頭の中にストップをかける。

今は演説中だ。一点を見続けるのは不味い。

この演説を終えたら自分の同志達とともに検討をすればいい話だ。同志の一人は二度にわたって深手を負わされているのだ。これ以上刺激するのも得策ではないだろう。

男は自身の野望の実現のために頭を回転させ続けるのであった。

*

理空は久しぶりに面食らっていた。チーム・エンフィールドは危なげなく一回戦を突破した。ここまではいい。問題なのはその後だ。試合後の取材でクロードディアが自分の願いを暴露してしまった。しかも銀河の最大級の汚点であるあの教授と面会するという内容をだ。間違いなく銀河が動く。こんな何の生産性もない行動をとった人間が空間ウィンドウに映し出されていて、理空はその人間を細めた目で見据えていた。

「お前は一体なにを企んでるんだ？」

『ふふっ。あのタイミングが最善だと判断したまでですよ』

こうして通信が出来ている以上襲われてはいないようだが時間の問題だろう。

『ですがこれ以降通信は控えた方がいいでしょうね。雲崎君も巻き込まれるでしょうから』

「すでに手遅れな気もするけどな。それで何もしなくていいんだな？」

『ええ。ここまできたら雲崎君にしてもらうことはなにもありません』

ん』

「んで、お前の本来の願いは？」

一瞬クロードディアの笑みが消えて真顔になる。

『何のことでしよう？』

「すつとぼけてんじやねえよ。例の教授と面会したいだけならバラすことにタイミングも糞もないだろうが。何か裏があるって考えるのが自然だ」

『大丈夫ですよ。全てが順調に進んでいますから。心配はいりません。では』

色々と聞きたいことがまだあったのだが、勝手に切られてしまった。思わずため息がこぼれる。

「……死にたいなら勝手に死にやがれっつての」

放っておきたいがヒルダには遥を目覚めさせてもらいたい。そのためには綾斗達の《獅鷲星武祭》の優勝が必要不可欠だ。もちろん、クロードディアも。

端末——特殊改造したものを取り出し、銀河の情報にアクセスしようとした瞬間に着信音が鳴り響く。通常の端末の方だ。

操作すると空間ウィンドウに黒バイザーをつけた女性が映し出された。

『久しぶりですね。《消失の魔術師》』

「……ペトラ・キヴィレフトか。何か掴めたのか？」

あの交渉をしてから数ヶ月が経っている。クインヴェールの情報網を持つとしても掴めないほどなのかと思っていたが、やはりかなりの諜報能力を持っている。

『《処刑刀》^{ラミナモルス}という人物はかつて《蝕武祭》^{エクリプス}で専任闘技者を務めていた男です』

「へえ」

自分が見たのはあの一試合だけだったがあの強さを見れば専任闘技者を務めていたというのも納得がいく。

『《処刑刀》との戦いは名前の通り、試合ではなく処刑をされるということの意味するほどに強かったそうです。姿を現すことは稀だった

ようですが』

つまりあの試合はかなりレアだったという事になる。

『彼は常に仮面をつけていてその正体は未だに不明です。最も、実力からしても有名な人物であった事は間違いないでしょうね』

仮面をつけていたところで正体は隠せるものではない。これが意味するのはその当時から、あるいはさらにそのずっと前から、『処刑刀』と『ヴァルダールヴァオス』は手を組んでいたという事が確定事項になる。

『それと、金枝篇同盟という組織に聞き覚えはありますか？』

「… ないな」

『私もです』

「はあ？ 統合企業財体幹部のあんたがか？」

そんな組織は警戒するまでもない小物がほとんどだが、今回に限っては話が別だ。

『《処刑刀》という人物はその組織に所属しているそうです。最近になってその名前が引つかかるようになったんです。これはシルヴィアの例の行動が深化した時期と重なります』

「…… それをオレに言っただけよかったですか？」

自分の学園の生徒会長の動向をわざわざ他学園の人間に、それもレヴォルフの人間に話すのは普通に考えれば悪手もいいところだ。

『元々シルヴィアのあの行動は知っていたのでしよう？ それにこの情報を漏らせばあなたもただでは済みません』

「優秀なこつて」

確かにそんなことをすればクインヴェールは大打撃を喰らうがそれは同時にペトラが理空との手を切る充分な理由にもなりうる。貴重な情報源が消えてしまうのだ。総合的に見ればクインヴェールが一番の貧乏くじを引くことになるのだろうが、理空にとっては旨味が一つもない。何なら ウオーレンアンドウオーレン W & W が理空を始末しようとしかねない。

『話を戻しましょう。金枝篇同盟という組織のその他の詳細は一切不明。直接的になにかがあったわけでもありません。ですが…… おそらく相当に危険な組織でしょう。あなたが警戒する『《処刑刀》』とい

う人物が関わっているとなれば尚更』

「ほとんどが勘か？」

『不満ですか？』

「いいや、オレも同感だ。勘だな」

人間の直感というものは案外バカにできない。実際に理空もそれに助けられた経験があるのだから。

『今回伝えられる情報は以上です。念のために言っておきますがシルヴィアがあのような場所に頻繁に行っていることは漏らさないようにしてください。これはお願いではなく警告です』

「オレじゃなくてあいつに釘をさしたほうがいいんじゃないの？」

『……………とにかく漏らさないように。では』

空間ウインドウが消えて部屋が暗くなる。

(銀河に金枝篇同盟、か)

思った以上に問題が多い。恐らく金枝篇同盟は数年、いや下手したら十数年以上の時間をかけて計画を進めてきている。それに加えて銀河だ。《フェニックス鳳凰星武祭》とは比べ物にならないほどの陰謀が渦巻いている。半分以上がクロードディアが蒔いた種であるのがやや腹立たしいが、自分から首を突っ込んでいる身だ。引き際を間違えれば死ぬだろう。

(諜報活動だけ、といきたいところなんだが果たしてそう上手くいくか?)

恐らく理空とクロードディアが協力関係にあることは銀河に漏れている。実働部隊に來られたら厄介だ。まあ、他学園の生徒を始末しようとするとなるとかなりのリスクがあるから実働部隊までは動かさないだろうが。

何も起きないことを希望しつつも内心無理だろうという考えも頭の片隅にあった。

そして後にこの懸念は当たる事になる。

*

星導館の敷地内で制服を着崩した男子生徒が複数人の黒装束によつて身体を押さえつけられ、それを木の枝の上から老人が見下ろしていた。

「よいか、愚息よ。我々の邪魔をしようとしてくれるなよ」

「…………… はいはい、わかっていますとも。俺も自分の命は惜しいんでね」

「良い心がけだ。それと、一つ仕事をやろう」

「…………… はい？」

「《消失の魔術師》が何やら嗅ぎ回っているとのことだ。その監視と必要があれば足止めをしておけ。『影星』を何人か貸してやる。必要とあらば——分かるな？」

「……………」

「不服か？」

「いえいえ、喜んで受けますとも」

「…………… ふん」

黒装束達と老人は姿を消す。思わず男子生徒は舌打ちをしてしまう。あれの言いなりになるのはひどく気が進まない。

だが、正直なところ《消失の魔術師》には前から興味はあった。ただ、情報が少なすぎて危険度が未知数なため今まで手を出してこなかったのだ。クローディアと繋がっていることを考えればあの内容も理解出来る。それらを含めれば今回の仕事は”納得”して実行できる。それは任務を受ける際にこの男子生徒が最も重視する点だ。

「あーあ全く、新聞部の仕事がまた溜まってくじやねーか」

そんな軽口を叩きつつも、その男子生徒は調査へと足を運ぶのだった。

夜吹英士郎

日も上らない時刻。星導館の女子寮のとある一室を双眼鏡で監視する。盗撮や覗きのためではない。クローディアの監視だ。

記者会見での挑発だけならまだしもあの頭のおかしい腹黒女なら更なる挑発をしてもおかしくない。母親が最高幹部を務めているのだから、面会もそう難しくはないはずだ。

監視をしていると案の定襲撃班が窓から侵入した。そのうちの一人がこちらの方角に振り向いている。ローブのせいではつきりと顔は見えなかったが、相当な手練だ。早々に離脱だ。かなり距離があるから追いつかれることはないだろう。一先ず綾斗達に連絡をしなければ。

「… あ？」

通信が取れない。どうやら妨害されているようだ。離れば影響から逃れられそうなものだが、通信を優先させている場合ではない。何せ数人の気配がこちら側へ近づいてきているのだから。建物から建物に飛び移り移動する。

到着したのは廃ビルの中。すぐさま複数人が着地する。同時に大きな瓦礫が飛んできたので能力で消し去った。

いや待て。なぜ自分は人が集まりにくい方へと向かっていた？

(この感じ…… ヴアルダに誘い込まれた時と似ている)

あれほど強い精神干渉ではないにせよ、何とというか、こう、人間の心理や習性をつかれたような感覚。まんまと嵌められた。

ローブを被った人間が9人。とはいえ先ほど理空の方を見た者ほどの使い手は誰もいない。

「… 久しぶりですね。《消失の魔術師》^{ヴァエイクアント}」

そう言った一人がローブを剥がして顔を露わにする。

「…？」

見覚えはあるが名前が思い出せない。

「… 確かアルルカントに唆された馬鹿だったか」

「サイラス・ノーマンです。以後お見知りおきを」

「お前ら『影星』だろ。なんでお前がいるんだ？」

「苦渋の選択でしたよ。地下に繋がれたままでいるか、使い捨ての駒になるか……僕に選択権はあつてないようなものでした」

手を大袈裟に仰ぐ。どうやら演出家気取りな面があるらしい。

「ですが、復讐のチャンスを得ましたよ！あなたにも、あの『叢雲』たちにも！」

「……」

「どうしました？声も出ませんか？」

「いいや。お前らにチャンスをやる」

「は？」

「今からお前らのことを殺していく。その前にもう一人について喋れば見逃してやらんこともない」

「…この数を見て何を言ってるんですか？僕が操っていた人形とはわけが違いますよ。一人一人が序列上位に入れるメンバーです」

そう言つて両手を広げた手の片方に生温かいものがかかった。

サイラスの一番近くにいた者の首から先がなくなっていたのだ。

首から下はそのまま血を噴き出しながら前に倒れる。

「…所詮決闘スポーツの中での上位か」

サイラスの顔面が白く染まる。他の『影星』のメンバーも素顔は見えないが同じような反応か、事態を把握できていないか、嘔吐するかのどれかだった。こんな様で学園の裏仕事を行うエージェントなのだから片腹痛い。一番躲しやすい箱の『相互移動』に反応すら出来ないようでは腕腕に関して0点だ。

「死にたくないならさっさと吐けよ」

もつとも、自分がその誘導した人間ならこんな素人達に情報を与えたりはしないだろう。事実上の死刑宣告というわけだ。

「あつ、あ、あなた、何をしてるかわかってるんですか！こんなことどう考えても星武憲章ステラ・カルダ違反ですよ！」

何を言っているんだろうか？裏社会のことを何も理解していないようだ。ついでにわかりやすく教えてやろう。

背が低く、座り込んでしまった者に対して発砲する。着弾しうめき声が聞こえローブで隠れていた素顔が顕になる。女子生徒だったらしい。だからどうということでもないが、『相互移動』で胴体真つ二つにする。残り七人。

棒立ちになつていた三人が固まっていたため首のあたりを狙つて『相互移動』を発動させる。二人は首が飛び、一人は顔の方に当たったのか、脳が一つ飛び散る。残り四人。

嘔吐して蹲っていた一人を縦半分に真つ二つにする。大量の血が噴き出す。残り三人。

まだマシな二人が居たらしい。同時に襲いかかってきたので攻撃を躲し一人の首辺りに銃口を当てて0距離で五発放ち、もう一人の胴体に発勁を当てて箱の『相互移動』で腹の辺りに大きな風穴を開ける。倒れると同時に腸や肝臓の一部ががずりりと出ている。念の為首に発砲した方も切断しておく。残るはサイラスただ一人。

「ひっ、う、ああ……」
先程までの威勢はどこへやら。尻餅をついて失禁してしまつている。殺そう。

「まっ、待つてください。貴方にはもう逆らいません！あの役立たず共とは違つてお役に立ってます！だから——へボウア!?」

威力を弱めた銃弾で腹に撃つ。
「状況を見てものを言え。オレの求めている情報を出せば見逃してやると言つてる」

逃げられないように両足の骨に穴を空ける。悲鳴があがるが五月蠅いので鳩尾を殴つて呼吸を止める。

「さて、最後にもう一回だけ聞く。もう一人はどこにいる?」

「ひっ、う、ああ……」

「もういい」

面の『相互移動』で首を切断する。目に映る範囲ではもう敵はいない。しかし全く安心できない。はつきり言つて雑魚ばかりだ。自分をここまで誘導できるほどの使い手がこの中にいるとは思えない。

(どっ!だ?どっ!にこる?)

状況から考えて『影星』とあのローブを被った連中は共犯だろう。この集団に与えられた命令は恐らく足止めもしくは始末。だがこんな素人共では力不足なのはわかりきっているだろう。しかし新手的敵が出てくる気配がない。まさかこの連中を捨て駒にした情報収集？

考えても埒が開かない。穴から飛び降りて下へと向かう。それと同時に黒い霧が突然湧き出てくる。

「……………っ！」

苦無が死角から飛んでくる。咄嗟に避けるがいつもに比べて冷たい汗が多く走った。

すぐに飛んできた方向を視認してフードを被った男(女?)を見る。星導館の制服を着ている。

どこか見覚えがある。短剣型煌式武装ルークスを起動し、小手調べに面の『相互移動』を数発放つ。フードの部分に掠りその素顔が明らかになる。

「随分なぐ挨拶だな、《消失の魔術師》さんよ」

サイラスの一件の際に現場に居合わせていた人間

―夜吹英士郎である。

*

「意外だな。こういうのにお前が参加するとは思わなかった」

「へへっ、いやーこっちも仕事なんでね」

「まあ命は惜しいか。『夜吹』の連中がうるさいだろうしな」

一瞬、顔が固まる。英士郎の事情はお見通しというわけだ。

(つてかあの時も思ったけどなんでうちの一族のことを知ってたんだよ！)

恐らく空汐の術も知られているだろう。手負だったとはいえ、今の一撃は『黒猫機関グルマルキン』の金目の七番を仕留めたものと全く同じものだ。

それを初見であっさりと防がれた。これは久しぶりにかなり骨が折れる相手だ。警戒のレベルをさらに上げた。

それは理空も同じだった。『夜吹の一族』^{ナイトエミット}についてはある程度知っている。実際に相対するのは初めてだが、予想以上に厄介なようだ。ほんのわずかな万応素を利用した暗殺術。加えてこの身のこなし。少なくとも《冒頭ペーの十二人ジ・ワン》上位クラスはあると見ていいだろう。いや、それよりも厄介なのはおそらくこの男は人を殺せるという点だ。例えば綾斗が相手だとしても死ぬことはまずない。だが、裏のプロは違う。必要とあらば躊躇なく殺せるだろう。英士郎もその類だろうと判断した。牽制も兼ねて『相互移動』を放つ。

英士郎は発動される直前に体をねじってそれを避ける。持っていた苦無には当たったのだろう。刃の部分がなくなっていた。

「ひゅー、あつぶね。喰らったらアウトだな」

これは本音だった。もし上手く体をねじれていなかったら地面に転がっている肉の塊と同じようになっていただろう。

とはいえ先ほど捨て石にした『影星』の連中のおかげで発動の際の法則性は掴みである。当たり前だが万応素が反応する。反応してから発動されるまでのごくわずかなラグを利用すれば避けられる。幸い、夜吹の術と違いかなりはつきりと反応する。軌道が見えないのが厄介なところだが、地の利がある今ならそうそう当たることはないだろう。

「にしても、能力の内容を一切明かさないうあたり徹底してるな。新聞部に所属してる身とすりゃあ、取材に答えてもらいたいもんなんだがな」

「この業界、実力よりも情報が大事なんでね」

それは英士郎も同感だった。情報の少なさを利用して地力では劣る人間が格上を喰うというのは多々ある話だった。《星武祭フェスタ》と違う点はそれで負けたら取り返しがつかない場合がほとんどだという点である。

(やっぱ正面から戦んのはマズそうだな)

当たり前のことだが、事前に準備をしておいたのは正解だったよう

だ。

英士郎の姿が暗闇の中に消える。気配は、感じ取れない。どうも普段に比べその手のものがうまく機能していない。

飛苦無が飛んできたので理空はそれを回避するが通り過ぎた苦無が地面に刺さる前にプツンと音が鳴る。すぐに逆方向からの攻撃が来る。短刀型の煌式武装が飛んでくるのでそれを回避しようとする。がその先に細い線が見えたので煌式武装を振るい防御する。

(…なるほどな)

おそらくこのビル内は英士郎による仕掛けが張り巡らされている。いや、今もリアルタイムで張っているのかもしれない。仕掛けは2種類。切れにくいワイヤーと切れやすいワイヤー。切れにくいワイヤーは不注意を犯さない限り見えるが引つ掛ければ動きが制限される。切れやすいワイヤーは動きは制限されないが見えにくい上、切れたら罠が発動するようになっていて。他にも仕掛けがある可能性がある。あるが一先ずそれは置いておこう。追撃が来ているのだから。防御と回避に徹し、攻撃を凌ぎ続ける。居場所が掴み取れないため下手に攻撃が仕掛けられない。向こうも『相互移動』を警戒してか、間合いを詰めさせてくれない。

正直、『瞬間移動』で離脱するのもアリな状況だ。空汐の術は暗闇と相性が良すぎる。おまけに幾重にも仕掛けられた罠。漫然とただ攻撃をしているとは思えない。始末も視野に入れていけるとなると、何か仕留められる自信のあるものを準備していると考えるのが妥当だ。

しかし問題はどこに移動するかということだ。勿論、人が多い場所、あるいは集まりやすい場所がベストだが、理空の能力は常にマニュアルであり、移動先と現在地の距離を明確に把握しておかなければならない。例えばシリウスドームへ移動したい場合でも「シリウスドームへ移動する」ではなく「どの方向へ何キロメートル移動する」としなければならぬ。つまり移動先が大雑把であれば良いが具体的な地名や建物に移動したい場合、遠ければ遠いほど発動までに時間がかかる。

仮に移動ができたとしても最悪なのは待ち伏せされているパターン

ンだ。『夜吹の一族』がどこにいるかわからないため、安易にその手は使えない。クローディアに人員を割いている以上、その可能性はかなり低い。もしそうであった場合、能力が割れてしまうだろう。と、なると仕方がない。多少の浪費はやむを得ないだろう。

――奴の必殺技を誘って凌ぐ――

*

(…おっ)

理空が動いた。短刀を駆使してワイヤーを切りながら下へと向かっていく。一階に着地し、理空の動きが止まった。万応素が反応し続けている。大技を繰り出す気だろうか。英士郎の居場所は察知できていないはずだ。が、敵が大技を出そうとしたときの最適解の一つは出させる前に仕留めることだ。

逃げようとしたところを狙おうと思っていたが、まあいい。もう準備は整っている。

(もう関係ないんだぜ？警戒とか注意とかはよ！)

気配を殺して慎重に降りて近づく。空汐の術を使用した状態で飛苦無を投げる。

理空から見て左斜め前から飛んできた苦無はそのまま心臓へと突き刺さる――直前で消え去った。

「…はあ!?」

思わず声を挙げてしまう。ハツとなつてすぐに口を塞ぐ。しかし無理もない。空汐の術は人の持つセンサーを一時的に断つ術。もちろん全てのセンサーを断つことが出来るわけではない。手練が相手ともなれば一つのセンサーを封じたところで別のセンサーで対応されるだけだ。それを封じるために英士郎は遅効性の空汐の術を組み合わせて全てのセンサーを断つ”五領封戮”というオリジナル技を使った。この状態では防御も回避も取れないはずなのだ。

(…まさか一定範囲内のものを自動的に消失させられる？いや

いや、んなチートがあるわけが……)

(…今のはかなりやばかったな)

当然そんな能力は持ち合わせていない。かといって空汐の術が効いてなかったわけでもない。実際に今の攻撃には全く反応できなかった。

単純に『相互移動』を身体の周りで発動し続けていただけだ。発動してまたすぐさま発動。この間を限りなくゼロに近づけたのだ。発動と発動の間隙を突かれぬ限り、全ての攻撃が『移動』される。理空が一步も動かなかつたのは英士郎の位置を探っていたのもあるが、『相互移動』に自分の身体を削られないためでもあった。

英士郎の手が効いていなかったわけではない。事実として、今の攻防で星辰力^{ブレイナ}が五割近くが消費された。理空の能力は正面戦闘では真価が発揮されない。むしろ戦闘になる前に決着をつける暗殺の方が向いている。仮に正面戦闘となった場合でも、短期決戦に持ち込むべきなのだ。星辰力が少ないとなれば尚更。

理想としては箱でも面でも線でもなく発動速度が最も速い点の『相互移動』で心臓か脳に中てるべきなのだが、流星にこのレベルの敵にそれは不可能に近い。しかし、苦無が服に僅かに刺さっていたためその角度から割り出すつもりでいたのだが、声まで挙げてくれたのは嬉しい誤算だ。

(少し派手になるが仕掛けるか)

「は……？」

発動させたのは箱の『相互移動』。ただしそれは英士郎を狙ったものではなく、この建物に対してだった。3階から上が文字通り全て無くなっていた。つまりそれは入念に張った罫や仕掛けがほとんど取り上げられたということだ。無論、隠れる場所も。上の階へ離脱しようと考えていたというのにそれが封じられた。一瞬の動揺の隙をついて脚に星辰力を集中させて接近する。

英士郎は目の前にいる。切り札と呼べるものもおそらく防ぎ切った。

(踏み、込め！)

界龍^{ジェロン}の拳士が多用する星辰力を部分的に集中させる技術を併用した右のオーバーハンドパンチ。鋭い。だが避けられる。

「……っ！」

目を思わず見開いてしまう。何せ理空の人差し指と中指が伸びていたのだから。

（眼が狙いかよっ………！）

流星に片方の視界を奪われてしまうのは辛い。今後どこか今距離感がつかめなくなる。指を伸ばした分リーチが数センチ伸びる。後ろに下がるだけでは扱られる。右側に顔をずらせ。視界の左を右拳が通過したのが目に入った。

その瞬間カツン、と音が立つ。英士郎の視界が若干揺れた。

——なぜ。躲したはず。ダメージよりも先に頭に駆け巡ったのは困惑。直後に目に入ったのは横に向いている理空の右拳だった。手首の力で強引に拳の軌道を曲げたのだ。

眼球狙いの方も囧。本命は顎だったというわけだ。

（やべえっ………！効いちまった！）

口の中は切れていないが脳を揺らされてしまった。意識が飛んでないのは幸いだ。当然、理空がその隙を見逃してくれるはずもない。

「くっ………！」

完全に立場が逆転してしまった。油断はなかった。事前の準備のおかげで終始優位に状況を進めていたはずだ。惜しむらくは情報。理空の能力がどういったものかももう少しわかっていればこうはならなかっただろう。奇しくも理空の言葉が現実として現れた結果だった。

（なんとか距離をとらねーとヤバイ！）

携帯している煙玉を投げる。懐から取り出したのはワイヤー。罠に使用していた切れにくい方だ。脚が思うように動かないのでこれを適当な場所に引っ掛けて距離を取る。

「甘い」

そう考えていたが、煙自体が消え去ってしまった。理空の『相互移

動』である。

(しまった、これがあった……！)

相手の遠距離攻撃を消し去っていたのは以前記録映像で見たことがあるというのに。

理空の周辺の万応素が再度反応する。あの不可視にして防御不可の攻撃が来る。身体を動かさなければ。

そう思いワイヤーを投げようとした瞬間に、手首に何か引っかかってしまい支柱に引っかけることを失敗してしまう。それと同時に浮遊感と背中に冷たい汗が走った。地面に対しての『相互移動』。英士郎が立っていた地面に小さな穴が開き両足が嵌る。すぐさまワイヤーで拘束する。

裏仕事に精通した学生同士の戦いが決着した。

*

一体何が起こったのか。腕を振った場所をよく見る。光に反射する一本の線があった。

「…まさかそつちもワイヤーを持ってるとはな」

「いいや、持ってなかったぞ？よく見てみる」

そう言われて巻かれているワイヤーをよく見る。

「…俺のを回収したのか」

張られたワイヤーを処理していたのは罫を削るためだけでなく手持ちの武器を増やすためでもあったというわけだ。

(はっ、完敗だな)

入念に準備をしたにも関わらず、向こうは限られた手札でそれを飛び越えて心理戦でも上を行かれた。

だが、それはあくまでも戦いの話。まだ終わりではない。極論、裏仕事は死ななければ負けではない。また出直せば済む話。拘束されたということとは交渉の余地がある。

「お前さんが今知りたいのはあれの行き先かい？」
「他にもあるが話が早いな。奴らはどこへ追い詰めようとしている？」

クローディアが、とは言わなかった。極小の確率ではあるが誰かに聞かれている可能性もある。

「呑んでもいいんだが、その代わりに俺の命を…。」

「分かったから早く話せ。どの道お前は使えるから可能なら生かすつもりだった」

もう少し話が長引くかと思っていたので肩透かしを喰らった気分だ。まあ、理空としてもこれ以上下手にここに留まりたくはないのだろう。

「… 港湾ブロックにいる」

これで終わりだ。後は理空がこの情報を綾斗達に伝えて自分が嫌いな連中にも嫌がらせができる。英士郎ではなく理空が伝えたとなればある程度自分に向く矛先も少なくなるだろう。全てが万々歳だ。

——と行かせてもらえるほど甘い相手ではなかった。

「その情報を今お前が天霧達に伝える」

「は？」

「他にもあるって言ったぞ。ってか責任逃れしようってんだろ？ 甘いんだよ。嫌なら死ね」

理空は勝手に英士郎のポケットから端末を取り出しハッキングされロック解除をし、音声通話を繋ぐ。空間ウィンドウが浮かぶ。

『英士郎？ どうしたの、こんな時間に』

「… あー、天霧、うちの学園の港湾ブロックだ」

『え？』

「ルートは送っとくぞ」

『ちよつと待って、何のこ——』

理空が通話を切った。というか今ルートを送ったのも理空だ。

「… なあ、そろそろ拘束を」

「それとこれを見させてもらおうぞ」

「げっ……………」

取り上げられたのは英士郎の端末。当たり前のようにこちらもロツクが解除されてしまう。

『影星』に対する行為が撮影されている可能性がある。それは英士郎も理解できるのだが、新聞部としての特ネタがいくつも入っているというのにそれを見られてしまうのは辛い。

「じゃあな。お前とは仲良くやれそうだな」

チェツクが終わったのか端末を投げられ、拘束も解かれ、皮肉も込めた発言を残して理空はその場から消えた。

「はっ、こっちはもう御免だっつーの！」

後ろに倒れ大の字になりながら叫んだ。